
問い合わせ「探しものは何ですか」 答え「転生前の友人です」

さんすべりあ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

問い合わせ 「探しものは何ですか」 答え 「転生前の友人です」

【NZコード】

N4045Y

【作者名】

さんすべりあ

【あらすじ】

防御区の外では妖獣が暴れる世界 あるいは時代。主人公は最年少で妖獣を狩るライセンスを得たハンターである。昼は学校、夜は狩り。そんな彼は自分の名が広まることで、友人が会いに来てくれるのを待っていた。

- - - 初投稿なので、温かい目で見ていただけるとありがたいです。いろいろ王道のはず。たぶん。違うかな。

プロローグ（前書き）

長いです重いですシリアルアスです。
しかも途中で『苦手な自主避難してください』だの『いつそ精神年
齢R20でお願いします』だの警告文まで出でてきます。

それでもよろしければ、お付き合いで下さいませ。
(と書いているのが、Hプロローグ書き終えた後なんだからグダグダ
です（苦笑）)

プロローグ

ひとつ影が木の下に振れていた。

ゆらり、ゆらり。

木の幹にいた小さな白いものは、たった今それに気づいたようにふつと頭を上げた。黒目しかないつぶらな瞳が、振り子時計のように揺れる影を追う。ゆらり、ゆら。

首を傾げた小さなものは、冷たい朝の空気にぶるりと身を震わせると、苦労して右前肢を伸ばした。次に左後ろ肢。ぴんっと四肢をつっぱると、一気に木を駆け登った。幹から手前の枝に飛び移り、影へとつながる一番近い位置へと走った。

そして繩は無視して、枝から直接影へとダイブした。

その時、朝日が影を照らした。

長い、膝まである長い髪の若い娘の顔が白い靄の中に浮かんだ。

深く刻まれた苦悶の表情は、爽やかなはずの朝日さえ葬送の色に染め上げた。靄と早朝の光を死装束に変えてまどった娘は、首を吊つた際に吐いたのか口元を汚していたが、そうであつてさえ厳肅さは失われもしなかつた。

白いものはしつぽでバランスをとりながら娘の頭から肩へ飛び回っていたが、彼女の顔に小さな鼻を寄せてフンフンと嗅ぎ出した。そしてカリッと引つかくと、興味を失つたように離れて行つた。

健康のために毎朝走っているメタボリック気味の男性が、その木の植えある神社の境内にさしかかって悲鳴を上げる頃には、その白いものはどこかに去ってしまった誰にも見つけられなかつた。

プロローグ（後書き）

12月15日、前書きを追加

1 卒業式は欠席しました。

「まどかー。聞いたか？ 田島涼湖の呪い」
たじまりょうい

突然後ろから声をかけられて、まどかはつるさげに白鳥へと振りむいた。

どこなく険悪な視線を向けられた白鳥はそれでも粘り、手近な机の上にあぐらをかいて、悪意のない笑みを見せる。

「なんでお前がここにいんだよ」

「はっはっはー、驚いたろ。大成功。一日遅れの卒業証書をもらいに来た友人、一名様、あんなーい。それよりさ、聞いた？」

懲りない男だった。

不機嫌になつて、まどかは見納めとなる中学校の教室に視線を逸らせた。

不登校その他で卒業式に出席しなかつた生徒は何人もいるが、さらに不都合な理由で出席できなかつた生徒もいる。まどかと涼湖と、その涼湖の呪いで殺されたと噂されている女子二人だ。

まどかはハンターの仕事で、涼湖と女子たちは自殺で。いずれにしても、一般生徒の保護者は眉をひそめたはずだ。

「あれ？ まどかって田島と知り合いだつた？」

逸らせた視線を追つた白鳥が、彼女の机をじっと見てゐるまどかに、氣づいてとぼけた声を上げた。

「……友達つていう意味じゃなければ、知ってる
誰だつてそうだ。」

「それにしても、ヒトが三年間の思い出に漫つてる時くらい、氣を
きかせて黙つて欲しいんだが。お前にそういう気がつかいを期待す
るのは、やっぱり無理なのか？」

「まどかが漫るつてナニ？ 本氣か、正氣か、ありえない！
黙つていて欲しくて適当に言つたら、さらば騒がれてしまった。

もつ口イツには何も期待するまこと思いつつ、溜め息をつく。

だが、そんなとぼけた友人に、涼湖の机を見ていたのを氣づかれ
るとは思わなかつた。安全な場所だと氣を抜いていたせいだ。隙だ
らけだつたかもしれない。

涼湖は全校生徒どころか、区内でも知らない者のいない有名人だ
つた。

悪い意味で。

腰を越えた長い髪と切れ長の目をした彼女は、まるで平安時代の
女のようだつた。彼女を見かけるたびに雛人形を思い出したくらい
だ。

もつとも涼湖は、まどかが見ているなどとは思わなかつただろう。
学校ではいつも数人の信者の熱心な瞳に囲まれて、さらば一般生徒
のうさんくさげな視線にさらされていたから。

靈能力があるという噂だった。

無くした物を捜しあてたり、事故を予言したと聞いた。

だから一度、まじかは信者を押しのけて彼女の正面に仁王立ちになつてやつたことがある。

『オレは円城円。えんじょうまどかハンターとしての名は静義』さやぎ

勇猛で知られるハンターのライセンスを持つことはどうでもよかつたのだが、反応を見たくて名乗ってみた。しかし残念なことに、彼女はまどかの期待を裏切った。

『あたしは巫女。加護を望むの?』

涼やかに微笑んだ表情はそれしかつたが、求めているものとは違つた。

彼女は静義の名も氣にとめず、望むものも当てられなかつた。

『ハズレ』

彼女の信者に無礼だと一斉に非難されたが、氣にもならなかつた。席に戻る。内心へこんでいたのは、仲のいい三村の他に誰も氣づいていない。

『何しに行つたわけ。探し人だと思ったの?』

『……ちょっとだけな。そうでなくても、アイツを見つけてもうれしかと思つた。でも、ダメっぽい』

あれなら山櫻桃の方やまざくらが上だ。そう思つて頬杖をつけば、勝手にため息が出てしまつた。

三村が肩をすくめてメガネのブリッジを押し上げた。

『声かけたんだから、ちゃんと説明して、形だけでも探しても『うえぱいいのに。あれだと、田島さんのとりまきの恨みを買うかもよ』もつ関わらない。一回話しかけただけで恨まれてたまるか』

『円城くん、君自分が目立つて分かつてないの？ 普通に話しかけるならともかく、女子的には今の、充分にイベントだったよ。だから、恥をかかされたと思われるかも』

『知るか』

三村の懸念けねんは取り越し苦労で、信者がまどかに言いがかりをつけてくる事はなかつた。

靈能者と公言する涼湖のことは、それで苛められたりもしてゐるんだから言わなきゃいいのことに気になつたが、イベントとまで言わると一度も話しかけるのも躊躇ためらわれた。彼女は孤立していただつた一言の忠告でさえ目立つのだ。

いつもまとわりついている信者以外、生徒はみな涼湖から距離を置いていた。

当然といえば当然だ。

自分の常識と違つモノを拒否する大多数と、周りを知りうともしない涼湖。

どちらにも共感できなかつたから、まどかは放つておいた。

そして 涼湖は卒業を控えたある日、首を吊った。

その日から彼女の呪いといつ噂が流れ始め、今日に至る。

1 卒業式は欠席しました。（後書き）

初心者です。見やすさとか、こんな感じで大丈夫でしょうか。
ひとついただけると喜びます。ぺこり。

2 あにつてたてじまじ

「昨日、安部が死んだんだってさ。いじめに加わってた女子グループの。前の人と似た感じで、錯乱して走り出して、ベランダから飛び下りたんだって」

放つておいて欲しいのに、おしゃべつな田島はまだ勝手に話していた。

「卒業式当日つても凄いよなあ。涼湖つてホンモノだつたんだつて、今さらびっくり」

「こちちは、お前がここにいることにびっくりだ。卒業を惜しんでくれる下級生ならともかく、男に待たれても嬉しくない。

「うざい。わざわざ卒業後の学校までそんな話をしに来たんなら、よっぽどの閑人だな」

「何だよ、まだかだつて妖獸をぞくぞく殺してるくせに。人の死を興味本位で語るなどか言つ? こんな時だけカッコつけんなって」「あれは『殺す』じゃなくて『倒す』。生物ですらないんだから」

三年の教室を出て昇降口に向かうまどかを、白鳥がバタバタと追いかけて来る。

「この友人に悪気はないのだが、空氣を読む力もナイ。

聞いた話だから本当かどうかは知らないが、涼湖が自殺した理由

は最低だつた。顔とノリがいい女子グループが、かなりひどい事をしていた。

それを知つてさえ平氣で噂話ができる白鳥の神経は、わざとまどかより太く、粗い。

「つて帰るなよ。円城センセ、待つてー。違うの、俺こうこう話をするために来たわけじゃなくて、本当は三村たちとか皆で卒業パーティしようつて誘いに来たの！ きれいじいの女子もいるし、用意はできてるし、だから三村ん家いこうー！」

階段を駆け下りたついでに口けて最後の一三三段を滑り落ちた友人に手を貸して、まどかは眉をしかめた。

「だつたら最初からそう言えって。誘いに来る人選まちがつてる。迎えが白鳥だつたら話がずれまぐるつて、分かるはずなのに」

「ひでえ。まぢかまでそういうコト言つ？ セつかく同じクラスになつたよしみで友情を深めようとしてる、この俺の優しさを理解しろ」

「高校か？ お前と同じクラス？」

一人で連れだつて中学校を出ると、体育の教師が手を振つた。会釈程度に頭を下げるまどかと、両手を大きく振り返して「また遊びに来るつす」とはしゃぐ白鳥。

まったく性格の違うコレと一年付き合わされるのかと思つと、今から疲れる気がした。

白鳥は一応イイ奴だが、隣にいて欲しいとは思わない。できるなら無関係な、遠い遠い場所で幸せになつてもらいたい。

そんなまどかの気持ちも知らず、彼は元気よく初春の街を歩く。

「ガッコから通知来たる。二組つて、三村に聞いたぞ？ 男は、俺とまどかと三村と山本が一緒。よろしくな」

「山本もかよ」

若干声が低くなつたのを察して、白鳥が慌てる。

「さすがにあいつは呼んでないから。大丈夫だから楽しもつ！ な？ な？」

「分かつたからそこまで氣をつかうなつて。オレどんだけ危険人物だ」

「いやいや、事実キケンなハンター様でしょ」

「人間相手には無害だつつの」

どこまでも墓穴を掘らざには済まない友人を、もうつたばかりの卒業証書（缶入り）でポコンと叩く。

大げさに騒ぐ白鳥の相手をしていると、神社にさしかかった。

涼湖が自殺した場所だ。

思わず足が止まつていた。

今はもう何もかも片づけられていて、境内は芽ぶきを待つ風情し

かない。死の匂いもなければ、どの木に首を吊ったのかも分からない。

当然だ。

普通とは違うが、まどかは靈能者というわけではない。

それでも、どうしても気になった。

今ここに探し人について欲しいと思った。

「……まどかつて、田島が好きだったとか？」

「ハズレ」

もう一度卒業証書で白鳥の頭を叩くと、まどかは先に立つて三村の家へと歩き始めた。

3 はんたー + はんたー

数日後の夜。

かすかに物音がした。まどかは曇つて星の隠れた空から視線を戻した。

防御区の中ならともかく、外で気を抜くことはない。近づいて来る足音。異質な気配。

三匹が同時に飛び出してきた。

集団で移動するのがこの妖獣の習性だつたから、予想の範囲内だ。さらに言えば、最悪の事態として十数匹を予想していたので、数が少なくてちょっとだけ安心した。

狙つて来たとはいえ、コレと戦つのは初めてだ。

まどかはすでに抜いていた剣で一匹に斬りつけた。

表面が硬くて一瞬刃が止まつたが、踏みしめる足に力を込めて体重をかければ、水晶みたいな音を立てて砕け散つた。あとは勢いのままに断つ。

断つというより叩き割るといった方が正しくて、刃こぼれした感触が手に伝わつて來た。

「あーあ。せつかく砥^とぎに出したばっかりなのに」
返した刀で、//ラの魔法と拮抗勝負をしていた妖獣を両断する。

「砥いだだけで斬れる方がおかしいって分かつてる？ てか、どう考へても物理攻撃すべき相手じゃないから。ふつうは高位魔法で退治するモノだから！ ああもう、怖かったーっ？」

そこまでの大技を使えないミヲは、額にびっしりと冷や汗をかいだまま文句を言つた。

「だよなあ。それを一撃で倒すお前ってどうよ」

廃墟の崩れた石柱の上にあぐらをかいだ鬼灯きとうが、呆れたように咳きぶやく。

彼も大刀を使うが、その妖獸を倒すのは明らかに面倒とわかつていたので、座つて樂をしていた。

が、もう一匹の妖獸が、彼の妹のいる別の石柱の上に向かつて行くのを見て、立ち上がる。大刀をふりかぶつて柱から飛び降りると、重力を利用して妖獸の背中に一撃を『えた。亀の甲羅こいのこ』のような外装を、加速と重さで押し潰す。

「ありがとつ

少女の濡れたように黒い瞳が、笑みの形に細まる。かぼそい声で山櫻桃やまざくらは言い、詠唱をやめた。途端じたんに、まだか達を包んでいた能力増強の力場が消える。

「まあねえ、狩りに引っ張り回してるのは俺だし。ここで山櫻桃に

ケガさせちゃつたら、お兄ちゃん失格」

「このシステム。ちょっとは静義を見習つたらどうなの。女を地面で戦わせて自分は安全地帯つて、ありえなくない？」

げし、ミラが鬼灯の背中に蹴りを入れたので、鬼灯は石の断面に似た妖獸の死骸に顔からつっこんだ。容赦ない。

「ひどいなあ。だつて俺、こんなのに直接向かつたつて役に立たねえもんよ。しかたないだろ。これも作戦」

たつた今その妖獸を倒したのだから、役に立たないはずはない。割れた外装に余裕でもたれかかってヘラヘラ笑う様子は、ミラでなくともツッコミを入れたくなる。

「偉そうに言つな つ！」

案の定、ミラはきつくカールさせた金茶の髪を振り乱し、げしげしと彼を蹴りはじめた。

「ぼうりょくはんたーい」「ふざけんな つ！」

「……よく飽きないな」

魔法が専門の女性なので蹴つても痛くはないし、鬼灯も分かつてやられているので、まどかは口を出したりはしない。この二人はいつもこんなふうで、冗談で本気を隠したり、無言の了承のうちに実力全開のケンカをしたりしている。

ハンターが全力つてどうだよ、と思つたりするけど。
心配するだけムダだ。

それでも山桜桃だけは石柱の上でおろおろしていた。

他人の感情より先に『力』が見える彼女には、そのケンカが『力』の暴発と感じられているのかもしれない。薄い肩をさらに小さく縮めて、両手を組み合わせている。

人とは交わらない異質な美をもつ彼女のそんな姿は可憐だと思わなくもないが、小さな村なら一匹で破壊する妖獣を目の前にしても平気で詠唱できるのに、兄と仲間のふざけたケンカに涙目なのは、こつけもこつけで何か間違ってる。

「 北部一〇七番隊、 静義^{さやぎ} 絡居^{じゆい} の森で甲犀^{こうさい} を三四退治した」

いずれにしても心配するまでもない三人の日常は放つておいて、まどかは国家保全局の支部へ連絡を入れた。

『ニード名乗り、仲間が呼ぶ『静義』という名は、彼が狩りに出る時の登録名だ。

『『ハハ』や『鬼灯^{きとう}』も同じく登録名称だ。

一人では危険な狩りを成功させるためにハンター同士組んだだけのチームだから、まどかは彼ら三人の本名を知らない。

一年前、それなりに成長して戦えるようになった時、まだ中学生の自分を受け入れてくれるハンターはいなかった。

ただでさえ死と隣り合わせの上、ほとんどのハンターは狩りを職業として行っている。

仕事に、足手まといになりそうな子供を連れて行く大人はないだろう。唯一受け入れてくれたのが、鬼灯たちだった。

鬼灯は、子供を一人で狩りには行かせることはできないと職員に登録を拒否されていた自分の肩をつづいた。うちに来なよ、と。

予想より全然イケメン！ とはしゃいだのはミラで、山桜桃は鬼灯の後ろに隠れながら自分をひつそりと見つめていた。

その物静かで臆病おくびょうな少女が自分を誘えと二人に言ったのだと、後から聞いた。

強い『力』を持つまどかがいれば、兄やミラが狩りで傷つくことはないと思うたらしい。魔力の鑑定をする人間はいるが、生命力こみでの『力』を感じられるなんて聞いたことがなかったので、初めは単純に驚いた。

そして今は、こつそりひつそり頼りにしてもいる。
自分を見つけたように、もう一人見つけないだろうか、と。

『甲犀を、三匹い？ 相変わらず凄いな。甲羅はお前らで持つてこれるか？』

雑魚ざいゆならいざしらず、大物妖獣である甲犀の輝く外装は貴重だ。

宝石としても価値があるし、その硬さを活かした素材となることもある。

「重いから回収に来て欲しい」
けつこう大きかったので念のため携帯カメラを甲犀に向けると、まだそこにもたれていた鬼灯が√サインを出した。ケンカを一時中断して、ミラも可愛らしくポーズを決めたりする。

『……りょーかい。成獣なわけな。料金は報奨金と外側売った代金から引くって事で、軽トラまわすから』

「よろしく

その会話から時間がかかりそっとふんだのか、山桜桃が短い詠唱で妖獣避けの祓いを行つた。

兄が彼女に手を差し伸べると、その手につかまり、よろけながら柱から降りて来る。

そして背負つていた羽根モチーフの飾りのついた鞄から、レース模様のペーパーでラッピングした手作り菓子を取り出した。

4 戦場でお茶会を

出てきたのは、山櫻桃^{やまざくら}手作りの菓子である。今日はドライフルーツが入ったパウンドケーキと「アクラツキー」だった。

ドリンクボトルから紅茶まで注いで用意するので、場は緊迫した戦場から一転して、お茶会になる。

「仕事の後の一一杯はうまい。ねえねえ、コレビギヤッて作るの？なんか本格的な味」

「そこで『ふはー』とか言つたら、オヤジ決定。俺、潤いのないチークなんて嫌だなあ。ついでに口ツ記いたつて、作んないのに」

「つるわー・うるわー・つるわー。鬼灯は黙つてお菓子食べて！あたしは山櫻桃にきこてるの！」

ミリは手近にあつた物を投げつけようとして、それが甲犀の欠片だと気がついて手を止めた。きれいーとか言つて、嬉しそうにデニムのミニスカートのポケットにしまつている。

「……そういうコはなんだよねえ」

「ほ…壊めているのか貶^{けな}しているのか微妙な口調に、またミリがムツヒ顔を上げる。

さわらぬ神に祟りなし、である。まどかはクッキーをつまんだ。甘い。だが、戦闘でとがつた神経を休めてくれる。

「うまいな、コレ」

「良かつた」

また二人のケンカにオロオロしていた山桜桃が、小さな笑顔を見せた。

「…………」

明らかに年下の一人の方が落ち着いていて、そしてこのままだと確實にまどかが菓子をすべて食べつくすと思われて、ミラと鬼灯は口論をやめた。急いでクツキーに手を伸ばす。

「成長期は分かるけど、一人で食うなって。そういうばあ前、明日から高校なんだろ。こんな夜中までうろついていいのかあ？」
「別に。どうせ入学式と簡単なオリエンテーションだけだし、寝てもあんまり関係ない」

「いやソレ間違ってるから。オリエンテーション聞いたとかないと、正しく単位とれないから。困るから」

「それは大学だろ。鬼灯の実体験？」

「なになに、鬼灯つたら留年の危機なの？ もしかして来年度はあたしと同級生？ ウケるー」

けられると甲高い声で笑ったミラは、大物をしとめてハイテンションになっているのかもしけなかつた。バンバンと鬼灯の背中を叩いて笑い続ける。

「あの、ミラ。お兄ちゃんをいじめるの、やめて」
山桜桃が、半泣きでよつやく言つた。

ミラは今度は少女の首に腕を回して引き寄せ、ストレートの黒髪

をぐしゃぐしゃと撫でまわした。笑顔の相手に抵抗もできず、山桜桃は硬直している。

「いじめてないいじめてない。大丈夫よお、鬼灯、頑丈だから。それよりお兄ちゃんが留年つて嫌じゃない？」

「まだ落ちてないからー。泣き落して履修届(りじゅうとづけ)を受け取つてもうつたし、明日の再々試で受かれれば三年になれるし。だいたいお前、保全局から声掛かつてたんだろ。無試験でキャリア待遇つて。ソレ蹴つてうちみたいな二流大学に来るなよお」

ミラの瞳がすっと細くなつた。

彼女は唇を尖らせ、これみよがしに山櫻桃(やまざくらとう)に抱きつく。

「キャリアなんて、保全局もあんたもバカみたい。分かんないの？
彼女が不機嫌なのはわかる。

「必要なのはあたしじゃなくて、北部一〇七番隊の人間。うちのチーム、短期間に凶悪妖獸をざくざく倒しちゃつたから、目立つちやつたのよね」

小さな少女はなんとか脱出しようと、ぱたぱたと手足を動かしたが、そのくらいでミラが放すわけがない。ますますぎゅっと抱きしめている。

美女と美少女なので絵柄としては文句なしだが、ミラの瞳にあるのは、その評価がつまらないと思つてゐる冷静な色。

仲間をからかうフリでもしていなければ、やつてはいるのだ
ら。

「今日の狩りもそれだけど、ハイレベル危険バシバシな場所に行きたがつて妖獣倒すのは静義じゃない？ あたしなんて、入局したつて即戦力にならないつてすぐに切り捨てられるわ。それくらいなら、大学行つて自力で就職でもなんでもした方がマシ」

彼女のプライドが傷ついているのにやつと氣づいて、鬼灯は慌てる。

彼はハンターとしての実力もあり、作戦を立てる時は思考も回るのに、こうじうところは少し鈍い。

でもたぶん、その鋭さと鈍さのアンバランスをミリは気に入っているのだと思う。

実は自分もだ。まじかは小さく笑った。

「お前なあ、自分が原因なのにそこで笑いますか

「ミラは分かつてゐる。オレがどういう言わなくたって、折り合いかんてちやんとつけてる。謝つたらきっと殴られる」

それとも（比較的無害な）戦闘中に、蹴られるか踏まれる。

「良く分かつてゐるじゃない。でー？ 静義つて、どこのガツコ行く

の
「南東北」

パウンドケーキを一口で食べながら答えるが、ドライフルーツが歯にくつついてしまった。しかもとれない。ちょっと不幸。

「西ナシ高かあ、ウチらの大学から近いね」

「それで選んだわけじゃないけど、募集人数多いから楽に入れるし」

「どうせくつついたんだから一個も二個も同じだと、両手に菓子をキープしてみる。」

「食べるたびに歯にくつつくモノが増えたが、後で気にすることにしよう。」

「だったら、道ですれ違つたりするのか。もし声掛けの時、静義でいいか？」

「思いついて、鬼灯が顎あに手を当てて尋ねた。

「ハンターであることをオープンにしているならそれでもいいが、隠している人間もいる。」

「ハンターとしての自分と、防御区域内部での自分を分けて暮らしたい者もいるからだ。」

「防御区域内で暮す人間の中には、凶悪な妖獣を倒すハンターを粗野で怖いだけの存在として考えている者もいる。」

「それが恋人だったり上司だったりしたら、狩りの仕事をしたくても遠慮する人間が出るかもしれない。」

「できるだけ多くの人間に妖獣を退治してほしい国家保全局は、そのへんまで考慮してみたわけだ。」

「お役所仕事のくせに細かい。」

「もつともその配慮は、人間の生活空間を荒し甚大な被害を出す妖

獸に、本氣で困つてゐるといつて証しでもあつた。

「それとも、あたし達にも内緒？」

「や、そんなこと無いけど。オレ、本名は円城円。えんじょううまいか 内部で会つ時は、まどかで頼むわ」

「お兄ちゃんたちはそのまま呼んで大丈夫。もちろんわたしもね」

本当の名前・まな真名まなを使ったほうが魔法関係には+0・1くらいの修正がつく。生活空間での人間関係に問題がなければ、山桜桃とミラは登録名を実名にしたほうが効率がいい。

「静義、つりん、まどか君……ハンターなのを、隠してるの？」

ミラの腕から脱出するのは諦めて、次々と菓子を食べる様子を見ていた山桜桃が首をかしげた。

5 探し物はなんですか

「いや。隠してんのとは違うんだけど、人探しの一環で

「ああ。なんか言ってたねえ」

ポンと手を打った鬼灯きちようを、ミラがどついた。猫に似た吊り目が光る。

「『なんか』じゃないでしょ。中学生がカラダ張つて人探ししてるのが、忘れんなドアホ」

……ミラは大阪人なのだろうか？

かなり激しいツッコミに苦笑いし、まどかは山櫻桃やよいだから視線を逸らせた。

探し人の話が出た時の少女の寂しげな雰囲気は、自分が原因だと分かつっていてもどうしようもない。

まだ、話したくない。

彼らを信じていろつもりだが、全部を打ち明けたら正氣を疑われそうで嫌だ。

そういうこと自体信じられないけど、山櫻桃は悲しんでいるのだろうけれど。

「覚えてんじゃない。だったら、どうかせるみうな発言しないでよ」「だって詳しく聞いてないからなあ。確かに、名前がマスクマスクに取り上げられるくらいになつたら、会いに来てくれるかもって言つてたけど」「覚えてんじゃない。だったら、どうかせるみうな発言しないでよ」

「いや、今の//トロビヤなかつたらビツかな」って

またもやケンカが始まリそうだつたので、まどかはナイナイと手を振つてみた。無関係な時なら放つておくが、自分が話題の時にやられると話が終わらなくて困る。

「田端的に呼ばれて、本当の名前つて誤解されたら無意味だから。『まどか』が『静義』を名乗る理由つてトコに気づいて欲しいわけ」

「結局説明になつてないわよ。なあに、生死もわからない生き別れの家族でもいるのー？」

明らかに信じていらない口調で言われた。

まどかは首を横に振つた。

ベタすき。何時代の感動ドキュメンタリーだ。

「家族じゃないけど、生死は不明かなあ。万が一生きてたとしたつて、ここにいるかどうかなんてゼーんぜん分かんないし」

「……それ、売名行為の意味あるのかなあ」

鬼灯に考え込まれて、まどかはまた首を振つた。

「いいんだ。やれる事をやつておきたいだけだから
たぶん自分でも、本当に余えるとは信じてない。ただの自己満足だ。」

「もし会いに来てくれたら、びづするの？」
まどか
惑う声で山桜桃に訊かれた。

「どうもしない。ただ、いるなら会いたいだけ」

まどかがあっけらかんと答えると、山桜桃が細い眉を寄せ、ミク
が深いため息をついた。

そして鬼灯は女性一人の様子にきょとんとして、良くなからない
からまあいいかあ、と菓子をつまもうとした。が、クッキーもパウ
ンドケーキも、もはや食べカスしか残っていない。

「静義……」

「食べたかったら、キープしどけって。誰も食べなかつたら、いら
ないと思うだろ?」

「その前にお前が全部食つてるんだ! 返せ、山桜桃の手作りをか
えせえええつ」

妖獸しかいないはずの廃墟にむなしい遠い吠えが響き渡り、甲羅
の回収に来た業者をびくつとさせた。

*

その夜、また一人少女が死んだ。

同じ中学、同じ人物をいじめていたという共通点を持つ被害者と
して、三人目。

その窓辺から、白い小動物が走り去つて行つた。

6 高校の入学式には出れました

入学式はあいにくの雨だった。

「寒つ」

「そりや、そんな格好かっこうしてれば寒いだろつよ」「よひりまつよ

白鳥は、「デザインはいいが薄いコートを着て来た。まどかが腕を上げることで友人を引きはがすと、彼は今度は反対隣りにいた三村にくつついで熱をもらおひとする。

「だつてイイ女がいるかもしだねーし。第一印象つて大切だろ」「だつたら服より行動に気を配れよ。ガキみたいにはしゃいでる時点で、マイナス評価されんじやないのか」

言いながら、三人で始業式の行われる体育館へ向かう。

南東北高校は防御区域では最も学生数の多い高校なので、小学校や中学校で一緒だった学生が確実にいる。

「まじかに言わると、三村に言われる三倍くらい腹立つぞ。凄腕すさまじわざハンター様でその外見、努力しないでモテる男に俺の気持ちはわからん。俺はしゃべりと優しさを強調していくのだ。実際に正しいアップーチ。さすが俺」

「白鳥くん、今までに君が僕を三倍けなしてるつて理解してる?」

体育館にはすでにたくさんの学生が集まつており、騒いでいる二人には迷惑そうな、あるいは面白がった視線が注がれる。ついでに、

話す内容が聞こえた生徒達は驚きの表情を浮かべている。

「ハンター？ 高校生で？」

「知ってる。一中の生徒で最年少のがいるんだって」

「すげえな」

「やだ、怖いって。あたし小学校一緒だったけど、今はもう近寄れないよお」

ざわめきは、大多数という仮面の下に隠れて発言者の特定はできない。

まどかも誰が言ったかはどちらでもいい。無責任な憧憬とうけいも逃避さけいも、求めているものとは違う。

探し人が自分の名に気がついてくれればいいとは思つので、そうして噂が広まつていいくこと自体は満足だ。

事前に通知されていたクラスを探して歩いていると、そういうえば、と白鳥が周囲を見回した。

「山本見てねーけど、ショッパンから遅刻？」

「そぼりじゃねーの？ あいつ、学校なんてどうでもいい派だろ」「三人と共に同じ中学出身で同じクラスになつていた男子の名をあげた白鳥は、もう一度左右を見回してから、探すのを断念した。もしいたにしても、人が多すぎて見つけるのは困難だ。

まどかは最初から探す気などない。

げん 山本はまどかがハンターをしているのが気に食わないらしく、機き

嫌が悪そうな時に会うとイヤミを言われた。

さすがにケンカを売つて来ることはなかつたが、そんな相手の出欠を気にかけてやる義理はない。

「一日目にさぼりだと、女子の印象が悪くなるのに」

「白鳥くん、君の頭の中にはそれしかないのかい」「ない」

断言されて、三村はため息でメガネを拭いた。

聞こえていた女子がくすくすと笑つている。気づいた白鳥がぱつと笑顔を向けた。

「どうもー。ね、ここって二組？ 三組？」

「二組」

ノリの良さに苦笑した女子の一人が律儀に答え、彼女の前後に並んでいた何人かが互いに笑いあつ。女の子同士の、無意味で防御的な、「ミコニケーションツールとしての笑い。

「やつと着いたー。入口からここまで長かつたー。あ、俺たちも二組」

よろしくー、と自己紹介を始めた白鳥を置いて、まどかと三村は男子の列に移動しようとした。

が、友人の手がコートをつかんでいて放さない。

「……」

巻き込まれて一方的な紹介をうける一人を、女子の一団がまたくすくすと見ている。

何人かの視線が好意的に動き、まどかと三村は互いに肩をすくめ

あつた。

女子にモテたいなら、自分たちは明らかに邪魔だと思つのに、白鳥はこうしてグループ作り（最終目標はもちろんオツキアイだ）を田指して自滅する。

「あたしは加賀森かがもりほのか、向中むかこちゅうだよ。こつちは江上冬えがみふゆね。隣みどりなみが区立中の湊奈波みなとななみで、その隣隣が」

加賀森といつ、はじめに白鳥に答えた少女が周囲の女子を次々と紹介してゆく。

女子の方が男より集団を作るのが早いのは自明だが、入学式が始まるまでのわずかな時間にこれだけの名前を覚えるのは才能だ。

しかしどまどかは、感心するより顔をしかめた。

「冬ひつて、春夏秋冬の？ オレ、ハンターの登録名は静義ねいぎつてんだけど」

茶色つぼみに髪の小さな少女は、困ったように視線を落として加賀森に身を寄せた。

「なあに、田城くんつて冬みたいのが好みなの？ そりじゃなかつたら、迂闊うかつに声をかけるのはやめてよね。世の中は草食系主流なんだから」

だからハンターお役所が登録名こまで気を配るのだ。

ハンターについては白鳥がしゃべったので、乱暴なのが苦手な女

子は、すでにまどかと精神的に距離を置いている。逆に気にしない女子は興味を持つて観察してくる。

冬という女子は前者、そして加賀森は後者だ。

「珍しいね、円城くんが初対面で気にするなんて」

「一目ぼれか？ まさかそうなのか？」

三村が冷静に指摘し、白鳥が調子に乗つて騒ぎかけた。

楽しそうな女子と、友人をかばう加賀森のにらみに負けじ、まどかは両手を上げて降参した。女子に騒がれそうな時にはこいつするのが一番だと、鬼灯とリリカのやりとりで学習している。

「そうじゃないって。はいはい、スマスマセン。誤解させたオレが悪い」やいました

完全に加賀森の後ろに隠れた少女にペニンと頭を下げるが、本人の代わりに加賀森が笑つた。

「誤解はしたのは、その若干一名だけ」

「って俺？ ほのかちゃん、それキツイっす」

白鳥が大げさにショックを受けたポーズをとり、笑いをとることに成功している。

「面倒くさい」とにならなくて良かつたと思つてゐると、三村が訳わけ知り顔でそつと囁いた。

「理由、言わないんだ？」

「……名前がカンペキに同じだった」

ぼそっと囁き返して、視界の端に映る少女を意識する。

外見的には田立つところのない、普通の高校生だ。

背は低いが、ロリキャラ設定には程遠い（念のため言つておくと、田乳でもない）。

リーダーシップのある加賀森のかげに埋没^{まいぼつ}している。性格は今見たとおり臆病^{おくびよつ}かもしぬないが、それだってまどかが声をかけた時からで、その前までは他の女子と共にきやあきやあ盛り上がっていた。どじまでも普通。

「探し人？」

まどかが誰かを探していると知つて三村がまた踏みこんできたが、即座^{きそく}に首を振つておく。

「また玉砕^{ぎょくへり}」

冬も涼湖^{じょうこ}と同じだった。『静義』といいつなを聞いても反応しなかつた。

互いに名前しか手がかりがないのに、この調子だと一生見つからないような気がしてくる。だいたい、自分はいいとして向こうの名前なんて普通にありそつで困る（実際、ここにも一人いたしな）。

それ以前に、生きてない確率だつて高いし。

また会おうなんて約束なんてするわけもないが、しておけば気持ちの持ちようも少しは違かったのかと思う。いまさらだが。

「田島さんの時とは反応が違うね。探し人じゃないのに気になるんだ。田城くん、それってやっぱり一日惚れなんじゃないの？」

こちらの話は、白鳥の大げさなパフォーマンスで女子には聞こえていない。ほつとして、まどかは友人に冷たい視線を向けた。

「白鳥菌に感染したなら、こっちに来んなよ」

「根拠は君の視線。僕の意見と、彼の思い込みを同列に扱わないで欲しいな」

突き刺さる白眼視をものともせず、三村はメガネのブリッジを指で押し上げた。

7 ひまなので、状況説明をしてみる

*

近年、ある時を境に全国各地で奇妙な獣が跋扈^{ばつご}し始めた。

否^{いな}、仮に獣と分類されているが、ソレはそもそも生物なのかどうかさえ分からぬ。

少なくとも動植物^{どうしょくぶつ}という概念^{がいねん}の上にはなく、系統図など作るのは不可能なモノ達だ。暫定的に、今までいなかつたモノを総称して妖獣^{ようじゆう}と呼んでいいだけだ。

生命体の進化は、生存のために起こる。

大地^{かわ}が渴^{かわ}いたら、乾燥^{かんそう}から身を守る粘液^{ねんえき}を出したり、あるいは乾燥に耐えられる層を持つ皮膚^{ひふ}に作り替える。

天敵^{てんてき}がいるなら、見つからないように外見を変えるか、襲^{おそ}われても食^くわれないように毒や針を身にそなえる。それでも駄目なら生息地^{せいきち}を変える。できないものは死滅するだけだ。

そういう、原因と結果がある程度推測^{すいせつ}できるのが生物^{せいぶつ}だ。
大雜^{おおざっぱ}把^ぱでいいなら単細胞生物^{たんさいしょく}から人間までの系統樹^{けいとうじゅ}が描けるのも、その過程^{かてい}がなんとなく予想できるからだ。

だが、妖獣には一切の生物の常識は通用しない。いつそ無生物に近い。

例えば昨日まどかが倒した甲羅^{甲状}は、犀^{シカ}に似た姿かたちをしているが、背骨がない。そして、甲羅^{甲状}のように固い外装といつてもそれは、生物なら身を守るために発達してくるべき本来の甲羅でも皮膚でもない。

なぜなら守られるべき内臓がないのだから。

その体は、岩に似ている。表面が輝石^{きせき}で残り全ては玄武岩^{げんぶがん}。そういう表現をして間違いない。

そして、そもそもみな形のモノがいるが、一種類一種類、その存在は断絶している。

彼らに共通しているのは、無機的であることと、周囲にある物を片っぱしから壊しまくるという行動原理である。

家があつたら家を壊す。人がいたら人を殺す。歯向う同族^{どうぞく}がいたら、どちらかが倒れるまで闘い続ける。

迷惑だが分かりやすい行動だと、まどかは思つたりもある。

どこかの詩人気とりのハンターが、妖獣は神のみた悪夢だと言つてゐたが、たぶん違うだろう。

妖獸に荒された町や村のありさまは悲惨^{ひさん}で手の施しようもないが、そこには残虐性^{せんぎやくせい}も悪意もない。

あるいはシンプルな破壊だけだ。

もし本当に神が悪夢を見るのなら、そこに描かれるのは人間だと思つ。

頭脳を持ち、まがりなりにもこの大地に君臨してきた悪夢の具現である人間は、その知識と能力をフル稼働して妖獸を退治しようとしてきた。

その間に国民や居住可能な街が半減するという壊滅的^{かいめつてき}被害を受けたものの、國家保全局は、ミサイルや銃、人海戦術で何とかなるタイプの妖獸はすべて絶滅させた。

現在残つているのは、それだけではどうしようもなかつた頑強^{がんきょう}で凶悪^{やっかい}で厄介^{やけい}なモノだけである。

まじかにとつては雑魚^{ざぶつ}だったとしても、一般人にしたら抵抗不可能な無慈悲な破壊者だ。

そういうモノが未だに無数にいる。

なので、ハンターには妖獸の発する精神を狂わせる咆哮^{ぼうこう}に耐え、そのうえで結界や無数の詠唱で武装し、突入することが求められる。

報奨金はけつ こうな額なので一 獲千金を狙う者もいるが、実際は大勢でパーティを組んで一、二匹フルボックを退治というのが常識だ。

一人頭の分け前は、防衛区域内で地道に働くサラリーマンや職人を多少上回る程度くらい。現場で死ぬこともあるので、残念ながら人気の職業とは言い難い。

とはいって、防衛区域はそのハンターたちと保全局のパトロールで守られている。

市民の関心も多く寄せられている。

野蛮やばんだろうが粗野そやだろうが、簡単に目立ちたいと思つたらハンターになつて実績をあげまくればいいといづまどかの発想は、実は正しかつた。

*

8 でも式途中で抜けたけどね

「……よつて本校は文武両道の精神を養い、修身を目標に……」

長い長い校長の話が続いていた。

長すぎて、もはや誰も聞いていない。
目立たないよう^{あくび}に欠伸をする生徒と、表情だけは眞面目^{まじめ}に生徒を見守っているふりの教師。全員がだるさと嫌気を感じ始めたころ、突如サイレンが鳴り響いた。

緊急警報。

妖獣が防御区域内に入り込んだ印だ。
まどかは誰より早く身をひるがえすと、眠氣を振り払つて始業式を脱出した。
雨の校庭を走り抜ける。

「ガンバつて来いよー！」といつトボケタ白鳥の声援に、保全局からのアナウンスが重なる。

『北地区二区画より蟻^き蟻^{じょ}ハ匹^ひが侵入。北地区二十五から二十八までの住民は保全局員の誘導に従つて避難してください。避難区域付近の方々は、避難準備をお願いします』

まどかは小さく舌打ちした。

避難を指示された地区は、まさにここだ。

貴重品すら持たずに入居する住民をよけながら逆走するのは面倒くさい。

人の波をかき分けて家に戻り、剣を持つてまた走る。

おかげで時間を口スした。

白昼堂々妖獣が侵入するなんて滅多にないが、こんな時のために学校に剣を持つていつてもいいだろうか？

却下されること間違いなしの感想と共に、保全局の誘導と逆に進んで超巨大アリ（に見える何か）を探す。蟻嬢は、蟻だとしたら超巨大だが、実は体長は三メートル程度ていどしかない。ビルや家に隠れてしまつ大きさなので、どこにいるか分からなくて困る。

「鬼灯！」

やがて同じ方向に走っていた鬼灯とミラを見つけて叫ぶと、二人はちらりと振り向いて頷いた。

「ちょうど山櫻桃が感知したとこだ。一十六区にまだ一匹残つてゐるそうだから、行くぞ」

補助的詠唱や『力』の感知は得意だが、運動能力低い山櫻桃本人は、まだ追いついていない。それでも蟻嬢一匹なら問題はなさそうだった。

まどかは走り、鬼灯たちを追い抜いた。

逃げてゆく市民はだいぶ少なくなつてている。いるのは同業者と保全局員。

ならばもつといいかと、剣を鞘から引き抜く。

走り方を変えた。斜めに腰を落とした構えの姿勢で、すり足で走る。

今の世では誰もやらない、古の隠密の走法。

半身を返して攻撃の当たる面を減らし、前にわずかに泳がせた左手は突然の攻守に対応できるように準備されている。剣を握った右手さえ、肘をほとんど抜かずに脇の急所を隠していた。

正々堂々が誇りである武士とも、影の戦闘集団である忍びとも違う、独特的の構え。

まじかが^{たいとう}体得^{してく}しているのはそつこつものだ。戦場においてそれは、魂に浸みついた本能に近い。

上から降つて来る酸の液をかいぐぐり、赤銅色の腹に剣を突き出す。

同時に、地面を蹴つて跳ねあがる。一回転する。剣が動きに連動して、蟻嬢の体を一つに裂いた。噴火の際にできる空氣を多く含んだ軽石のような体は、簡単にじとめられる。

遠目に着地すると、狂ったように暴れる蟻嬢に鬼灯がとどめを刺していた。もう一匹モリモリの魔法で粉々に吹き飛ぶ。

「一^{いっ}上^{じょう}がりー」

「……モリ」

語尾のはずむ口調で楽しげにポーズをとる女は、周囲の惨状を完^{わんじょう}成^{せい}する。

全に無視していた。

「元巨大アリだつた破片が近所の家や道路に飛び散っているのは、デモの投石後みたいだ。血でないだけマシだが、軽石の空氣穴部分に溜められていた酸が吹っ飛び、雨に薄められてさえあちこちを溶かしている。」

「俺たちができるだけ被害を抑えようとしてるのに、味方のお前が拡大してどうするよお」

「だつてどうせ他の壊された家とか、こここのアスファルトと一緒に政府が直してくれるんでしょう。ちょっとくらい大技使つてもいいじゃない」

「よくないと思いまーす。と」

投げやりに応じた鬼灯は、//ラの腹に腕を回すと、いきなり後ろへと跳んだ。

9 実戦その1

「さあ……何すんのよ!」

げし、と彼女の肘が鬼灯の肋骨に叩きこまれたが、刹那、その金茶の髪が数本切れて舞い上がった。
ミラがいた場所を、蟻嬢の牙が通り抜けて行つた。

「なんで? あたし倒したのに!」

答えはすぐに明らかになつた。一つに裂かれた巨大アリの体から細かな気泡を立てて流れ出ていた酸から、ぽこりと新たな蟻嬢が顔を出したのだ。

ぽこり、ぽこり、ぽこり……

一つ、二つ、三つ……、と赤胴色の頭が、アスファルトさえ溶かす酸の中から新たに産まれ出る。ぴしゃりと液体の音がして、一匹が前脚を地面にかけた。ずるりと体を酸の中から引き出し

一気に飛び出した。

爆発したかのように、大量の蟻が視界を覆いつくす。

「何コレ ついや つ! あたし、わけ分かんな
いの大つ嫌い?」

逆上したミラの魔法がその一帯に炸裂した。

ますます吹き飛ぶ酸。そこから無限に湧き出る蟻嬢。

数十匹に増えたそれらは、無表情の眼で一斉にこちらを見た。

さすがにまどかもゾッとした。

「ほんとに、コレ何だ？　こんなのが聞いたことないぞ」

「蟻嬢では初めてだろうなあ。ただ、他のハンターと飲んだ時に似たような話は聞いた。倒しても倒しても増える、突然変異種みたいのがいるって」

一力所にかたまつてるのは危険なので、まどかはわざと大きな動作で塀を蹴り、他人の家のベランダに立った。

すべての蟻嬢が首を振つて、視線を向けて来る。その隙に鬼灯も、ミラを抱えて平屋の家の屋根の上に飛び乗つた。濡れた屋根に足を滑らせかけている。

「じゃあそのハンターはどうやってその無限増殖を切り抜けたんだ？　どうか急所でもあつたのか？」

蟻嬢の一匹がベランダに前脚をかけたので、頭部を一刀両断にしてみる。

巨大アリは庭に落ちて動かなくなつたが、階下でものすごい絶叫が聞こえた。

逃げ遅れた人間がいたらしい。確かに自宅にあんなのが転がついたら、嫌だとは思うが。

「つたく。避難勧告つけたらサッサと逃げろつて」

体調が悪かろうと、介護が必要だろうと、逃げなかつたら妖獣に殺されるだけだ。ハンターも保全局員も全力を尽くすが、それは個々の人助けではなく妖獣退治がメイン。自分の命は自分で守るのが、この社会の暗黙のルールだ。

「おい、中のヤツ！ こうなつたら絶対出て来るなよ。そこの死骸が怖くても、今から避難しようなんて考えるな！」

まどかは庭に飛び降りて、自分より大きな蟻嬢の死骸をつかんだ。堀の上から襲つてくるアリもどきの頭を叩き斬りながら、庭を横切る。ひきずる死骸を突き破つてもう一匹が出てきたら、軽傷では済まない。それは分かつっていても、人のいる民家の庭に置きっぱなしにはできなかつた。

上から蟻嬢が噛みつきにかかるのを、剣で払う。　こり、
と手元で音がする。

彼らは目先の獲物に気を取られて、家の中に入がいるのには気づいていない。　こり。

もう少しで門だ。

さらに一匹の首を落とした。　こり……カリ……カリ。つかんでいる死骸から聞こえる音が、いつしか変わっていた。カリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリカリ……

「つ！」

まどかは背負い投げの要領で、蟻嬢の死骸をおもいきり門の外へ放り投げた。

同時に、だらりとした体を食い破り、大量の酸と共に新たな蟻嬢がこちらへと一直線に飛んでくる。

迎え撃つには体勢が不十分。まどかは投げた勢いのまま、前方へ転がった。

受け身から立ち上がり、覆いかぶさつて来た蟻嬢に剣を突き刺し、横をすり抜ける。皮膚抵抗を受けた剣は重かつたが、止まらずに駆け抜ければ、脇腹を碎かれたアリもどきは地響きを立てて倒れた。

それも門の外に放り投げる。

と、聞きなれた声が詠唱を完成させた。

「これでもう増えないから」

道路の真ん中で、ようやく追いついた山桜桃が小さな唇を引き結んだ硬い表情で立っていた。安全な場所など選んでいる余裕はなかったのだろう、妖獣の攻撃を受けたら一撃でおしまいなのに、彼女は無防備な位置にいた。

まどかは反射的に門を飛び越え、彼女と蟻嬢の間にすべりこんだ。

大刀を持つ鬼灯^{きとう}が隣に並び、屋根の上からミラが広範囲な魔法を飛ばす。本気になつたミラの手加減ナシはとんでもなく派手だったが、今度は鬼灯も咎めなかつた。

「つせ　　つ？」

鬼灯は掛け声とともに、鬼神の働きをした。大柄な彼の体ほども

ある大刀が、縦横無尽に蟻娘の群れを切り裂いた。一振りで複数の頭部が碎かれ、尾部が飛ぶ。もう一步進んで大刀を一閃させれば、また幾多の蟻もどきが崩れ落ちた。

「……二人とも、ここが防御区域内って忘れてるかもな」
鬼灯にわずかに出遅れたまどかは、一人の攻撃を逃れてきた数匹をさっくり片づけて一息ついた。

うしろでは、山桜桃が別な詠唱を始めていた。
防御の詠い。もちろん無力な彼女自身のためになく、現場に立つ鬼灯とまどかのためだ。

逆にいえば、彼女はまどかが守ってくれることを信じている。

しかし、詠唱が終わる前にミラが屋根から滑り降りて来た。
「おっしまーい。あーあ、シスコン炸裂しちゃって」

「そりゃハララも魔法がでかすぎでしょ。電線が折れるんだけど」

酸を浴びてところどころ赤くなつた肌をさらした鬼灯が、巨大アリもどきの死骸を踏み越える。詠唱をやめた山桜桃が兄に駆けよつて、背負つていたバッグから救急セットを出して治療を始めた。

「北部一〇七番隊、静義だ。北地区二十六で蟻娘を退治。数は、はじめ一匹。突然変異種だつたから増殖し始めて、最終的には……何匹だらう？」

「しーらない」

ゲリラ戦でも起じたかのよつなどんでもない状況から、ミリは一早く視線を逸らせた。

出来るならまどかだつて、そつしたい。

折り重なる蟻嬢の数なんて数えたくもないし、それ以上に折れた電柱と抉られた地面、切断されたフェンスや塀など見たくない。酸で溶け、黒ずむ家や道路は妖獣の被害だが、それよりひどい損害を与えたのは一人の仲間だ。はつきり言つて、妖獣よりワルモノだ。

『変異種か。厄介なのにあたつたのがお前達で良かつたかもな。そ
うでなきや、ハンター や住民にまで被害が出るところだつた』
連絡を受けた保全局員は、ポジティティブシンキングの持ち主ではな
くて、実情を知らないだけである。

「そう思つてくれるなら、ここは復旧は保全局持ちで頼む。オレ達
もちよつとやりすぎた気はするから、報奨金ほうちゅうきんは辞退するんで。ヨロ
シク」

『え?』

何も知らない保全局にすべてを押し付けると、まどかは実戦で培
つた俊敏さを総動員して通信を切つた。

「やつたな。こんなの直せって言われたら、この歳にして借金持ちはなるところだった」

「やっぱ交渉は静義に任せるに限るわねー」

ミリは山桜桃の前に両手を出した。ノリについていけない少女は、その手のひらにそつと自分のあわせた。ぎこちなく、ミリと同じ方向に首をかしげる。

「ね、ねー……？」

それでいいの、ミリは満足気にこいつとした。

引きこもり山桜桃の社会適合計画はさておき、いつまでも元気で破壊現場の責任を取られるのは嫌だ。四人は学校方向へ歩き始めた。

「それで、侵入した蟻嬢はぜんぶ始末できたのか？」

「どうだろ。あの現場を見に保全局員が来る前にと思つてすぐ切つたから、聞かなかつた」

「たぶん平氣よ。ハンターだつてそれなりにいるんだから、一人じや無理でも、数人がかりでやれば問題なし。たとえ変異種がいたつて、詠唱担当が数人いれば増えないわけだし」

「ええと……でも、氣流転変を止めるつて氣づかないと、どの詠唱で増えるの抑えられるのか分からないと思つ……」

遠慮がちな主張は、もしかしたら保全局に連絡を入れた方がいい

と促されていいるのかも知れない。

被害が増えるのはたしかに嫌だしな、とまどかが携帯を取り出そうとした時だった。

びくりと山桜桃が震えた。

「「山桜桃?」」

兄とミラがそれぞれ声をかけたが、彼女は聞いていなかった。聞こえていなかつた。

大きく目を見開き、蒼白そうぱくな顔を斜め上に向けたまま固まっている。

今まで何度も彼女はそうして異常を感じることがあつたが、これはいつもの比ではなかつた。

小さな唇が震えていた。開きっぱなしの眼はすぐに乾燥して、ぼろぼろと涙をこぼしていた。恐怖とも驚愕ともつかない表情は、不条理な死を強要された殺人事件の被害者のように深く刻まれていた。

彼女の周りにだけ異質な空気がとりまいていた。

どうしたらしいのか分からぬ三人の前で、山桜桃は震える指を、必死に視線の方向に向けた。

「高校、に。いる」

声にならない悲鳴を押し殺し、他の人に理解できる言葉を紡ぐ。ただそれだけの事が、彼女にとつてはとてつもない努力を要した。意識を逸らせたら、狂気に呑み込まれそうなほどの『力』。恐怖。恐怖。恐怖。恐怖。

「何がいるんだ？」

まどかの問いに返事はなかつた。

山桜桃は指を指しているだけで精一杯だ。

ぱん、と自分の顔を両手で叩いて氣合いを入れた鬼灯が、妹を抱え上げる。彼女は子猫が身をすりよせるように兄の胸に顔をうずめた。

ミリと鬼灯が高校に向けて走り出す。

なんだかよく分からぬまま、まどかも一人を追つた。こういう事態の時は、ずっと山桜桃と共にいる一人の方が慣れているし、間違わない。

*

気づかれませんよ！」

江上冬はそう祈りながら走つていた。

最初、避難は形だけのものだった。防護区域と外との境界は遠く、こんなところまで妖獣が来るとは誰も思つていなかつた。

だから学生でありながらハンターの資格を持つ円城円えんじょううまどかが見事な反射神経で体育館を出て行つた時も、教師の指示に従つて全員で移動する時も、まだ余裕はあつた。

地下道を歩きながら、大通りを越えた向こう側へと渡る生徒たち

に切迫感はどこにもない。

「円城つてホントにハンターなんだ」「

「見た見た。かつこよかつた！」

「えー？ 良かつたけどー、でも今『こうカタナとか振り回してんだよ。あたしはナシ。絶対ナシ』

かがもり
加賀森や周囲の女子が緊張感なく話している時も、笑顔を作れていたと思つ。

「冬は？ やつきからずーと黙つてるけど、ナニ、本氣であいつが怖かつたわけ？」

「怖くはありませんけど、でも、特に仲良くなしたいとも思いませんので……」

集団で移動する時の常で、普通に歩くよりも数段ゆっくりとした歩調。話をするのに適した速度は、急がせて事故が起こるよりいいからだ。

「うわ、何気にさくつと切り捨てたね。円城力ワイン」

「そういうの、気にしないヒトだと思いました。そんな事より、これって帰りが遅くなりますよね。せっかく午後はヒマだと思ったのに、残念です」

「やだー、冬さんヒディ。こんな非常事態に不謹慎ー」

「そうですか？ 漆さん、みなど帰りのヒマ時間に通学路にあるお店チ

ックとかしよづと思ひませんでした？」

「……それは、思つてたけど」

やさしさーと笑いあえれば、空虚と信頼が冬の胸に交錯した。

ヒディのなんて、自覚していろ。

不謹慎なのも、知つている。

でも、それ以外にどう取り繕えばいいのか分からない。

笑顔という一番分かりやすい仮面をかぶりはじめてから長くて、
「まかさない自分なんて想像もつかない。

。

そうして皆で移動していたら、後列から悲鳴が聞こえた。

「なに?」「妖獸?」「うそ!」「どうしてここまで?」「知るか

「逃げろ!」

疑問が恐怖に変わるのは一瞬だつた。

逃げる、と誰かが叫んだ時には、もつ生徒たちは列を崩して走り出していた。

冬も、あつという間に人の波に呑み込まれた。
何度もぶつかられ、体が後ろへと流される。

(どうしましょ)

見回しても、周りに知人は見つけられない。

加賀森も湊も、顔を覚えている同級生すらない。多数の生徒たちが血相を変えて互いに押し合い、押しのけながら走つてゆく。狂乱に近い。

「知らない人ばかり。……だつたら、どうせはぐれちゃつたんだら、少しくらいなら……」

するり、と人の波に逆らつて隙間に潜り込む。

体の小さな冬には、こうして人混みをすり抜けるのはそう難しいことではない。ほんの小さな隙間があれば十分だ。足さえ

ついていれば。

途中、何度か人の腕にひつかつて地面から足が離れて運ばれたので、素早くとはいかななかつたが、冬は踏みつぶされることもなく地下道を戻り、学校にたどりついた。

悲鳴の上がつたと思われる場所に。

自分がヒドイのを自覚してはいても、ヒドイ自分でいたいわけではない。できる範囲であれば、素直に動きたい。

冬はそつと玄関にすべりこんだ。

靴をはき替えに列を離れた生徒が数人、かべきわ壁際に追いやられていた。

(こんな非常時に靴を気にするなんて、さすが人間が違いますねえ。可愛い子もいっぱいですし、時代が違うとこんなに変わるんですね)こんな時だが、つい、にこにこしてしまう。

下駄箱に背を押しつけている女子高生たちは、リボンの色が違うから他の学年だ。冬は学年を特定されないように自分の制服のリボンをしまった。

傘立てにさしてあつた傘を引き抜き、妖獣の侵入で割れかけていたガラスを叩く。

「あいたつ」

派手に割つて注意を引こうとしたのだが、ガラスは思いのほか丈夫だった。人種の変化（背が大きかったり、全般的に垢抜けていたり）もそうだが、技術の進歩もめざましい。

冬は咳払いをして仕切りなおした。

まあいい。ガラスは割れなかつたし、反動で手が痛くなつたが、妖獸も生徒達もこちらを向いた。結果オーライである。

「どうもこんにちはー」

大袈裟おおげさに手を振ると、前脚で一人を踏み倒していた巨大アリは冬へと正対した。

わずかに緩んだ脚に、生徒が逃げようともがいた。しかしそれが却つて妖獸の意識を惹いた。遠くの獲物より近くの獲物、とばかりに牙が生徒の首筋を引き裂ひつこうつとする。

「ダメですつてば！」

冬は、反射的に手を出していた。

足元に傘が落ち、しゃら、と小さな音がした。伸ばした制服の袖から、銅色の棒が飛び出た。

腕力などなくとも、それは妖獸の体を貫く。断末魔の咆哮ぼうこうがあがるのを、冬は耐えた。

(これくらい、平氣。ぜんぜん平氣)

現にびりびりと小刻みに揺れる棒は、手の震えのせいではなく、咆哮による振動だ。

「早く逃げて下さい！ そうじやなかつたら、その人たちが助けてあげて！」

叫べば、殺されかかっていた学生と、硬直じょうごくしていた女の子たちが我にかかる。精神を引き裂く咆哮の下、蒼白そうはくになりながらも協力して、アリもどきの下から脱出した。

「あなたも」

「『』のちは大丈夫ですから、早く逃げて下さい！」

自分の事まで心配してくれるなんて、いい人だ。だつたらなおさら早く避難して欲しい。

この場は、あらゆる意味で危険だ。

真剣に指示したのが効いたのか、生徒たちは地下道へと走り出した。足取りはまだふらふらしていたが、獣はこの一匹だけ。追いかけてゆくモノはないから、この場から離れてくれさえすれば安心できた。

空を見上げれば、暗く垂れこめた雲。静かに降り続いている雨。

何も、変化はなかつた。

(良かつた。見つからなかつた)

ホツと息をついて妖獸を見上げると、ソレはすでに動かなくなっていた。

突き刺していたものを袖の下にしまつ。しゃりん、と涼やかに鳴つた音は、倒れ伏す獣のつくる地響きに紛れて聞こえなかつた。

「これで大丈夫……」

呟いて制服の胸元をつかんだら、

「江上冬？」

遠く離れた校門から、驚いた声がした。びくつと肩がはねる。

「み、見ました？ 私ナニにもしてません幻覚です気のせいです見間違ひです……つて、静義殿？ 戻つて来るの早すぎ」

「え」

振り向けば、愕然とした様子の学生がそこにいた。
年相応の幼さを少しだけ残した整った顔と、縦に伸長しそうな筋肉の追いつかない体。

「いま何って言った？」

少年はものすごい形相かたちで校庭を走つて来る。濁つた水たまりを避けようともしないで、一直線に。大きな手がこっちにむかって伸ばされる。

いつの間に来たのか、分からなかつた。

いや、それよりも。気づけなかつたことよりも、つい彼の名を呼んでしまつたことが失敗だつた。

せつかくここまで知らないふりをしてきたのに。
彼も気づかないでいてくれたのに。
だいなしだ。

(ああもう最悪。私のばか)

11 みつけたものは、探しものとは違いました。

懐かしい呼び方をしたのは、始業式で会つたばかりの江上冬だつた。

「いま、絶対おまえ 静義殿ねやぎしん つて言つたよな？」

これだけは聞き間違えない自信があつた。

まぢかは彼女の手を捕まえようとしたが、冬は軽快なフットワークで身をかわした（リスザルか、お前は）。

「……。なにその身軽さ。じゃなくて。お前、やつぱりあの冬だろ。なんで」

そんな行動をとられる覚えがなくて、まぢかは動けなくなつた。感動の再会なんて思つてなかつたが、こんなふうに逃げられるなんて予想外だ。

固い表情は、今や全身でまぢかを警戒している。

「……ウソだろ……」

記憶にある冬とはぜんぜん違つ。大好きだつた笑顔がどこにもない。鷹揚おうようさや優しさ、配慮はどこへ行つた。

「お前、頭でも打つた？」

「……ふつつ、オレ何かしたかくらい言いません？」

「いや、お前がボケかます確率の方が高い。肥溜じゆだめに落ちるわ、川に流されるわ、地蔵に供えられてた饅頭まんじゅう食つて腹こわすわ」

「記憶にありません。お饅頭にあたつて下痢げりして、いたのは静義殿ねやぎしん じゃないですか。どさくさに紛れてヘンなこと言わないで下さい」互いに睨みあつ。

なんか再会、ぶちこわし。壊したのオレだけだ。

まどかはボリボリと頭をかいだ。

冬も、後悔したように視線を足元に落とした。

そんな仕草は変わつていなかつた。

どうしようもない時、彼女はいつもそうしていた。一人で抱えんなよと言つても、そうですねと頷くだけだった。自分は一度も、彼女の役にたてた事がない。

「悪い。仕切り直そう。さつき会つたよな。前の印象しか

なかつたから、お前だつて氣づかなかつたんだけさ、冬もそう？

だつたら一人してマヌケだな」

まどかが氣を取り直そうとしていたら、

「なになに、あんたがそこの妖獣退治してくれたの？」

「うわ、山桜桃も小さいけど、君も小さくて細いねえ」

どやどやとミラや鬼灯が追いかけてきたので、場は一気に賑やかになつた。

邪魔だ。これでは込み入つて立ち入つた話ができるない。

追い払おうと振り返つたまどかの瞳に、細かく震える山桜桃の姿が映つた。

彼女は、さつきの神がかり的な空氣はもうまどつていなかつた。兄に抱えられたまま怯えながら、惹き付けられるように冬だけを見つめていた。常ならざる雰囲気を感じて、鬼灯もミラも口を閉じ、少女二人を見比べる。

一目で分かる神秘性をそなえた山桜桃は、漆黒の髪と漆黒の瞳。大人しくて滅多に自己主張をしないが、彼女はどこにいても目立

つ。人の世とは交わらない、別種の気配を持つている。

対する冬は、そういう特異性がどこにもなかつた。小さい以外、特徴がない。

ほとんどの学生と見分けのつかない茶色の髪を揺らして、困ったような笑顔をミラに向けた。この場を穩便に収めて欲しいと思つてゐるのが、傍目にはためにもうかがえる。

「えーと。まず謝つてみようかな。そこのヒト、ごめんねえ、あたし山桜桃と静義の味方だから。この子たちが迷惑をかけたら助けあげるんだけど、今違うでしょ」

冬の笑顔が苦笑に変わつた。

「私こそ、他力本願ですみません」

その方が手つ取り早いもので、と聞こえた気がした。
始業式の時の加賀森みたいに、勝手に場に応じた解釈してとりなしてくれるのを望んでいたのは明白だった。

まじかの頭にカツと血が上つた。

「お前」

だが、まじかが怒りと疑惑をぶつけるよりも、山桜桃が暴き晒しだす方が重かつた。

意識せずに全てを感じる少女は、焦点の合ひにくい瞳を懸命に凝らす。

「……さつき感じたのに。もう分からぬ。隠したの……？　ずつとこの街にいたのに、わたし、分からなかつた。さやぎ、じゃなくて、まじか君みたいには見つけられなかつた。どうして……？」

いつも周囲に埋没している少女は、困ったようだった。山桜桃を見て、まどかを見て、それから一步下がった。

「見つけて欲しくないからです」

まどかは理解した。

冬は、わざと彼を避けていた。
知つていて、知らないふりをしていた。

もう一度会いたいと思っていたのは自分だけだったかと思うと、腹が立つ。名は、二人だけに通じる符丁だったのに、それすら無意味だった。

「なんでだ？ オレは」

「私は今、預かり物をしているんです。それを返すまでは目立ちたくないんです。静義殿はハンターとして有名ですから、一緒にいると、ちょっと……」

「ちょっとって何だよ！ オレは、もしかしてお前がいたら、この名前に興味を持つて会いに来てくれるかと思ったのに！ だから頑張つてみたのに！」

「……」

彼女は人指し指を額にあてて、考え込んだ。ため息をついた。

なんだか修羅場な雰囲気に、外野三人が口を閉じて彼女の言葉を待つ。まどかも、拳を握りしめて待つてみた。

がいや
しうらじゅうじょう

「あのですねえ、よりにもよつてこのタイミングで私と静義殿が会うって、おかしくないですか？」

「あ？ 何言つてんだ？」

話が飛んだ。

「預かり物との出会いが、ただの偶然じゃなにって申し上げてます」

「……誰かが仕組んだって？ なら、誰が、なんで？」

「闇縁殿と櫻水殿の一択でビリだわ」

「誰？」

「両方とも知らない名前だ。怪訝に眉を寄せたら、冬が申し訳なさそうに肩を縮めた。怒っていたはずなのに、まだかの方が罪悪感を覚える。

「ふ……」

「別の場所で、時間も経つて、それでも出会いのは奇跡か作為。^{わけ}私はもちろん作為だと思います。私の知る静義殿は、誰かに操られるのを厭^{いと}う方でした。あなたもそしたら、これ以上むかしの思い出を求めるのは止めてください」

「冬ー」

冬は制止に応じず、ぐるりと身をひるがえした。
明確な足取りで生徒たちの避難した場所へと歩いてゆく。
まるで、そちらが自分のいるべき場所だと宣言するかのよつて。

「冬ー」

何度もまどかが叫んでも、戻ってはこなかつた。

食いしばった歯が、ぎりっと音を立てた。

考えた事もない断絶だつた。まどかは追う事もできずに、冷たい
歯の中に立ちつくした。

13 へんでます。暗いです。（前書き）

解析機能つてものによつやく気がつきました。
読んでくださつている方がいると知つて、小躍り。^{こおどり。}ばんざい。
ありがとうございます。

13 へんでます。暗いです。

「探してたのは、あの子だったのか？」

濡れたままだとカゼをひく、と放られたタオルを頭からかぶつて、まどかは顔を隠した。本当は一人でいたい気がしたが、実は面倒見のいいミラと鬼灯きとうはそれを許さないだろう。

言い合ひあいをするのもめんどくさい。まどかは連れてこられた鬼灯の家で雨を含んだコートを脱ぎすぎてた。

「たぶん。見た目も性格もぜんぜん違かつたけど、オレのこと元の呼び方で呼んだし……」

本当は自信がない。

冬はあんなふうに誰かを拒絶する人間ではなかつた。すつとぼけて天然だつたが、世せが世ならノーベル平和賞でも受賞できんじゃねえつてくらい、すべてに手を差し伸べる性格だつた（……いや、やつぱりあいつが受賞するのはコワイ。世せが世でなくて良かった）。

「アタリはアタリなんじゃないの。よく分かんなかつたけど、静義とは話通じてたじやない。単に、探し人が静義の望んでいた反応を返さなかつたつてだけでしょ」

「まあな……」

ミラは正しい。

拒絕と変容は信じたくないても、たぶん江上冬が『冬』だ。探していた相手だ。

「これからどうするの？ 人探しのためにハンターになつたなら、見つけちゃつたんだし、パーティ抜ける？」

「ミラ」「^{とが}咎める声で仲間の名を呼んだ鬼灯は、気づかう視線でまどかを見る。

わだかまりを抱えている時に、早急すぎる質問だった。

しかしミラは、分かつていて尋ねているのだ。そうしないと、まどかが一人で考えすぎてどんどん落ち込んで行くのが予想できたのだろう。

抱えこむ人間は一人で十分だと、猫に似た瞳が語っていた。

「……やめない」

現在進行形で考えこんでいる山櫻桃は、まどかの答えにも笑顔を返すことはなかつた。鬼灯に滴の残る黒髪を拭かれるまま、焦点の合わない表情でただ座つている。

まどかには分からぬが、妖獸を倒した冬が、とにかく怖かつたらしい。

「そう。じゃあ、改めてよろしくねー」

見かねたミラはまどかに言うと、山櫻桃の腕を取つて浴室へ連れて行つた。髪の長い女性は、ちょっと拭いたくらいではどうにもならない。

途端に静かになつたリビングで居心地の悪さを感じた鬼灯は、コーヒーを淹れ始めた。

「……俺たちの事を考えてやめないのなら、気にするなよ。生きて行く分には三人でも困らない」

「分かってるし、そういうつもりじゃない。今、他に発散できそうのが思いつかないから

鬼灯と山桜桃は、妖獣退治の報奨金で一人で暮らしている。

母親は山桜桃を生むとすぐに亡くなり、父親は妻を殺した山桜桃をおそれて逃げたと聞いた。

殺した、とは出産による死亡という意味ではないらしい。腹の中で母親の命を吸いつくして生まれたと、父親はそう狂乱して病院から走り去つたそうだ。

だから一人は途中までは親戚の家で育てられ、鬼灯が高校生の時にハンターになつてからはこうして暮らしている。

山桜桃は産声もあげずに生まれ、成長してもさつきのように焦点の定まらない眼で空中を見ている事が多かつたので、親戚にも気味悪がられ、疎まれていたという。親戚の家は、二人に取つて居心地のいい場所ではなかつたのだろう。

鬼灯は短く笑い声を立てた。

「妖獣退治でストレス解消なんて、お前くらいだらうなあ」

「ミラ、だつてやつてると思つ」

「そうか。そうだな」

大雑把な顔にくつろぎを感じさせる表情を浮かべて、鬼灯はコーヒーを運んで来た。山桜桃が淹れる時はソーサーに乗せられるカツプだが、彼はそのまま持つてくる。当然スプーンもミルクも砂糖も

ない。

あつたら使うが、なくても平氣なのでまどかは素直に礼を言つて受け取つた。

湯氣が立つ。飲む。その間は部屋に沈黙が落ちる。

黙つているのも辛くなつて、まどかはタオルをかぶつたままソファの背もたれに頭を乗せた。少しくすんだ天井が、タオルの間から見える。

「……鬼灯はさ、きつくてつまらない事ばっかりで、その中で一つだけ幸せなことがあつたらどう思つ?」

「その幸せを守りたいかなあ」

落ちついた声で、穏やかに即答された。

彼にとつての幸福は山桜桃サンザンだ。それからいい。

実は重い人生を送るの鬼灯は、今は他にもいろいろと幸せを手に入れている。大学の友人やサークルの話をする時、彼はとても楽しそうだ。

もしそんなふうになれたなら、何かが違つたのだろうか。まどかは思いかけ、記憶にふたをした。ため息が漏れた。

「オレにとつて、『冬』つてそういう存在。一緒にいたのつて一ヶ月くらいだったけど、野良犬が優しく頭撫でてくれる人間になつく感じ?だから今度も、寄つてつたら撫でてくれると思い込んでた。追い払われるなんて、思わなかつた」

「自分を野良犬に例えるのはどうかと思うが、俺も分かるなあ。昨

田までふつうに友達だったのが、いきなり話しかけるなって

話題が話題なので、二人で沈む。へこむ。

「たぶんあいつは山桜桃のこと聞いたんだ。それでヘンな兄妹には関わるなって周りに言われたんだと思う。へこむけどさあ、でもそういうふうに理由はあるんだよな。さっきの子にも理由はあつただろ？」

「預かり物？」

「そう。あと、誰かの作為。こうやって期待させるのがいいのかどうか俺には自信がないんだけど、それを何とかすれば元に戻れるんじゃないのか？」

どうなんだろう、とまどかはわざと冷静に考えてみた。

鬼灯の言葉は希望を持たせてくれるし、気持ちはそうであると信じたがっている。

しかし、手放しで信じるのはまだ怖かった。信じきれない。

冬は、普通ならハンター数人がかりになるはずの蟻嬢アリヨウを一人で倒した。それだけの腕があるのに、人を守るハンターにならなければいけない。

自分と初めて会った時なんて、縁もゆかりもない村のために、死にそうになりながら狼を追い払っていたのに。

時間が経つたと分かっている。今と昔は違つて当然なのに、下手に優しくされたから、夢見たがつてしまつ。

自分は往生際が悪いのだろうか。諦めた方がいいのだろうか。

人が偽るのも変わるもの当たり前だ。言われたように、思い出なんて追わない方がいいのだろうか。

まどかが自分の思考にどつぶりと嵌まりかけていると、勢いよくドアが開いた。

「やつぱりこうなってるわけね。どうして鬼灯つたらフォローしないのー？ うつとおしい。この部屋にカビが生えたらあんた達のせい」

シャワーを浴びてきちんと髪を乾かしたミラが、ずかずかと入って来る。

山桜桃は引つ張つていかれた時と同じく茫洋ぼうようとしていたが、温まつたおかげで蒼白そうはくな肌は桃色に変わっていた。

「フォローはしてくれた。オレが勝手に考え込んでただけで」「高校生に底かばわれる大学生ってどう？」

彼女は、脱ぎっぱなしにしていたコートをハンガーにかけた。かぶつていたタオルでまどかの髪を拭き、てきぱきと世話を焼く。

「どうなんでしょうねえ。とりあえずコーヒー飲むか？」

一人分のカップをテーブルに運んで来た鬼灯は、今度は忘れずに砂糖その他も用意していた。抜かりはない。

ふ、と山桜桃の視点がコーヒーに注がれた。
音もなくキッキンへ向かうと、ストックしていたクッキーを持つて来る。

14 復活は、不死鳥の羽よりクッキーで

とりあえず少女の意識は日常に戻つたらしい。

鬼灯とミラがそつと安堵の息を吐いた。

「そういえば、静義つて始業式に戻らなくていいの一？」

「学校にも蟻嬢が出たんだぞ。あれを撤去するまで教室になんていけないって。初ホームルームは明日つて賭けてもいい」

力ゴに盛られたクッキーは山桜桃の手作りの残りで、まどかは左手につかめるだけつかんで、ぱりぱりと食べ始めた。

糖分が低下している時にものを考えると、思考まで下降する。落ち込まないための予防だ。

「というのはタテマエで、単純に山桜桃のクッキーが美味しいからでしょ。もう、一人で食べないでよ」

ミラが細い指で、左手にキープしていた菓子の半分をさらつていった。

「横暴」

「どっちが。四人いたら四等分なの。レディファーストって言われないだけマシでしょ」

「ぜつたい却下。ミラに優先権を与えたなら、オレまで回らないに決まってる」

「あんたじやないんだから、そんな事するわけないじゃない」

「いや、する。鬼灯に食わせないために、絶対する」

「あ。鬼灯^{きぢょう}が入つたら、そうかも」

たまに子供になる一人のミニクイ争いを横目に、鬼灯が話を戻した。

「……静義が騒いだから忘れかけてたけど、高校を襲つた蟻嬢つてあの子が退治したんだよな。山桜桃はアレに何を感じてたんだ?」

「あの人も『力』のある人。お兄ちゃんや静義みたいに生命力なんか、わたしみたいなのは分からなかつたけど、トータルで強い人。……凄すぎて怖かつたけど、静義だつたら頑張つたら並べるのかな……」

少女は小さくクッキーをかじつて、まどかの視線を避けた。

「はいストップ。山桜桃はそこで落ち込まない。存在力が静義とみあうかどうかなんて関係ないんだから」

……ここはコメントしないほうが安全だ。下手をすると!!ラリにぶちっと潰される。

まどかはクッキーに専念する。

「てか強いのはいいけど、あの子どうやつて化け物アリをやつつけたのかしら。見た目華奢(きやしゃ)だつたから、あたしと同じ魔法使い? それとも山桜桃みたいな……のはナシか。詠唱で妖獣は倒せないもんね」

「そういえば見なかつたな」

まどか達が駆けつけた時には、蟻嬢は地面に倒れていた。その後も死骸なんて氣にもとめていなかつたが、致命傷が分かれれば採つた手法が分かる。ほんの少しでも、冬の事が分かる。

携帯を取り出したまどかは、保全局の短縮ダイヤルを押した。

三人が注目する中、高校まで突撃したアリモビキの傷を尋ねる。

『南東北高校？　ああ、目撃証言はあつたんで局員が出向いたんだがな、なんにもいなかつたぞ。きっと別の場所に移動したんだろうな』

「は？」

そんなわけはない。死骸はきちんと（とこうのもおかしな表現だが）玄関に倒れていた。話が聞こえている三人も、不審を隠せずにいる。

『けど、そうすると数が合わないんだよな。侵入したのが八匹で、退治の報告があつたのが七匹。お前達、無限増殖タイプだつたんだろ？　実は数え間違いで、元は三匹だつたりしないか？』

「しない」

それは確實だ。まづかは局員が現場の惨状を思い出す前に、またもや即行で通話を終わらせた。

リビングに沈黙が落ちた。

全員で、顔を見合わせる。

「いったい、どういうことだ？」

当然、誰も答えは知らなかつた。

15 インターローグ（前書き）

かーなり、ホラー気味です。
たぶん読まなくて話はつながるので、苦手な人は自主避難してください。

15 インターローグ

*

白い小さな獣が、ビルの窓辺から中をのぞいていた。

女性向けの服や雑貨を扱うテナントが複数入っているビルの三階。その上部にある換気用の細窓の枠に前肢をちょこんとかけた姿勢で、長い時間、そよとも髪を動かさず、白田の無いぬめる瞳で中をのぞいていた。

「聞いてる？　三人目だよ、三人目！　もうヤダ！」

服のかかったハンガーを次々に右へと移動させながら、少女は携帯電話に向かつて怒鳴っていた。もつとも彼女のメイクは濃かつたので、二十代後半にも見えた。少女と表現するには、多少ひつかかりを覚える外見だ。

「あんたが調子に乗るから。……知らないよ、そんなの。あたしじゃないって！」

その一列にかかつっていた服を全て見るだけ見て、乱暴な足取りで隣の店に移動しようとした彼女は、電話の相手がキレた声で怒鳴り返すのを聞いた。

それから、鋭い、暗い音を。

悲鳴に近いが、人の声ではない。重い、重い音。肉の塊が潰れる音もした。全く関係のない音に、背筋が冷えた。ゾッとする。

「何？　心愛、あんた何してんの」

『何つて。そっちこそ、いきなり何よ』うがあああああつ

「心愛？」

『だから何なの？』ああああああ

いつも一緒に遊んでいる相手の声が、どこか遠い。その後ろで、彼女の声に重なつて上がる絶叫の方がリアルだ。

激痛をこらえる絶叫に気づいてしまえば、もつぞの悲鳴を拾う事に集中するしかなかつた。息をひそめて、携帯を耳に押し当てる。

「う、と音がした。

途切れないと断末魔の悲鳴に混ざつた、くもぐつた音は知つている。厚めの肉の下で骨が折れる時の音。いつかどこかのデブを思い切り蹴つた時に同じ音を聞いた。

続く、づりや、という鈍い音は知らない。知らないが、固い物が柔らかい物を突き破つている濁音は、想像がつくだけに嫌なかんじだ。

『ちょっと聞いてんの？ ねえ！』

ちや、ぴぢや

』

友人の声がうるさかつた。ただ、かすかに聞こえる液体の音はわかる。痛みにもだえる誰かに、ふざけて灯油をかけてやつた時と一緒。

「心愛、心愛、あんた今何してんの、ホントに大丈夫？」
『はあ？ 大丈夫つて、ソレあたしのセリフ。あんたおかしくなつてんじやない？』轟音。

耳元での爆音にびくつとして、彼女は携帯を床に取り落とした。ワンバウンドして、ぐるぐる回る長方形をみつめる。

分かつた。

友人の声にかぶつて聞こえる音は、いじめでも悪ふざけでもない。交通事故だ。

最初のは車がガードレールを突き破る音。絶叫は、轢かれた人間の声。骨が折れて、それが肉を突き破った。そしてガソリンが流れて爆発。そういう、一連の音。

でも、どうして、そんなのが聞こえるの？

恐れを宿した目で携帯を睨みつけた彼女は、怖がる自分に腹を立ててもいた。平気なふりで、壊れてしまつた携帯を捨つ。画面が黒い。ひびまで入つていた。

構わない。こんな気持ち悪い物、買いかえてやる。彼女がそう思つた時だつた。

壊れたはずの携帯から、突然さつきの絶叫がもう一度響いた。

「きやあっ」

周囲にも聞こえるような大声をあげてしまった。ショッピングモールの客が一斉にこっちを向いた。

その、目。責めるような、目。

「……なによ」

田島涼湖が自殺した件に自分が関わっていたと知った時の、滅多に帰つてこない両親から向けられた目。弟の目。近所の、知り合いの、同級生の、全然知らない他人からの、蔑むような目。

「何みてんのよ！」

イジメなんて、それくらい誰だつてやつてるのに、自分だけじゃ

なのに、自分が悪いと決め付ける人間達の目。

「あたしじゃない、涼湖が悪い！ 大人しくしてればいいのに、巫女だなんてバカ言つて、謝らないから謝らせようとしただけなのに！ あんなに人が来るとは思わなかつた、死ぬなんて思わなかつた？」

注目してくる視線に抗い、少女は怒鳴りながら周囲を睨みつけた。いつもなら睨んだだけで目を逸らすはずの人々は、いつまでもどこまでも彼女を見つめて来た。

「なんで」

目、目、目。責める目が消えない理由は分からなかつた。だが、壊れた携帯から響き続ける絶叫の声が誰なのかは思いついた。彼氏だ。この間事故にあつて、見舞いに行つたばかりの彼。

携帯が着信音を奏でた。
携帯を持つ手が震えた。

壊れたはずなのに、いつの間にか、メール表示の画面になつていた。

ツギハアナタ

「？」

「つやああああああああああああ
少女は携帯電話を床に叩きつけた。
二つに折れた。破片が飛び散る。
なのに、彼氏の絶叫だけは携帯から聞こえ続ける。やまない。やまない！」

彼女は身をひるがえすと、フロアを駆け抜けた。

逃げたかつた。ただ逃げたかつた。

人を突き飛ばしてエスカレーターを駆け下り、

転んだ。

ヒールのかかどが溝にはまつていた。ありえない。
体中をエスカレーターの角にぶつけながら転がり落ちる彼女の脳の
裏に、呪い、という単語が浮かんだ。

エスカレーターのステップに頭を打ち付けて脳挫傷^(のうざんじょう)を起こした彼女は、そうして息を引き取つた。

白いものはじつとそれを見ていた。

表情は変わらなかつたが、どこか満足そうな気配^(ただよ)が漂つっていた。
ソレはやがて卓球の球ほどもない小さな頭を上へと向けたかと思
うと、垂直な壁をゆっくりと降りた。

*

翌日

「へえ、増える妖獣なんているんだ。僕、知らなかつたな」「そういう怖いのはバスだけど、一回見に行つてみたい。まどか、外の見学ツアーを企画しよう！」

「帰宅させなくともいいなら、いくらでも連れてつてやる」

「怖えつ！ 置き去りにすんなよ！」「怖えつ！ 置き去りにすんなよ！」

昨日同様、三人で登校すると、好奇の視線が集まった。

「やあ！ おはよう諸君。本日もこの白鳥にこ注目くださつて感謝ですよ。特に女子からの熱い視線とメールは大歓迎」

きょうだん教壇にのぼつた白鳥は大げさに手を広げ片足をひき、ビニの国・何時代だという一礼を披露した。九割の苦笑と一割の拍手を受けて顔を上げた彼の前を、悠然と三村が通りすぎてゆく。

「キミにメアドを教えてくれる奇特な女子がいるとは思えない」「いるつて！」

「ああそういうえば、僕に渡して下せつてメモをくれた子はいたね。それカウントしちゃダメだよ」

「誰がするか！ つか三村それは自慢なのか？ 自慢なんだな！ くらえ嫉妬ビームつ？」

素^すでプチコントを繰り広げる一人へと注目が集まる。まどかは感謝して、自分の机を探した。噂は、もう広がらなくていい。

机の端についている、名前の書かれた付箋を見ながら歩いていると、江上冬が席を立つた。入学当初、席は男女別に五十音順にきめられているので、数人分うしろの加賀森のところへ話をしに行つたらしい。

「……」

それとも避けられたのだろうか。

冬の隣りの机につけられた自分の名前を見つけて、まどかは渋面じゅうめんを作つた。

疑惑は、最初のH.Rで確實になつた。

「一年は長いようであつという間です。みなさんも遊び過ぎて後悔のないよう、気を引き締め直していきましょう。では最後に、何かありますか」

担任の挨拶あいさつとカリキュラムの説明があつた後の事だつた。
冬が体を斜めにして手を上げた。

「すみません、先生。私ちいさくて、黒板が見えないんです。一番前にしてもらつてもいいでしょうか」

「ああ、そうだね。相沢さん、替わつても大丈夫ですか」

ちよこちよこと小走りになつて、すみませんと相沢に謝る冬は、確かに小さい。

身長順に並んだら、文句なく一番前だつ。小さくて、体を斜めにしなければ前の生徒に阻まれて黒板が見えないのも事実だ。

だが、とまどかは思った。

「あいつ、本気で避けてやがる」
自分の隣りにいたくないというのが本音だろ？。

「円城くん、僕は思うんだけど、一人の女子を一田中田で追うのは、それが恋だとしても失礼だ」

放課後、三村が訳知り顔で言った。

「一途さとストーカーは、非常に近しい」

「そういう時は俺たちに任せろって。ほのかさん達を巻き込んで盛り上げてやる！」

まどかは中味を全部机の中に入れたままの軽いカバンを、騒ぐ白鳥の頭にぶつけてやつた。

「実行したら殺す」

そのままカバンを持って教室を出る。後ろで白鳥が頭を押されてうなつっていたが、日常の範囲である。

恋でないのは当然としても、無視されると気分は良くない。

ムカつくしイラつく。

クラスで楽しげに話していた冬は、今日一日、一度もまどかを見なかつた。記憶の中の彼女とは違う笑顔を惜しげもなくばらまくくせに、ちらりと視線を向けることさえなかつた。

。 いつそ別人だと割り切つたほうが楽だと、何度も思った。のに

差し伸べられた優しい手。唯一、人間扱いをして笑いかけてくれた。その記憶を捨てるのはもつたいない気がした。

もつたないと思う、その貧乏根性が悪かった。
おかげで本日中には割り切れなかつた。

きつと明日には思考の切り替えもできるだろ。

もういい。もう今日は考えるのはやめよう。まどかがため息をついて下校の鐘が放送される校庭を歩いていると、校門の方でざわめきが起つっていた。

「？」

女子も男子も、小声でわざわざ会つてゐる。みんな好意と好奇心を前面に出しているので、事件ではない。

緊急事態でないならどうでもいいと、まどかがテンションが低いまま校門を過ぎると、背後から声をかけられた。

「や、じやなくて、まどか君」

驚いて振り返ると、山桜桃^{やまざくら}が泣きそうな顔で立つていた。

「なんで口にいんだよ」

山櫻桃はかなりの引っ込みじんで、親戚の家にいたころは一度も学校に出てきたこともない不登校、現在は通信教育という筋金入りだ。

まぢかは出会ってから一年たつが、そのあいだ彼女が一人で外出したのを見たことがない。

他人とは異なる雰囲気をもつて、人目を引く顔立ちをしている。どうしても目立ってしまうのは、本人にとつては針のむしろだろう。

「鬼灯と//は？」

ふるふると、首を横に振られた。美少女以外に許されない仕草である。

「こんな所で待たなくていい。用事があるなら、携帯に電話くれればいいのに」

まぢかが人目のことへ行こうと促すと、少女はまた横に首を振った。

困ったような表情はあまり自分に向けられたことのないものだったことで、思わずまばたきを繰り返す。

「もしかして、オレじゃない？」

「くくりと小さく頷かれて、校舎を振り返る。

生徒数の多い学校だから、ここに数少ない山櫻桃の知り合いがい

てもおかしくはないのだが。

「……冬さん」

震えるか細い声が、一生懸命つむがれた。

「だつたらもう帰つたぞ。他の女子と一緒に、雑貨屋めぐりするつて。割り切ろうとした矢先に、どうして思い出をさせるかな」とたんに不機嫌になつて、まどかは告げた。

「うそ……。だつてわたし、ずっとここで待つてたのに」「もしかして、知つて避けたのかもな。オレも避けられっぱなしだつたし」

いざれにしろ、待ち人が残つていないのでしようがない。まどかは山桜桃と連れだつて帰り道を歩き出した。ずっと人目にさらされて耐えてきた少女は、精神的疲労と空振りの脱力感で足元がふらついている。

「それでよく来る気になれたな」「お兄ちゃんとリラが一緒だと、あのひと、本当を教えてくれないと思つたの」「本当つて?」

感性だけで生きている山桜桃には、人の言葉に違和感を感じるらしい。言葉と感覚の差を埋める一番近い単語を探して考え込んだ少女を根気強く待つて、まどかは街を歩いた。

学生の多い時間帯なので、同じ高校の制服をあちこちで見かける。たまに山桜桃に見とれる男子もいたが、彼らは隣にいるまどかに気がつくと慌てて視線を逸らせた。始業式を飛び出したハンターの

噂は、すでに全校に伝わっている。

「あのひと、隠してるの。それを見せて欲しかったの」「ようやく少女が探し当てた単語は、的確ではなかった。少なくとも露出狂方向ではないはずだ。

分からん。と、まどかは眉を寄せせる。

「前にも言つてたな。隠してるから、今まで見つけられなかつたって」

「うん。静義……まどか君が探していた人っていうだけじゃなくて、お話したいの。もしかしたら、あのひと、わたしと同じかもしだいから」

「もう使い分ける意味ないから、呼び方は静義でいい。それで?同じつて、冬が詠唱したのなんて聞いたことないけど

「ちがうの。そうじやなくて 巫女」

あまりにも真剣な声だった。

ふいに、かつて聞いた狂える女子の言葉が蘇つた。

『それは人ならざる者の声を聞く者』

『神の声を聞き、人に伝える者』

『巫女は、他の人とは同じになれない』

『さあ、神意を聞きなさい』

涼湖は

寂しさと傲慢さをまとった少女だった。

だつたかもしぬなかつた。

そうして、彼女はひとり死んだ。

ずいたら、死なないで済んだのか?

自分もそう

放つておか

呪詛を残して。首を吊つて。

もしかしたら、

助けることができたのだろうか。

「……巫女なんて口にするなよ」

「他になんて言つたらいいの？」

山櫻桃には涼湖の悲劇を繰り返して欲しくなくてきつい言い方になつてしまつたが、少女は理解していなかつた。

学校という多くの他人と過ごす場所を避けてきた彼女は、そもそも他人から浮くことが日常なのだ。

「そういうのは、言わなくていい事なんだ」
まどかは切なさを漏らした。

こんな素直な山櫻桃にさえ、自分には言えないことがある。

冬にしか分かつてもられないこと。
いまだに自分は排斥はいせきを恐れている。

冬に拒否された今はなおさらだ。大多数はどうでもいいが、一度受け入れてくれた鬼灯きちようたち、白鳥たちを失いたくない。
いっぽ、拒否を恐れない山櫻桃の方が強い。

「じゃあ、そういうモノ。あのときの空気は魔法とも違う気がしたから、ミラの仲間じゃないと思う。似た人がいない人。だから、もしかしたら、搖らぎと濃淡が分かる人なのかなあって」

「……たぶん、分かる」

ハッと、山櫻桃が足を止めて顔を上げた。緋すがる色があつた。

「だったら」

「山櫻桃は自分の気持ちをわかつて欲しかったんだな。同じモノを

見て同じ話をしたかつたんだ。でも、ダメだ。冬は話なんてする前に拒否する

昔の彼女なら、いくらでも山桜桃の話を聞いただろう。同じ目線に立つただろう。

しかし、冬はまどかが探していた『冬』ではない。変わってしまった。

彼女は空っぽの笑顔で、困ったように笑うだけだ。伸ばされた手など取らない。

「……『冬』が山桜桃だったよかったのに。そしたら、こんな変な状況になつてなかつたよな。お前を守つてやつたら、オレも普通に幸せなカンジだし、あの時の借りも返せて一石二鳥で」

瞳を伏せたまどかと対照的に、キッと山桜桃がまなじりを上げた。大人しすぎる彼女の、初めての表情だった。

初めてがいっぱいだ、とまどかがズレた事を考えてこらへつた。彼女は大粒の涙をこぼして睨みつけた。

「ゆす……」

「わたしの気持ち、ちょっとは分かつて思つたの」。それつて絶対違うと思つー もついいつ！ 静義のばか？」

ばか？

まどかは走り去る山桜桃を捕まえよつとしかけた体勢で、田を点にした。

今、会話がかみ合つてなかつた。

自分が手ひどく拒絕されたから、山桜桃には傷ついて欲しくなくて、ついでに答えの出ない事を考えすぎて疲れてうつかり逃避ぎみ

なセリフになつた。

山桜桃はそれを、恋愛コードで翻訳^{ほんやく}していた気がする。

違うのに。他意なんてなく、単純にへこんでいただけなのに。

まどかが伸ばした手をのろのとに戻して我に返れば、見ていた学生たちが一斉に顔をそむけた。……どう思われたかは、考えたくもない。

「サイテー」

吐き捨てる声の元を探せば、雑貨屋の前で加賀森^{かがもり}が軽蔑^{けいべつ}の表情を浮かべていた。もちろんその一団には冬も混ざっている。

「うそだろ……」
いつの間にか四面楚歌^{まわりじゅうご}だつた。

まどかは、完膚^{かんぶ}なきまでに撃沈された。

*

硬直していたまどかは、なんだか可哀想だった。

公衆の面前で「ばか」と泣かれて、女の敵と加賀森に罵かがもりられて。

原因が自分にありそなので、同情の度合いはさらに強まつたが、だからといって何ができるわけでもない。冬は誰にも悟られないよう、そつと溜め息をついた。

水晶の少女はきれいだつた。

昨日見た時もきれいだと思ったが、自分の足で立つ姿はもっと際立っていた。漆黒に縁取られた、透明な少女。まるで占いの球だ。あれでは自分の中にすべてを映し過ぎて、痛みも多いだろう。

冬は誰にも見つかりたくないからあの少女の中に自分を映すことはないが、その分だけ彼女の痛みが減るのなら、預かり物さえ悪くない気がした。

「冬といい、今の子といい、円城えんじょうの好みって大人しいタイプなのね」

違つと思ひ。

が、口メンソントできる立場にないので、困つた感じの笑顔をはりつけで首を傾げておく。

「でもひつかかる前に分かつて良かつたよね。」
「うなると、一組の男子トップは三村かな」

「微妙ですね。あのしゃべり方を何とかしてくれたらアリなんですか？」

「あはは。『円城くん、女性を泣かせるのはクズだと知つてるかな
けど』

「似てるー。」

皆で好き勝手言ひながら駅へと向かつ。

徒步通学の冬は途中で手を振つて別れ、そして角を曲がつた瞬間に笑みを消した。

疲れた。笑顔が疲れた。

友人たちとの無意味な会話は嫌いではないが、裏事情に勘づきながら笑いのネタにするのはあまりにもきつかった。

心の中でもどかに謝つてから、自分の顔に触れる。ちゃんと笑えていただろうか。笑顔の仮面は、剥がれていなかつただろうか。むにむにと頬をつまんで筋肉をほぐしていると、どこからかすすり泣きが聞こえてきた。

「……」

時間と距離から考えて、十中八九さつきの水晶の少女だと思ひ。冬がそっと物陰から首だけ出してみると、商業ビルと民家の隙間に残された小さな神社のすみで少女が泣いていた。

保護者、さつさと迎えに来なさい。

そう思つが、まどかも昨日一緒にいた一人も、誰も来ない。十分待つても一十分待つても来ない。

やがて、保護者も変質者も来ないうちに、少女は泣きやんだ。泣きはらした赤い目で、鼻をくすんと鳴らしながら神社を出てゆく。

冬がほつとして彼女の後ろ姿を見送っていると、境内で何かが揺らめいた。振り返れば、桜の結界がざわめいていた。

黒い靄もやが見えた。

恨みと惡意に満ちていて、それでいて誇らしげなモノ。

慌てて首を戻してもう一度少女を見直してみたが、幸い妙なモノは憑いていなかつた。

「良かつた」

彼女のためにも、自分のためにも。

除靈した方がいいと思うが、実行するのは少しためりう。

昨日は妖獸に手を出して失敗したのだから、やたらに力を使わせないで欲しい。駄目だと分かっていても、実害のあるモノにはどうしても手を出したくなる。それは困る。

あの靄の感じだと理に適つているようだし、それなら我慢しよう。
我慢我慢。冬はそう自分に言い聞かせた。無意識に、制服の胸元を

ぎゅっと握りしめる。

自分は隠れていてはならない。今はまだ。 そうでなければ、長年
静義の名を無視してきた苦労が報われない。

その名を聞いたのは、新聞でもニュースでもなかつた。
同級生の男子が興奮して話題にしていた時だ。

父親が妖獣退治を職業にしている同級生が、自分たちと同い年の
ハンターが出たと騒いでいた。誰にも師事せず、独特的の剣術を使う
新人が突然登場した、と。

名前と武器の扱い方からすぐに彼だと分かつた。
が、同時に、罷だと疑つた。

わざわざ自分の知り合いを目につかせる理由が、他に思いつかなかつた。その後で考え直して、厚意なのかとも思つたが、はつきり
しないうちに接触するのが危険なのに変わりはなかつた。

会つて話したいとは思つたが、結局は危険性を鑑みて、記事を読
むだけにした。

関係を悟られないために、興味のないフリもした。

元気だと分かれば、それで満足だった。なのに。

なのに、こんな所で破綻するなんて思わなかつた。
無試験で国家保全局にキャリア待遇入局という噂は嘘だつたのか
と聞いてみたい。

「私も、闇緑殿のばかと言つてもいいでしょつか？」

彼女の後ろ姿を見送つて、冬が帰ろうとした時だつた。水晶の少女が、何気なく振り向いた。視線が合つた。

「……ばかは、私ですか」

ぱあつと顔を輝かせて走り戻つて来る少女からは逃げられないと知つて、冬は神社から離れて待つた。

*

1.9 オルタナティブ心配性（前書き）

この漢字だけ・ルビだけの黒画面にポイント下さった方、お気に入り登録をしてくださった方、ありがとうございます。平身低頭。感謝感激です。

19 お兄ちやんは心配性

携帯には心配しないでとメールが届いたが、夜になつても帰つてこない山櫻桃を心配した鬼灯はリビングをうつうつ歩き回っていた。

泣かせて逃げられたまどかは、右足だけ貧弱ゆすりをしながらソファに座つて仏頂面をしている。

どうしようもない男たちに、ミラはラーメンを突き付けた。

「まだ七時だから。世の中の中学生がその辺うろついててもおかしくない時間つて思い出したら、とにかく食べなさい」

「でも山櫻桃は

「食・べ・な・さ・い」

過保護な兄を一言で黙らせて、ミラは一人がインスタントラーメンをする向かいで電話をかけた。

メールを打つても返信が来ないので、彼女も心配はしているのだ。何回目かのコールで山櫻桃が出た時には、安心のあまり、逆上して怒鳴りそうだった。

『ミラ？ 連絡が遅くなつてごめんなさい』

「そうね、今度からはメールだけじゃなくてちゃんと電話もちょうだい。誘拐されたかもつて悩むお兄サマが神経性胃炎になつちゃうから

ラーメンを黙々とすすつていた一人が、勢いよく顔を上げた。箸はしへ持つ手が止まっていたが、ミラが睨みつけると、一気に麺をかきこんで丂を流しに運んで洗つてから飛ぶように戻つて来た。

「これだけの動作が一連でできるなら、食器洗いまですればいいの」と思ひつつある。

そんな日常性とはかけ離れた心境だったまどかは、彼女の携帯を奪うと叫んだ。

「オレが悪かった！」

『……そうかも。今わたし、冬さんと一緒になの。一生懸命話したら分かつてもらえた。だから、静義が間違い』

理解するまでに数秒かかった。

その間に携帯は鬼灯に取られて、喜びのセリフが凄い大声で響き渡つていたが、まどかの耳と脳はその声を完全にスルーした。

冬が、なに？

「どうじつことだ？」

鬼灯の腕に飛びついて携帯に叫べば、弾んだ声がかえってきた。

『巫女^{みこ}じゃなかつた。それ以上は内緒つて約束したから、秘密^{ひみつ}』

「なんだソレ！」

絶叫は鬼灯に振り払われて途切れた。シスコン兄が携帯に頬^頬ずりしそうな勢いで話しているのを、床に座り込んだまま茫然と眺める。ミラがアワレな雑巾^{ぞうきん}でも見るような視線をこちらに向けていたが、まどかは気づけなかつた。

冬と、話した？

秘密？

どうして。どうして自分じゃなくて山桜桃に？

「あんな幸せそうな声、初めて聞いたあ。よかつたあ。山桜桃は友達を作れないからずっと気にしてたんだが、こうして少しずつ話せる人を増やしていけば、いつかは大丈夫だよな！」

感極かんきわまつた声が、まどかの頭上を通りすぎていく。

「まあねー。いきなり明るくてびっくりしたけど、いい傾向なんじやない。どうしても話をしたくて一人で出かけるなんて、ものすごい進歩。冬あきつて子がどういう子か知らないけど、人間凶器な静義と究極に臆病おくびょうな山桜桃を惹きつけるだけでも拍手モノだし」

呆あきれを含んだ、面白おもしろがる声も遠い。

「……オレも行って来る！」

何もかもが理解できなかつた。

冬に会つて話さなければと、から氣持もつもちだけが空から回る。もうもくつき眞まこと的てきに立ち上がつたところをミラに足を引っ掛けられ、まどかはまた転んだ。

「あたしが静義に勝てるつてあり得ないのに、ほんつと周りが見えてなーい。こんなんで乗りこまれたら、たまつたもんじゃないって。ね、鬼灯。タクシーで帰つて来るつて言つてゐるのに、踏みこんじやダメよねー？」

床に転んだまどかの上に、ミラが馬乗りになる。下から見上げる柔らかな体はある意味男のロマンだが、今はそういう場合ではない。

押さえつけられる前に脱出しようと必死に足掻いたまづかは、

「駄目だな。また山桜桃を泣かせたら、延々正座させてやる」

大真面目なシステム兄に素^{すま}巻きにされた。

20 インターローグ2（前書き）

またまたホラーです。

前のよりもいやーんな感じです。本人も書いてて嫌でした。

苦手な方は回れ右をお願いします。読まなくても話はつながります。

*

窓辺から覗く白いモノは、今日ばかりはここにいた。

くすんだ壁に貼られたメモやポスター、扉が半開きになつていてるクローゼット。皺だらけのベッドシーツの上には、乱暴に跳ね上げられた毛布と布団が重なり合つていた。

それだけを見たのなら、あり当たりな部屋だと判断しただらう。

だがその部屋の住人は、クローゼットから取り出した制服を思い切り床に叩きつけた。踏みつける。何度も何度も。

数少ない家具が揺れ、少しだけ埃が舞う。

階下に家族がいれば驚いて駆けつけたはずだが、今は誰もいない。

だから少年は、荒れ狂つ心のままに制服を踏みつけた。

次いでハサミを取り出し、渾身の力を込めて突き刺した。鈍い音がして、制服を貫いた刃先がフローリングの床に深く埋もれた。

引き抜くのに苦労した。呼吸が乱れる。

もう一度、頭上高く掲げて振り下ろす。ハサミが正確に校章に突き刺さった。

引き抜く。振り下ろす。

彼はその作業を繰り返した。息があがり、額にも両手にも冷たい汗が噴き出す。制服は紺色の端切れに成りはて、床は抉られて木片をばら撒いていた。

「くそつ、くそつ、くそつ！」

それでも少年はハサミを振りおろし続けた。口元に泡を吐き、無意味な言葉を繰り返す。

その彼の横にある、いまだに丁寧に整頓されている本棚には、教科書や参考書の他に軽めの小説がたくさん並んでいた。知っている者が見れば、その全ての小説に共通点があると気がつくだろう。

いつも虜^{しいた}げられている主人公が何らかの契機^{きつき}で立ち上がり、成功し活躍するストーリー。

少年は唯一秩序^{せいじ}を保っていた本棚に手をかけると、小説を床に放り投げ始めた。小説が無くなると、教科書と参考書も投げ捨てた。あつという間に足の踏み場がなくなる。

棚が空になつた。

「ふううううううううう」

ポスターを破り捨てた。メモも捨てた。机の中にあつた全てをかき出して捨てた。机を倒し、空になつた本棚を投げた。棚は壁に当たつて、歪ん^{ゆが}だ形で曲がつて止まつた。

途中で床の残骸^{さんがい}を踏んで、人の中指ほどもある木片^{せん}が足の裏から甲へと突き破つた。しかし痛覚は激情に圧倒されて麻痺^{まひ}していた。血が本や床を赤く染めたが、彼は作業をやめなかつた。

少年は手当てなど思いもよらず、狂つたように破壊と投棄^{とうき}を続けた。

シャツは汗で貼りつき、青い顔には黒い隈くまがあつた。落ちくぼみ、まばたきすら忘れて乾燥した眼球が、憑つかれたように部屋を見回した。

投げる物が無くなつた。壊す物が無くなつた。

「ひひひひひひ」

少年は唸つた。否定すべき自分の持ち物が無くなれば、あとは自分だ。

白い影が窓辺で揺らぐ。無言で責めるよつて、延々（えんえん）と揺らいでいる。

見たくない見たくない見たくない？

思考とすら言えない原始的な感情で、彼は「じみの海を泳いだ。窓の近くにあるニアではなく、部屋の奥へ。ビニカ奥へ。

一歩ごとに、足に刺さった木片が深く食い込む。りんかく輪郭の曖昧な血の足跡がそこかしこについた。

痛みを感じない代わりに、歩きにくいからくと苛立つた。

少年は必死で逃げた。隠れ場所を探した。

白い影の見えない場所へ。呪いに見つからない場所へ。

半開きのクローゼットがあつた。中は空。その中へ入り込んで、耳をふさぐ。きつくる眼を閉じる。

それでも そこにいるのが分かる。

きつと責めている。呪いの意識が、隠れたはずの自分を見つけた

のがはつきりと分かる。

ぞつとした。耳をふさいだ手が、ぶるぶると常識を逸した動きをする。震えというより、痙攣だ。

あの時も、彼だけは怖がっていた。今もそつだ。怖い。臆病おくびょうだと自覚している。

「そうだよつ。怖いよ怖かつたよ！ 震えて悪いかよしうがないんだお前もあいつらも消えろ消えろ消えろ？」

彼は目を閉じ続けた。

彼をいじめる同級生たちは、いつも一緒に来いと強要した。小遣いを巻き上げられ、使い走りをさせられ、他の誰かに軽い暴力をふるう時は参加させられた。

本当は、彼の小遣いが無くなれば他の誰かが払っていたし、飲食だって共にしていたのだから、同級生たちには彼をいじめているという意識はなかった。格下の仲間という分類に近かった。

しかし本人には、客観的に分析する余裕はどこにもなかつた。彼らと一緒にいるのが辛かつた。常に耐えていた。嫌だとは言えなかつたから、我慢し続けていた。

逆らえば、今まで自分が暴力行為に参加させられた時の被害者のように、容赦なく殴られ蹴られると思ったから。怖かつたから。

本当は、床に散らばる小説の主人公みたいに、最後には彼らと決別したかった。やりたくない事を強要されたら、断れるようになりたかった。

いつかは、と思っていた。

だがやはり『いつか』はこなかつた。

それより先に、凍えた空気が部屋に満ちた。

恐怖が、満ちた。

そこに、いる。

彼が隠れているクローゼットの真ん前に。

耳をふさいで震え、目をきつづぶり続けていたのに、それだけははつきりと感じられた。

熱いのか寒いのか分からぬ感覺。頭の先から足の裏までぬめる汗が噴き出す。足元で、汗と血が混じった。

ようやく木片に気付いて、彼はそれを抜いた。痛みが全身を貫いた。咳き込むほどに濃い血臭。息が上手くできない。吸えない。干ひあがつた魚があえぎのように似て、口だけが何度も開閉する。

悲鳴のような呼吸が漏れ、彼はさらに恐怖を感じた。

見つかつた。見つかつた。見つかつた。どうしよう！

どうもできなかつた。同級生の指示を嫌々受け入れてきたように、予想できる恐怖に竦み続けてきたように、ただ現状に必至でしがみつくしかできない。

彼は本当に、自分が臆病なのは知っていた。

「ごめん悪かつたオレ本当はあいつらを止めたかったんだけど怖くて止められなかつたごめん許して許して許して俺が悪かつたんじゃない謝るから

もう限界だつた。涙と鼻水と泡をたれ流し、彼は喚いた。絶叫した。無意識で謝り続けた。肺の中の全ての息を吐き出して、叫んだ。

彼の謝罪は、逆上と紙一重の逃避だった。相手が呪詛だろうが幽霊だろうが構わない。自分は謝った。悪いと思った。反省した。だから逃がしてくれ。見逃せ。だって、自分も被害者なのだ。

被害者同士、分かつて欲しかった。分かるべきだ。自分だって怖かった、辛かつた、嫌だった。誰にも言えないくて、なおさらキツかつた。

今なら、死んでしまった涼湖になら言える。言つてもいじめは広がらない。分かつてもらえる。だから。

叫び続ける彼の耳に、しゅる、と柔らかな音が届いた。自分の絶叫にかき消されて聞こえるはずのない、かすかな音だった。

後ろ? と、彼はバツと振りむいた。

あるのはただのクローゼットの壁。暗くて狭い場所。充血した目を限界まで見開き、その壁を凝視した。

だが、いくら見てもただの壁だった。涼湖の顔も浮き出なければ、血文字が書かれているわけでもない。どこまでも、ただの壁だった。いて、とにかく一度外に出ようと彼は扉を開けた。

「……」

ふと、そんな場所で膝を抱えて震える自分が滑稽に思えた。
しかも怪我をした足が熱を帯びた激痛を伝えて来る。涎と涙を拭

身を乗り出した彼の首に、ネクタイが引っかかった。
それが輪になっていると気付いた時には、体はもうクローゼット

から下りていた。首が締まつた。しゅる、と頭上のポールでネクタ

イが柔らかな音を立てた。

咽喉のどが鳴つた。

どうして。分かつてくれたんじゃなかつたのか？

問いは、もう声にならなかつた。幸か不幸か、頸椎けいついが見事にずれていた。酸欠よりも早く、生命活動が停止する。

そして丈夫でないクローゼットのポールが、彼の重みで折れた。だらりと垂れた体が、慘劇さんげきの後のような自室にすべり落ちた。白眼しろめには、目の前に散乱した小説は映らなかつた。

白い獣は銀糸のひげをひくひくと動かすと、目を細めた。

少年は臆病で、そして無知だった。

呪詛じゆそは一度発動したら終わるまで止まらないし、人の怒りは、周りがそうと知るよりも深いもの。どちらにしろ、逃れられるものではなかつた。

そう、まだ終わらない。

獣は右肢みぎあしを舐めて、毛づくろいをした。そして身軽に窓辺を蹴ると、その家から離れて走り去つて行つた。

21 「クラウが立ったー」 あるこども「ウォーター」（前書き）

ハイジとヘレン・ケラー

21 「クララが立つた！」あるいは「ウォーター！」

高校生活三日目^{みかづき}の朝、担任が出席を取っていた。

低血圧氣味^{ほあつせうきめい}の間延びした声を聞きながら頬杖^{ほほづえ}をついて前を見ていると、どうしても冬が視界に入る。

三村が言うように目で追っているつもりはないのだが、自分と教壇^{きょうどう}の間に彼女^{かれじょ}がいるのだからしようがない。拳動不審^{けんどうふしん}を承知で、ぎこちない視線^{しせん}を向け続けた。

昨日の夜、山櫻桃^{やまざくら}は七時半に帰つて來た。

年齢からいって、常識的な時間帯ではあった。山櫻桃には常識が備わっていないから、冬がそうしたのだ。

メールを打つた後に山櫻桃が返信をしなかったのは、話に夢中になつていて気づかなかつたからで、電話をしなかつたのは鬼灯^{きとう}の過保護^{くほご}ぶりを冬が知らず、胃に穴が開くまで心配されているとは思いもよらなかつたからだつた。

説明されれば当然すぎて、ミラも含めた三人は脱力した。

今までどこか浮世離れ^{うきよばな}していた山櫻桃は、現実の世界に焦点を合わせることができるようになつていた。

帰つて来てから楽しそうに今日の出来事を兄に報告する様子は、平和な一般家庭と大差なかつた。

『なにが普通なのか、どうしたらいいのか誰も言つてくれなかつたけど、冬さんはわたしと同じ言葉で教えてくれたの』

言わなかつたのではなく、言つても通じなかつただけ。

まどか達は内心こつそりそう思つたが、自分たちの方も、理解不能な感覚をもつ彼女の言葉が分からぬのだから仕方ない。

山桜桃は鬼灯の腕を甘えるようにゆすりながら笑つていた。やるべきことを指示されて居場所を見つけた安心感が、少女に余裕を与えていた。

『感覚のチューイングの仕方を覚えたら、こっち側に集中できるようになつたの。お兄ちゃんつてこういう顔してたのね』

つて、今まではどう見えてたんだ？

三人で顔を見合させた。

視力の低い人間がはじめてメガネをかけた時のクリア感を想像してみたが、何か違う気がした。『こっち側』があるなら、『あっち側』もあるのだろう。そこはまどか達にはさっぱり分からぬ。

『……山桜桃は同じ奴を探して、そういう技術を尋ねたかったんだたずねたんだ？』

『ううん。わたし、そんな事思つてなかつた。みんな混沌じょんとんの中で生きてるんだと思ってたんだもの。冬さんに会いに行つたのは、同じ感覚で話ができるかもしれないと思つたから。こんな分かりやすい世界があつて、そこに混ざれる方法があるなんて知らなかつた』

山桜桃は鬼灯の腕を放すと、ミラを真正面から見つめて、ぺたぺたと顔に触れて形を確かめ始めた。

『 ひつあはひつちで、あんたがそんな曖昧な世界見てるとは思わなかつたわよ』

『 そつみたい。どつちも知らないと、自分と違つ見え方がある』
に気がつかないんだつて。だからわたしみたいに、チューーニングすらしようとしないのも珍しくないつて、冬さん言つてた』

ひととおり触れて気が済んだのが、山桜桃はまどかの前に来てテーブルの上にちよこんと正座した。座る場所が違うのは、彼女の気迫に圧あおされて誰も指摘できなかつた。

『 お説教するから、静義も正座して』

指をさされ毅い視線で促されて、まどかはソファの上に正座する。

『 冬さんは変わっちゃつたからダメって、話してくれないつて、嘘。静義が傷ついてるのは分かつたけど、だからつて貶していいことにはならない』

貶したつもりはなかつたが、冬は冷たい人間だと思い込んでいたのは事実なので黙つて怒られておく。そもそも山桜桃は、反論を受け付ける気はなさそうだ。

『 冬さんはその方がいいから黙つてつて言つたけど、わたしが嫌。わたしは静義が好きだけど、拗ねてる静義は子供だと思う。わたしだって冬さんの本当は見せてもらえなかつたけど、拗ねないもん!』

『 ひつちは年季が違う。ずっと頑張つてたのが裏目に出たら、想つてた分だけ腹が立つんだ。分かれとは言わないが』

『

つい言い返したら、山桜桃の目がすっと細められた。

現実との接点を見つけたのはいいが、いきなり人形が人間に変わつたようでもどかは戸惑う。少女がはつきりとした表情を浮かべるたびに落ちつかない気持を味わう。

『まだ素直に謝らないんだ』

聞いたことのない口調。

『携帯で話した時、一番に謝つただろ』

『わたしにじやなくて、冬さんに。いいもん。明日も会う約束してるので、お兄ちゃんとミヲは連れて來てもいいって言われたけど、やつぱり静義はお留守番…』

『なに?』

山桜桃が人の世界で暮らしやすくなるのは良いことだと思つ。良く分からぬ感覚と折り合ひをつける方法を学べるなら、それに越したことはない。

が、きっかけは自分のはずなのに、どうして一人だけ仲間外れになる?

思いだして、納得いかなくて、まどかは出欠の返事をする冬の後頭部を睨みつけた。

「うなつたら絶対にあとをつけて、山桜桃たちとの集ま

りに混ざつてやる。

三村に注意されたにもかかわらずストーカーな決意をしていると、担任がぱたんと出席簿を閉じた。

「新学期早々こんな話をするのもなんですが、このクラスの山本さんは先日事故に遭つて入院していました」

入学式にも来なかつた理由はそれなのかと、まどかは斜め後ろを振り返つた。

教室中がざわめき、座る者のいない机に視線が集まる。

「そして今朝、病院で息を引き取つたと、じ両親から電話がありました。クラス代表としてお葬式への出席と香典を」

事務的な担任の冷静さは、生徒たちの驚きにあつといつ間に覆いつくされた。

21 「クララが立った!」あることは「ウォーター」（後書き）

今まで投稿時間が一定でなくてすみません。
これからは毎日午後5時に更新します。

22 ストーカー？

放課後、部活見学の誘いを断つた冬が教室を出た。

まどかも追おうとカバンをつかんだが、その目の前に加賀森と白鳥が立ちふさがった。見失わないようにはイントをかけて抜こうとしたら、さらに湊みなとと三村が邪魔をした。

「何」

ハンターの気迫で睨めばかなりの確率で逃げていくはずなのに、慣れている三村はおろか、加賀森も微動だにしないで見上げて来た。

「昨日女子を泣かせておいて、まだ冬に声をかけようなんていい度胸よね」

「みーたーぞー。あのキレイな子は誰だ。迎えに来てくれる彼女がいるなんて、一言も聞いてないぞ」

ズルイズルイと悶もだえている白鳥と、完全に誤解している加賀森はさて置いて。まどかは比較的はなしの通じる後ろの一人に理解を求めた。

「あれは彼女じゃなくて、組んでいる仲間」

「ばれやすい嘘は、つかない方が何倍も得なんだけね。あんな小さな子がハンターなら、最年少記録はある子だろう。だけどそんな話は聞かない」

メガネのブリッジを押し上げつつ皿のインテリ学生は、どこまでも理路整然だ。

「山櫻桃は仲間だけど、ハンターの資格は持っていない。一人では出歩けない不登校児で、危なつかしいからって保全局から許可が出てないんだ。代わりに、兄の鬼灯に同伴許可証が出でる」

冬はもう見えない。

だが山櫻桃たちと会つと分かっている以上、探す方法はいくらでもある。まどかはドアから三村へと視線を戻した。

「その山櫻桃に、冬が現実への適応方法を教えるんだ。だから一回ちゃんと話をしたいのに、あいつ、一方的に避けるんだ」

話したい理由は違うが、嘘は言つていない。

嘘でない以上、三村の勘と理論は突破できるはずだ。

思つた通り、ふうんと片眉を上げた三村と、ついでに加賀森の雰囲気が和らいだ。

「冬つてそういう得意だから、引きこもりを何とかしてるのは分かるなあ。^{えんじょう}円城つて、ボランティア関係の知り合いだつたんだ？」

「いや。違うだろ、恋だろ、一股だろ！」

「誰が二股だ！　まだ彼女の一人もいないのに、勝手に話を作るな！」

思わず本気で鞄を投げつけたくなつたが、ガマンする。こつちが冗談でも、白鳥に当たつたら大けが確實だ。

「……彼女、いないんだ。江上さんもフリーだけど？」「最大限の友情を希望するっ！」

超高速で耳まで真つ赤に染まつて断言したまどかの勢いに圧され

て、湊がぽかんと口を開けた。

万言を尽くすより、今の一回で実感できた。

「分かつたけど……。もしかして円城、恋愛つてしたことない？オトモダチから始めましょう？」

あまりの主張の激しさに、加賀森がひき気味に尋ねる。

「うるさい。何だつていいだろ。もう行く」

子供のように不機嫌に、四人をかき分ける。

荒い足取りで廊下に出ると、予想した通り冬の姿は見えなくなっていた。ふん、とまどかは携帯を取り出す。これくらいでまたと思つたら大間違いだ。

「北部一〇七番隊、さやぎ静義。プチッと緊急事態。忙しいとこ悪いんだけど、山桜桃たちの居場所教えてくれない？」

「円城くん……。君ね、公共機関の私物化はダメだよ」

こんなことで国家保全局のGPS機能を躊躇なく利用したまどかに、同級生の呆れあきを含んだため息が向けられた。

22 ストーカー？（後書き）

短いですが、切りがよかつたので。
かわりに、次は長めになります。

23 わいやーへりこむ

*

「改めまして、江上冬と申します。」挨拶が遅れて申し訳ありませんでした」

「場末の雰囲気がただよう店で、冬は丁寧に頭を下げた。
横には、満面の笑顔の山桜桃がいる。

「吉川貴朝です。登録名の鬼灯で呼んでいただければと思います。
このたびは妹がお世話になりました。おかげで昨夜からずっと、あれは何これは何と、今まで興味を持たなかつた物にも関心を示すようになります。感謝しています」

鬼灯も深々と頭を下げる。

高校一年生女子と大学三年生男子（彼は再々試験に受かった）の正式な挨拶は、あんたらどこの保護者会よソレと、ミラガ内心つっこむくらいだつた。

丁寧語が地の冬はともかく、つられた鬼灯の四面四角な態度は似合わなすぎだ。

「あたし//ア。ねえねえ、さつそく質問いい？　冬は山桜桃の感覚も分かるヒトなんでしょう。何者？　あと、静義との関係とー、拒否した理由も教えて？」

ハイテンションで早口で問われて、冬はいつもの困った笑顔の仮

面をはりつけた。

ハンターが集う店で頼むには邪道だったココアを両手で持つて、
湯氣を吹ぐ。

隣の少女が同じ動作でまねをするのは、彼女が自分に、慣れない世界の案内役を割り振っているからだろう。

「ココアは甘くておいしかったが、少女の信頼は苦い。」

「答えにくい質問ばかりです。山桜桃さんにアドバイスした人間がどんな者か、ご家族が不安に思われないようにお会いしてみたのですが。答えられない事の方が多いと、却つて安心できないかもしませんね」

「ええと、できれば信頼させて欲しいなあと思います」

最初から手の内は明かさないと釘を刺されて、鬼灯は苦笑し、ミラは鼻白んだ。

「善処ぜんじょします。まず私が何者かという質問ですが、静義殿からはどう窺つているのでしょうか？」

「野良犬を構つてくれた人間」

冬は、ぐらりと椅子いすごとひっくり返るかと思った。予想外すぎでコメントのしようがない。どんな認識なのだろう？

「他は特には聞いてない」

つまり何も教えていないわけだ。

冬は額に指を当てつつ、気合いで立ち直つてみた。

「そうですか。本人が言いたくないことを私が言うのもどうかと思いますので、細かいところは省きましたよ」

「ミラ、端折るなー。知る権利はござったー」「デモかストライキの参加者のように右拳を上げたミラの口を大きな手でふさぎ、鬼灯が領く。

「私はいろんなモノが見えるんです。山桜桃さんも見えるみたいだつたので、見えた物の処理の仕方のコツを教えてみました」

と、冬は自分の頭を指さしてみた。

視界は今までと変わらないが、脳で視覚情報を処理する過程で少し意識をすれば、他の人間と同じものだけを取り出すことができる。

「あとは慣れていけばいいので、疲れない程度に街に出たり他の人と話をしたらいですよ。ええと、次は」

静義殿との関係ですね、と思つたら、鬼灯がパタパタと横に手を振つた。ミラが「違うだろーっ」と両手をテーブルについて立ち上がり怒鳴り、椅子が倒れる。

「……あの椅子、直してもらつてもいいですか?」

きょとんとしている山桜桃に笑顔で頬むと、少女は元気よく飛んでいって椅子を立てて戻つて来た。
いい子ですね、と頭をなでると含羞んでうつむく。

「そこ! ほのぼの空間作つてんじゃないわよ。あたしは山桜桃に何を教えたか訊いたんじやなくて、あんたが何者かつて言つてんの!」

そういえば、そうだった。

「つかりしました、と冬がへにやつと笑うと、//リはギリギリと歯ぎしりをしながら席についた。

「悪いんだけど、その天然どうにかしてくれない。あたし、ズレるのとボケるとわけ分かんないのが嫌いなの」

「//リ短氣だから」

気にならないでと山桜桃がにっこりしたので、彼女はますます歯ぎしりをして腕を組んだ。人間はげつ歯類じやないんだから歯がすり減りますよと思つたが、言つたら更にひどくなりそつだつたので止めておく。

「でも、何者と問われても困ります。色々見えて、多少おせつかいなので、色々面倒事に巻き込まれるだけなんんですけど。妖獸退治はなりゆきで」

「ど・う・やつ・て！」

バンバンとテーブルを叩きながら//リが訊く。ココアがこぼれないように、カップは手に持つたまいまるしかない。また真似をしている山桜桃を横目で見て、飲み物は常に持つという間違った認識ができるないと良いなあ、と思つたり。

「一昨日は手近にある棒で突きました」

「固いでしょ妖獸！ あんたみたいな細腕で突いたくらいでじつとかなるか？」

「なりますよ。 あ」

カラソと鳴つた入口のベルに振りかえると、全力疾走して来たま

どかが息を切らして入つて來た。

「時間切れですね。では私は、」これで失礼させていただきます。静義殿によろしくお伝えください」

「逃げんな！」

飲みかけのカップを置いて冬が伝票を持つてレジに向かうと、怒りのこもった目つきでまどかがつかみかかつて來た。身をかわして、ひょいと避ける。制服のスカートが翻る。彼が冷静ならできない芸当だが、逆上している今なら簡単だった。

「ところで、私は静義殿のこと友人だと思つてました。わんこじやありません」

ぴた、と彼が動きを止めた。
瞳が迷うように揺れた。

「……だったら、もし本当にそつなら頼みがある。この近くの神社で同級生が自殺した。嘘か本当かは知らないが、そいつの呪詛で二人死んだって聞いてる。もし涼湖りょうこが呪いをかけたなら、そんなのは残つて欲しくない。解除してくれ」

「いいですよ」

神社の呪詛は、昨日見た。

山桜桃が泣いていた境内に、濃すぎる怨念を残していた。

田立つのは困るが、あれくらいならきり見つからない範囲で成仏させられると思う。冬自身も気になっていたので、このタイミングは『やつちやえ』という世界からの『ゴーサインだ。そ

う、ムリヤリ解釈してみる。

あつさり頷いたら驚かれた。息をのむ音。
「今でも、できるんだ……」

まど
惑う声。信じたいけれど、一度拒否されたために信じきれない感情が手に取るように分かつた。

そんな顔をしないで欲しかった。大丈夫と請け合いたかった。今も本当は、友人でいたかった。
でも、だめだ。

冬は制服の胸元をキュッとつかんで、いつもの笑顔の仮面をかぶつた。

「そのかわり、もう話しかけないで下さいね」
絶望が相手を染めるのを見たくなくて、冬は踵を返すと、素早く会計を済ませて立ち去った。

*

24 転（前書き）

起承転結の、転です。

「江上冬つ！ あの子も静義せいやきも、どうしてこいつなのよ？ ハッキリしないとスッキリしないって言つてんの?」

バンバンバンとテーブルを叩く音が店に響き渡つたが、荒事が日常的なハンターはそれくらいは気にしない。密はみんな自分の話を続けていいる。

「おじさーん、レミ・マルタンをストレートで！」

途中からキレイていたミラは、コーヒーのおかわりではなくブランティーを注文した。

「静義と一緒にいるのがダメだからって、話の途中で切り上げる」とないじゃない！

「あと、大きな魔法や詠唱の近くにもいるのもダメなんだって。だからわたし達ともあんまり会わないって、昨日言われた。今日は特別におまけだったの。なのに、終わっちゃった」

残念そうに肩を落とした山櫻桃やまざくらを、兄がなだめている。

まどかはコーラを飲みながら入口を見つめた。

自分といいのも、目立つのも、大きな魔法も詠唱もダメ。でもそれ以外なら、山櫻桃にもレクチャーするし、妖獣も退治するし、呪詛じゅそも解とく。その差はたぶん、使う力が大きいか小さいかだ。

「預かり物つて何か聞けたか？」

「全然。あの子、『」まかす』気は無かったのかもしないけど凄く天
然で、横道にそれるわミラは怒るわで、そこまで話が進まなかつた
んだ」「そつか……」

友人だと思つていた、と冬は言つた。彼女は笑顔の仮面をかぶり
拒絶の言葉をつむぐが、あの時は素すだった。空虚ではなかつた。
まどかはコーラを一氣飲みすると、席を立つてコートを羽織つた。

「来たばっかでもう帰るの？」

「預かり物がなんだか、訊いて来る」

使う力が小さい時の選択は、昔と重なる。
もしそれが本心なら、友人だと思つてくれていたなら。

『面倒くさい預かり物』をどうにかしたら、ほんとうに冬は前みた
いになつてくれるだろうか？　あの笑顔を向けてくれるだろうか？

店の外に走り出ると、山桜桃が追いかけてきた。もつとも、少女
は足が遅いので、すぐに飛びだして来た鬼灯に追い抜かれた。

「急がなきやならないのか？」

「呪詛を祓つたら、話しかけるなつて言われた。だつたら祓つ前に、
自分で訊いてみたい」

まどかは涼湖が自殺した神社へと急いだ。
消えない彼女の嘆きは、まだ胸に刺さつている。

『人ならざる者の声を聞く者』
うだつた。聞こえている。

冬もそ

『巫女は、他の人とは同じになれない』

は誰より他人と共にいた。

それでも『冬

山桜桃でさえ人の世が見えた。ならばそこまで酷くなかった涼湖なら、もっと救われたはずだ。だから

他人と同じではなくても、共にいられると言えばよかつた。どうして涼湖の事が忘れられないのか、気になってしまふかは分かつている。

後悔だ。

まじかはどうしたらいのか知つていたのに、彼女が自ら死を選ぶまで何もしなかった。その慙愧ざんきの念がどうしても消えない。

優しくないと決めつけた冬は、山桜桃の話を聞いて導いたのに。自分は昔から変わらない。

善人になりたかったわけじゃない。ほんの少しだけ、誰かのためになりたかっただけだ。なのに、それすらできない。保身が先に立つ。

本当は。

『冬』みたいになりたかった。

絶望の人生の最後に思いだして、辛くとも悪くなかったなと苦笑をもたらせる人間に。

25 推理物なら、「犯人はおまえだ！」的な

「冬ー。」

神社に駆け込むと、ふわりと桜の淡い花びらが散った。

後ろ姿はあまりにも小さくて、記憶の中の『冬』とはまったく違うのに、大ぶりな銀杏の木を見上げる姿勢がそつくりだった。ナニ力を見つめる表情は、笑顔の仮面を忘れている。

「冬」

「こんなになつてしまつて……。すみません。一田で被害者が三人も増えてしまった。理まで越えて……。こんなことなら昨日のうちになに成仏させてあげれば良かつたです」

彼女は銀杏に向かつて手を合わせていた。
謝つているのは、頼んだまどかではなく、そこにいるナニカに
対してだ。

やつぱりいたんだ、とまどかは立ちつくした。

「オレ、そいつを救えるはずだつたのに、無視したんだ。ここにも何回か來たけど、見えなかつた。贖罪なんて思わないけど、せめて助けたいんだ。オレに出来ることはないか？」

冬は睫毛(まつげ)を伏せて首を振つた。

それからまどかを追つて來た三人を、す、と指さす。

「境内に入らせないで下さい。特に、山桜桃さんは絶対に。山桜桃さんは綺麗な水晶ですが、簡単に変質します。涼湖さんがこんなになってしまった今では、来たら反応します。煙つてしまふ」

「……。やっぱりお前らの言葉は分かんないが、とにかく入んなきゃいいんだな」

まどかは三人を敷地から下がらせて、振り返る。

「あのさ、預かり物つて何」

「内緒です」

「それじゃ困るんだ。オレは『冬』の性格が気につてるんだ。お前がやりたいようにやって、仮面なんか取つたら、それだけでいいんだ。だから、預かり物をどうにかしたら」

冬は以前話した時と同じように、人指し指を額にあてて考え込んだ。ため息をついた。

「……やっぱりダメです。この話はどこまでいっても平行線で終わると思います。やめましょう」

有無を言わざぬ強さで切り捨てる。冬は銀杏の幹に手を触れた。
「頼まれた祓はらいいですが、呪詛じゆそではないんです。涼湖さんって、やり方は知っていたのですが力がなくて呪詛は発動しなかつたんですね。代わりに、墮おちちた魂の跡が残っています」

神社に残っていたのは、呪詛ではなく、自殺した少女の靈。

涼湖本人。

まどかは頷いたが、ミラは半信半疑で目を細めたりしている。

その様子に、山桜桃は鬼灯の手をすり抜けて駆け寄った。

「冬さんは間違わない。きっといるんだよ。わたしも見る。お祓い、

手伝ひ!」

「ちょっと待て?」

慌ててまどかが捕まえた時には、水晶と評された少女は境内に足を踏み入れていた。

「い

途端に少女はびくつとして、がくがくと震えだした。

「嫌

つ?」

甲高い絶叫を上げてまどかを突き飛ばした。普段の山桜桃からは想像もつかない力で、思わずよろける。

もの凄い拒絶だった。

まどかが愕然としていると、鬼灯が抱えて外へ連れ出そうと動いた。

「いや…………っ、やめてやめてやめて?」

だが山桜桃は、全力で暴れる。兄の腕に噛みつき、ひつかく。あつという間に鬼灯の頬や手に血がにじむ。

「何なの?」

長い黒髪を振り乱して叫び続ける少女に驚いたミラが、唯一説明のできそうな冬に詰め寄った。

「……だから入らないで下さいってお願いしたんです。水晶は、過去も未来も映します。山桜桃さんくらい何にもないと、映ったモノに引きずられるんですよ。涼湖さんもそうしたがってますし。今彼

女は、ここで自殺なさつた方の記憶と恨みを、追体験してゐるんです

自分が確立できていない人間は、簡単に靈に取りこまれる。

そういう事だ。理解して、まどかは顔色を変えた。

靈感少女を自称していた涼湖は、彼女を不愉快に思つていた女子グループにひどいことをされたと聞いた。彼女たちは、一緒に遊んでいる男たちに涼湖をレイプするよう頼んだのだと。

それを、追体験？

「山桜桃っ！ しつかりしる、お前は山桜桃だ。学校に行つたこともないだろ！ 自分と他人を間違えるな？」

必死で叫ぶまどかの声も聞こえていないようで、少女は悲鳴を上げながら自分の髪をつかんでひっぱっている。ぶちぶちと音を立てて抜けた漆黒の髪にぎょっとした鬼灯が、山桜桃の手をつかんで止めた。

ハンターして大刀をふるう兄と、狂乱の馬鹿力で暴れている妹の力が拮抗した。

「……呪詛は成立しませんでした。あなたが靈となつて脅すことを、呪詛とはいいませんからね」

冬は銀杏から手を放し、山桜桃へと一步踏み出した。

「冬？」

「私も追体験させられましたから、見えました」

まどかは思わず顔を歪めだが、冬は山桜桃とは違つて自分と他人

を混同したりはしていない。精神科医は患者の痛みを分かち合^ううが、同調はしない。

同じになつてしまつたら救えないと知つている。

「殺し方も見えました。^{ひら}あなたが恨み言を連ねたら、女の子四人と男の子一人が錯乱^{さくらん}しましたね。罪の意識に耐えられないほど責めて、自殺の形へと追い込んだ。そしてもう一人は」

「つて、待て。死んだのは安部たちだけじゃなかつたのか」「関わっていたのは、全員殺すわ』

涼やかな声が答えた。

25 推理物なら、「犯人はおまえだ！」的な（後書き）

わかりにくかったら、感想でつぶやいて下せー。

つて言つても、次も解説がつづきますが（＾＾・）

26 転々・ひょーい。（前書き）

タイトルだけでも「メーティで行こう」と思ってるんですが……。
ナニカ違つ……。

26 転々・ひょーい。

『関わっていたのは、全員殺すわ』

錯乱の収まつた山桜桃が、薄紅色の唇に嘲りを浮かべた。
鬼灯とミラがぎょっとして少女を見つめる。冬は、困ったよつて眉尻を下げた。

「そろそろやめましょう。皆さん保身しかできない方々でしたけど、でも、彼らなりに反省していたじゃないですか」

山桜桃 涼湖は鬼灯の手を払い、すっと立ち上がった。
冬の正面まで来ると、傲慢でさびしい表情を浮かべて、わざとらしく乱れた黒髪をかき流す。

『だから何？ 頭にくるだけだわ。惱んでるような顔をして、自分も被害者面をして、それでもうのうと生きてるんだもの。本当に悪いと思つなら、死んでくれればいい。それさえできないなら、狂えばいい。狂人になつたなら、優しく導いてあげるわ』

涼湖はつゝとつと笑い声を立てた。

冬は彼女をじっと見つめた。

一番先に諦めたのは、まどかだった。

思い直して自ら山桜桃から離れてもうつのは、不可能だと語った。冬も、遅れてため息をついた。

「どうしても殺すんですね。

「山本つて」

日本さんのように

教室の空席。

「今朝お亡くなりになつた方です。彼も犯行に加わっていた。そして山本さんは、靈の脅しに屈する人ではなかつた。だから涼湖さんは、近くを通つた車の運転手を利用して、アクセルを離せないようにして山本さんを轢き殺させた」

彼女の自殺は呪詛でなく、祟り。

冬の言つ事がまどかにも理解できた。怨念は呪詛ではなかつた。すべては怨靈となつた彼女が、自分でやつていたのだ。

『イイ気味。でもまだ六人ね』

ちらりとまどかを見上げた山桜桃は、確かに涼湖だつた。そこに宿るのは悲しみでも恐怖でもなく、怒りだ。自分らしくしましようと言いながら、ほんの少しの逸脱さえ認めない社会に対する怒り。

『わたしは全員に復讐するまで、成仏なんてしてやらない。あいつらを確実に殺すために自殺してやつたんだもの。分かるでしょう？彼らのせいでわたしは巫女の資格を失つた。きっと呪詛が成らなかつたのもそのせい。無理に祓つなら、この子の心を引き裂くわ。それが嫌なら、邪魔しないで』

まどかは思い違いに気付いた。

涼湖は恥辱を感じて嘆いたのではなく、復讐の手段として自殺したのだ。

自分で彼女を救えなかつたのだと、唐突に理解した。

正しいか否かは別にして、彼女の自覚と誇りの前に、面倒を避けるために沈黙を薦めるまどかは無力だ。自ら人の理をはみ出てなお、信念を曲げない涼湖を説得できるわけがない。

「他人を巻き込むのはやめましょう。罪をこれ以上増やすのも。ご自分のしたことが分かつていますか？ 自殺しなかつた山本さん以外にも、被害者はいるんです。あなたが殺したのは、七人。あなたは、いつの間にかあなたをいじめた人たちと同じモノになつてるんですよ」

『いいえ、六人よ。女が四人、男が一人。わたしはあんな低俗なと同じになんてならない。ねえ、正しくない人間に裁きを下して何が悪いの。そのために出来ることをして何が悪いの！ 放つてくれたら、この子はちゃんと返すから！』

山桜桃のあどけなさとはかけ離れた、怒りを隠しもしない姿。ものはや醜悪しゅうあくというより痛々しかつた。まどかは顔をそむけ、冬に救いを探そうとした。

冬なら山桜桃も涼湖も助けてくれるはずだ。

だが彼女は、覚悟を決めた厳しい調子で指示を出す。

「すみません静義殿。さやぎ 残念ですが、もう遅いんです。罪を犯した魂を天上へ送ることはできません。彼女は償わなければ。ですが、山桜桃さんは助けます。一人を分離させますから、そしたらすぐに安全な場所に連れて行つてください」

まどかは自分の甘さを痛感した。

どうやっても、無理は無理なのだ。まつ青な顔でうなづく鬼灯に

ならつて、いつでも動けるように構えをとるしかない。

『嫌よ！ この子がどうなつてもいいの？ わたしが負を碎くのは
神意に適うかな行いなのに！ 邪魔をしないで？』

「……あなたが自分で裁きを下せたのなら、そういう言い訳もでき
るかもしれません。ですが、あなたは復讐に他人を巻き込んだ。も
う、理はありません。 七人目、あなたの罪はそこに」

す、と冬は指をさした。

涼湖がバツと見上げると、中空にわだかまる闇があつた。

26 転々・ひょーい。（後書き）

やつぱり分かりにくいですか？
すみません。実は説明が苦手です。
質問いただければ、そのつどお答えします。

27 感ひかいてトンペストと読む。（前書き）

ホラー入っています。
スプラッタ入っています。
でも今回ばかりは飛ばすと話がつながらなくなります。ごめんなさい。

27 嵐とかいてテンペストと読む。

するり、と闇から手が伸びてくる。

黒く日に焼けて皺の目立つ腕が、五指を広げて誰かを求めていた。つうつと一筋の血が流れている。

ぼたり、と涼湖の白い頬に赤い滴が落ちた。

۲۷

二〇四

いつしか滴は雨になり、少女だけを赤黒く染め上げていた。赤錆の臭い。べたつく黒い雨。

「理不尽に殺されたのは、事故を起させられた運転手さんもです。先ほどお亡くなりになられました」

その黒い闇の中、闇の中で、ぎょりと田が開いた。

「あなたはあなたを死に追いやった生徒に報復した。もちろんその権利はあります。だから、その生徒たちはここにはいないでしょう？ 今ごろは引きずり込まれた冥界で悔いてる頃です。でも同じよううに、運転手さんにはあなたを罰する権利があるんです」

冬が言い終わるより早く、闇が収縮した。

事故にあつた時そのままの、血まみれの指が涼湖の咽喉をつかんだ。苦悶の悲鳴があがる。折れた骨が肉を突き破つて出ている腕を、

少女は何度も叩いた。べしゃり、ずるり。べしゃり。^{したた}滴る血が叩かれて飛び散り、死者の皮が垂れた。

それでも運転手は彼女を放さない。決して放さない。

痛みではなく恐怖で、少女は絶叫した。

どくん、と闇が、ひとつ脈打つた。

「気が、済みましたか？」

『済むもんか！ なんでオレだけ死ななきゃなんねーんだよ』

その瞬間、闇が爆発した。

「……なんでも皆さん、引き際を間違えるんでしょうねえ……」
冬がため息をついた。

二人分の怒りと恨み、なによりも強い心残りが弾け飛ぶ。
黒い嵐が吹き荒れ、神社の木々を揺らした。葉が飛び、土が舞い上がり、しめ縄が揺れる。片隅にあつたブランコの座面がちぎれ飛んで、冬の足元に突き刺さつた。台風以上の暴風だ。

「おいー！」

叫んだまどかに、ぐつたりとした山桜桃の体が押し付けられた。

「安全な場所に」

指示を思い出して鬼灯たちと共に走り出しだが、どうじても気になつてまどかは振り返った。

神社いっぱいに大きく濃く成長した闇は、もはや運転手でも少女でもなかつた。

怨念の塊。

「何なのよもうー。こんなのにヒトの意識なんて無いわよ？ 手に

負えない、早く逃げようつてば」

わけの分からぬモノが大嫌い、と常口頃言つていたミラは、幽靈話も嫌いらしい。恐怖から逆ギレしている。

鬼灯も彼女が倒れこまないよう支えているが、その彼としてもこんな超常現象は初めてだ。必死に風圧に耐えている。

「一人で走れっ！」

まどかは抱えていた山桜桃を鬼灯に渡すと、走った。風に逆らつて、闇の濃い中心部へと向かう。

「冬、大丈夫か？」

「もうっ、バカ男っ！」

ミラはブチ切れて叫んだが、すぐに意識を切り替えた。魔法呪文^{スペル}を叫ぶ。

風を操る術。

それは発動したが、黒い嵐は止まなかつた。

「ムカつくつ！ でもちょっとは効いてんでしょう！」

さらなる呪文に重なつて、細い詠唱が響いた。

祓はらいの詠唱だった。山桜桃だ。意識を取り戻した彼女は、真つ青になりながら、震えながら、それでもなんとか声を張り上げている。

闇がわずかに揺れた。

だが、それだけだつた。嵐は止まず、今度は「ラン」の支柱がまるごと飛んできた。

「くそっ」

鬼灯は妹とミラを両脇に抱えると、横に大きく飛んだ。否、本人はそのつもりだったのだが、嵐に巻き込まれて斜め後ろに飛ばされた。

かわいじて一人を背にかばうと、腕をふるつ。足が地面にめり込む。

「つらあつ？」

「氣合」と共にはね返すと、重すぎる凶器は桜にぶつかって落ちた。^{フルンコ}

鬼灯は荒い息をついた。そしておもむろに両手をクロスして掲げると、一歩も退かない姿勢で構える。次々と飛んでくる小石や枝が、彼にぶつかってはね飛んでゆく。

「みんなは逃げろって…」

まどかが振り返ると、ミラがハツ当たり氣味に叫び返す。

「あたしだって逃げたいけど、外からやるより中からの方が、ダイレクトに効くんだから仕方ないでしょ？」

強風にあおられた金茶の髪がバサバサと乱れ、形相とあいまつて本物の鬼のようである。『ワイ。まどかは思わず首をすくめた。

「タ、お前にねじつするつもりだ」

「もちろん祓いますが、どうして避難してくれないんでしょう。ひとつでもやりにくいんですけど」

状況を無視した平静さで答えられて、まどかはプルプルと両手を握りしめた。

「祓えるなら、さつやと経でもあげてやれよ… そんで成仏させとけ？ こんな、わざと怒らせて暴走させてじつする氣だよ…」

「わざと暴走させたといつのは誤解です。山桜桃さんから安全に靈をはがしたかつただけです。それに、静義殿、覚えてないんですか？ お経は靈を諭すためのものではありません。色即是空、空即是色^{くわく} 形あるものも目に見えないものと変わりなく、目に見えなくとも存在しています。死者は失われたわけではなく、見えなく

ても存在しているんですよーっていうのがお経の意味です。お経とは、この世に残された人たちを慰めるための言葉だと、以前申し上げたような気がするんですが

「この期に及んで、仏教学とかどうでもいいっ？」

ぎりりと睨みつけると、へにやっと清廉な笑顔を返された。

仮面ではない、冬の素^すの笑い方だった。

まじかが一瞬ひるんだ時には、冬は闇の中心に向かつて微笑んでいた。

「同情はするんですけど、あなた方、他人に迷惑をちゃダメですよ。やりすぎ禁止です。あの世で怒られてきてトセー」

しゃらん、と音がした。

風が凄いにも関わらず、それでもなお澄んだ響き。冬がすっと手を伸ばすと、制服の袖近くから銅色の何かが飛び出した。全体が引き抜かれると、釧杖だとわかる。

上部に取り付けられた環が重なり合って、ぶつかり合つて鳴る、纖細な音色。

ぐるりと釧杖を回すと、冬は石突きを地面におろした。

途端に響いたのは、それは音というより、甘やかな振動だった。

魂を揺さぶる音色といつ表現があるが、その時の音は、どうしもうもない絶望と苦しみと怒りを抱えた少女と運転手の魂に確かに届いた。音は幾重にも重なり、波紋を広げ、力を広げ、原初の色を共振させた。

人生のすべてを振り落とした、最初の魂だけが残つた。
それしか残らなかつた。

闇も黒い嵐も消えた神社で、冬はまたへにやつと笑つた。
「行つて、反省してらつしゃい。たいへんな時期かと思ひますが、
そこは自業自得という事で」

残つた小さな魂たちは黙々とこねるよつにその場でぐるぐると円を描いた後、ふ、と消えた。

まじかは清々（すがすが）しこ氣分で、冬にトランペーンした。

「お前なあ、その技できるんだつたら、わつと披露（ひらぐ）してお前が薄情者（うすじょうしゃ）になつたからって迷わなくて済んだのに」

魂に直接働きかける冬の技は、今も昔も変わっていなかつた。

断罪ではなく、正誤を教えるのでもなく、ただ、生きるために生きる最初の意識を思こ出せせる。それは、冬の優しさと遠慮なのだと思つ。

その時、罪人の魂の多くが記憶を振り落とす。

切ないが、忘れなければ許すことのできない恨みとこのりもあるのだろう。記憶したまま許せるような人間なら、そもそも怨靈（怨霊）になどならない。

恨みを手放すところまで導かれただけでも、彼らには救いなのだ。

「迷つても疑わないのが、さすがです。といひで」
言つた冬は、周囲を見回した。

立ち去くしている鬼灯（きとう）。ぽかんとしている。震えて兄の後ろに隠れている山櫻桃（さんざくとう）。

そして、片方切れてだらりと地面についているしめ縄（しめのう）、地面に

突き刺さった破片。ふとんで倒れていた「ランゴビ」、その下敷きになつた桜の木。

「私、あるものを預かつてゐるって言いましたよね」「ああ。でも、今どうしてその話？」

嫌な予感がした。

「静義殿」といふと田をつけられるとも。同じよう、「うこう大技」を使うと、預かり物を探してゐる方に見つかっちゃうんです」

「……それって」

「ええ。桜の結界も神社の結界も破れていますから、真夜中の花火くらいい田立つたんぢやないでしょうか。じゃなかつたら、生クリームのど真ん中に一粒だけある苺くらいいに」

まじかも周囲を見回した。

「なんで苺シートの例え。まあいいけど。来るなら、やるけど」

田をつぶれば、じこからか『違ひ』気配が近づいて来ていた。津波のような音まである。

「山櫻桃、祓いと能力増強の詠唱を頼む。鬼灯、ミラ、大物が来るぞ。覚悟しとけ！」

「そういうわけで、これ、お貸します」

のほほんとした声に田を開ければ、冬が大氣から剣を作り上げたといふだった。

「なんだあつ？」

渡されたのは、むかし自分が使っていた剣と作りも飾りも全く同じものだつた。鐔^{つば}に刻まれた瑕^{きず}まで、寸分違わぬ場所にある。

「今の私作ですから、妖獸なら一刀両断できます。

抜ける

なら」

意味深長に言われて、まどかは眉をしかめた。

理解は追いつかないが、自分用に出された物を使えないのは無能みたいで嫌だ。

「ぐくりと唾を飲み込んでから精神を研ぎ澄ませる。ぴたりと手に馴染む感覚は懐かしく、まどかは知らず、微笑^{ほほえ}んだ。

音もなく、白刃が現れた。

「さすが静義殿。じゃあよろしくお願ひしますね
ふにやつと笑つた冬は、ひらひら手を振ると

脱兎の^ごとく神社から逃げ出した。

「ちよつと待てい？」

「一人で逃げるつて何よ！」

「ハリも叫ぶ。

「あ、そうだ。白いハムスターを見つけたら、山桜桃さんには絶対に近付けないで下さい」

「何だそれ！」

思わず吼えたまどかに、緊急放送のサイレンが直撃した。

『北地区D区画より複数の妖獣が侵入っ！ 現在北地区にいる全員に、強制避難が発令されました。最寄りの指定場所に集合してください、順次南地区に搬送を開始します！』

「うつそだろ」

どんな妖獣が侵入して来ても取り乱したことのない保全局の放送担当者の声が、上ずっていた。

しかも内容が尋常ではない。

妖獣の種類と数を言わなのは、カウントを諦めるくらい複数だからだ。

一つの地区をまとめて避難させるなど、未だかつてない事態だった。

「なんだこのタイミング」

「『冬の預かり物を狙つて來た』に一万！ 何なのよもうー！」

「ミラ、……賭けをしてる場合じゃないと思うの」

「それより俺の大刀も作つて欲しかった！ 手ぶらでどうじろつてんだよお？」

大騒ぎをした四人はそれでも、まっすぐ神社を襲撃して來た妖獣を全力ではり倒し始めた。

28 だつと（後書き）

2章終了。

剣の柄を握る小指と薬指にだけ力が入る。振り切った瞬間に、親指にも。

もらつた剣は、妖獣を斬るのに殆ど力を必要としなかつた。まるで素振りか型の練習でもするかのように、抵抗なく両断してゆく。

「すっげ……」

もちろん妖獣だつて攻撃していくのだが、まどかの技量なら、攻撃が当たる前に反撃するか避けられる。いつもの狩りに比べたら、格段に楽だつた。容易すぎて、いつそ怖い。

これは“違う”。

「闘つついより、カカシと剣豪？ 居合の練習？ 相手にならないわね」

ミラは見晴らしのいい社殿の上に飛び乗つて魔法をかけまくつているが、状況把握がしやすい位置だけに、まどかの奮戦ぶりに愕然としていた。

人間凶器とネーミングするくらい普段から群を抜いて強かつたが、今のは次元が違う。

強いという言葉すら合わない。

もはや、まどかの周囲には現実感がない。常識と一緒に画してい

る。

「妖獸が力カシって、ありえねえ。あーあ、やつぱり俺の刀も出して欲しかつたなあ」
その傍らでは、鬼灯きちらわが素手きぢゅうで獸を殴り落としていた。

無茶な腕力勝負ができるのは、山櫻桃やまざくらが兄にだけ集中的に能力増大の詠唱を向けているからだ。
普通なら仲間がいる一帯に詠うたつただが、どう見ても今のまじかにはそんなモノはいらなかつた。

なので、ミラが遠距離魔法攻撃、鬼灯が接近戦というスタイルの補助のみを行つてゐる。

「だつて冬さん、お兄ちゃんの『力』を知らないもの。たぶん、保持できないと思つたんだと思つ」

詠唱の合間に山櫻桃が膝を抱えた。この事態を引き起こしたきっかけが自分だと気がついている。

「なんだそれ。そつち側の無言の共通認識を端折らないで欲しいぞ」
どこまでも余裕のあるまじかは、舞い散る紙でも切り捨てるかのよくな動作の合間に叫んでみた。

「静義さやぎの剣、実体じゃないの。冬さんの念で出来てるから、使用者が常に意識しないと消えちゃつ。でも、お兄ちゃんだつて体力とか生命力とか意思力とか、そういう『力』がちゃんとあるんだから、作ってくれたら使えたのに。残念」

言つてから、また新たな詠唱に入る。途端とたんに間近に迫つていた妖

獣の動きが止まり、鬼灯に屋根から蹴落とされた。

これが、冬の力？

まどかは剣をちらりと見た。

剣という形限定でも、とんでもない威力だ。

「うわー、やだー。そんな武器作れる人間がいるなんて初耳。もつと前に、保持ができるハンター全員にやつてくれたら妖獣退治も楽だつたのに。こっちは命張つてんのよ？」

「隠してたから。やつたらこうなるつて、分かつてたんだと思づ」漏らされた不満に、山桜桃は組んだ両手が白くなるまで強く握りしめた。

まどかも頷いた。

空一面、地にも満ち、妖獣は視界を埋め尽くす。

振り下ろされた妖獣の腕が頭上すぐまで迫っていたが、まどかは先の一体を斬った体勢から身をひねり、斬り上げる。

頑丈な皮膚も鋭い爪も、布のように軽い抵抗しか残さなかつた。腕が落ちた懷に摺り足で飛びこみ、一閃。すぐ後ろにいた妖獣もう一体もまとめて葬る。

もう何十体、何百体退治したか分からぬ。

しかし、神社の境内に残る妖獣の死骸は、数えるほどだつた。社殿の周辺に、鬼灯が叩き落したモノだけが積み重なつてゐる。

まどかの斬つたモノは、しばらく経つと大気に溶けた。地に還つた。

高校を襲つた蟻嬢もそつだつたのだろう。

こんな退治方法や武器生成は、『冬』にはできなかつた。

おそらく『預かり物』は、この『力』だ。

まどかは確信を持つて妖獣を斬りまくつた。

おそらく『預かり物』は、この『力』だ。

冬が巻き込まれたのは、予想より大規模なものだ。それを想えば、自分の行動は駄々と思われても仕方ない。

心のままに人助けをすれば、こうして妖獣を集めてしまう。それでは多大な迷惑をかけるから、冬は目立たないように、手を出さないようにしていた。

きっと自分でも、そんなのは嫌だつたはずだ。
だからみんな仮面のよつな笑い方しかできなくなつて。

「バカすぎる！」

どんなにまどかや他のハンターが力不足に思えても、巻き込みまいように一人で頑張る冬はバカだ。

どうせあの性格なら黙つていられなくて最後には見つかるのだから、いつそバレるの覚悟で保全局まで巻き込めば、今よりはマシな状況だった。

無造作に前進して白刃を振り切つたまどかは、ようやく妖獣のい

なくなつた境内を見渡した。

安定した呼吸は、妖獣を退治した後とも思えない。

「やつと終わつたな。どうやら街に被害はほとんど無かつたようだ」屋根の上から遠くを望んだ鬼灯が、野太い笑みを浮かべて飛び下りた。

「良かつたあ。ところで死骸がなくとも報奨金つて出る？ もしかしてタダ働き？」

ミラが屋根の上でしゃがみこんで、ついでにひっくり返った。

口調はいつもどおりだったが、わずかに語尾が震えていた。さすがに数百匹にも及ぶ妖獣の集中攻撃は怖かつたらしい。強がれるだけ立派だ。

まどか達が一息つくと、周囲に潜んでいた保全局員が詠唱や魔法をとめて出てきた。

神社を取り囲むような格好だったが、別に包囲されているわけではない。彼らなりに退治していただけだ。

「無事か。あまり手伝えなくて悪かったが、大丈夫だつたか？」

指揮官らしき局員に、まどかは冗談で敬礼して見せた。

「北部一〇七番隊、四名全員無事。見てたなら分かつたと思うけど、妖獣の種類と数は不明」

「変わつた剣だな。いっそ死骸破壊の手間がかからなくていいが。報奨金に関してはできるだけ配慮するとして、何が起こつたのか把

握してるか?「

問われて、まどかは冬が触っていた木に目を向けた。
ここで幽霊や呪詛の説明をして、現実主義の局員に理解されることは思わないし、言いたくもない。

涼湖りょうこを救えなかつたまどかは、結局まどかのままなのだ。
言いたくない事は隠していて、だから世の中に受け入れられてい
る。

「ここで自殺した女がいたんだ。中学の同級生」

「ほう。それで?」

「別に。何か嫌な予感がして保全局に山櫻桃やまざくらたちを探してもらつて、
店に行つた後ここに来たら、こつなつた。それでなし崩しに狩りを
してた」

「……話があまり繋がつてないが、妖獣の行動に理由を求めても無
駄なんだろうな。侵入もランダムで一貫性などないし。了解した。
あとはこっちで処理する」

指揮官が後ろに頷くと、社殿脇の死骸を処理する局員と街の見回
りに行く局員に分かれた。素早い行動。

苦笑を浮かべた鬼灯きちよつが、ミリと山桜桃に手を貸して屋根から下ろ
し、四人は神社を出た。

「嘘をついてないのに」ミラがせる静義^{さやぎ}つて、便利だわー。後でつつかれても怖くない」

平静を取り戻したミラが、満足そうに腕を伸ばす。

山桜桃は硬い表情で黙つて歩いていたが、充分に神社から離れた位置で足をとめた。まどかのコートを引っ張った。

「ん？」

「冬さん、全部をわたし達に押し付けて逃げたんじゃないの。冬さんを狙つて来た妖獣をいっぱい引きつけて、外に出て行つた。ハムスターも追いかけて行つた。だから、お願ひだから助けに行つて」

「ええっ、どうしてソレをもつと早く言わないの！ 行くわよ！」

「待つて」

山桜桃は走り出そうとしたミラの腕に飛びついて、失敗してずるつと滑つて道路で丸くなつた。

「…………」「」

現実に焦点を合わせられるようになったのはメデタイが、行動はまだ普通とはかけ離れている。

「痛た……。お兄ちゃん」とミラはダメ。ううん、もし冬さんが刀を出してくれるならお兄ちゃんはいいんだけど、今無いから。危ないの。外の妖獣、冬さんに気がついたのは全部集まって来てる。今までの狩りとは全然違う。だから静義だけ

座り込んだまま、少女は一方向を指さす。

その両目に涙が盛り上がり、落ちた。
汚れた頬にいくつもの筋を作る。

「わたしが考えなかつたから、助けるためにあんなことになつた。静義が言つたのも、そういう事なんだね。言わなくてもいい事があるし、しない方がいい事もあるの。だから今度は考えたよ。局員さんに聞かれないところまで黙つて歩いた。わたしも、行きたいけど行かない。足手まといだから、待つてる」

「……ああ」

まどかは柔らかく山桜桃の頭を撫でた。

「行つてくる」

そして我慢できずに唇を噛みしめると、顔をそむけて走り出した。

苛立ちを足に込め、怒りを速さに変えて外へ向かう。

何で何で何で！

さつきもバカだと思ったが、冬は本当に大バカだ。

本当に、どうして一人で何とかしようとするんだ？

勝手に困になつて自己満足されたら、こつちはもの凄く腹が立つ
のが分からぬのか！

違う。分かつてやつてゐるから、もつとやりきれないの
だ。

信用していたとしても、作為なんかなかつたとしても、自分の手に余ることを他人に要求する冬ではない。

一撃で妖獣を倒せるくらいの力を預かっても、まだどうしようもないくらい、今度のことは大事なのだろう。

でも、だからといってコレはない！

まどかはまだ街中であるにも関わらず、抜き身の剣をひっさげて全速力で走り続けた。

31 冬・実戦その1

*

神社から離れたすぐ後のことである。

冬も全力で走っていた。防御区域の外に向かって。

「おい、避難場所はそっちじゃないぞ！」

誰かが声をかけてくれたが、心遣いに感謝しながら走り抜ける。

御魂みたま送りを見つかったなら、もう隠れていてもしょうがない。釀杖みやけじょうで、できるだけ派手に妖獣を殴り倒しながら外へと向かう。

侵入しかけていた妖獣が気づいて進行方向を変えた。防御区内の神社に向かっていたモノも、冬を追つてやって来る。

息がきれる。

このままだと外に行く前に妖獣に追いつかれてしまう。荒い呼吸を繰り返しながら、冬は釀杖を構えた。

追いつかる、ではなくて、もう追いつかれてしまった。

津波のように押し寄せる妖獣の群れを睨みつけ、ささやく。

「手を貸して下さい」

答えはなかつたが、悪靈となつた闇を消した時のように口突きを地面に打ちつければ、しゃらんと硬質な音が響き渡つた。

音は空氣を揺らし、存在を揺らす。

存在する『力』の弱い妖獸は、それだけで形を失つた。残つた妖獸のうち先頭の一匹を殴り倒して、また走る。

足の速い順に距離が開いた所で妖獸を祓い、走り、音が効かない一匹には釈杖を叩きつける。

こうしていけば確実に数は減らせるはずだ。もぐら叩きよりも気の長い戦法を選びかけた冬は、だが、顔を上げて作戦を断念した。

追いかけて来る妖獸の数が、明らかに増えていた。

左右を見れば、遠くにいくつもの土煙りが登り始めている。それらすべてが、ここに向かっている群だ。

妖獸が我が物顔で存在する防御区外では、敵の数は無限に近かつた。これでは一体ずつ確実になど、やつていられない。その前に体力が尽きる。

冬は、冷静さを直ぐに課して深呼吸をした。

意識を凝らす。

大氣と共に無尽蔵の殺意を感じたが、さらに意識を広げれば、た

だ在るがままに在るすべてに辿りつく。

汎く同調し

集束する。

打ち鳴らされた石突きの音は、円環の響きと共に大地を揺るがせた。

比喩ではなく、実際に波状に土が盛り上がる。

音で衝撃を与え、あるいはダメージを加えた妖獸の体を跳ねあげ撒き散らし大地に埋める。葬る。地の抱擁を受けたモノは一度とその軛からは逃れられない。

無に還るまで地下でうなり続けるしかない。

預かり物は厄介だったが、こいつ荒技が使えるのは便利かもしれない。

「ええと、もう少し街から離れましょーか」

荒野の遠くに見える土煙りを確認して、冬はまた走り出した。

「無事終わつたら、ランニングでもして鍛えるという事で」
息切れしつつ荒れ果てた大地を進んでいると、白いものが埃で霞んで空を飛んでいるのに気付いた。

当たり前にも思える光景。

だが大きな翼を広げた獣は、鳥ではなかつた。ハムスターのよつな小動物の背に翼がついている。その首には、金に深紅の石を嵌め

込んだ飾り。

冬は自ら飛び込み、滑空して来た獣に向かつて釧杖を振るつた。

32 冬・実戦その2（前書き）

えーと、ハムスターなどの動物を愛している方はダメかもしちゃま
ん。

動物愛護な方はもつとダメだと思います。

R15より、精神年齢R20（自己責任を知り、現実と虚構の区別
がつく）でお願いします。

32 冬・実戦その2

冬は自ら飛び込み、滑空して来た獣に向かつて釣杖を振るつた。

驚いた獣は羽ばたいて勢いを止めたが遅く、右の翼^{わき}が寸断された。ぽたりと落ちる。白い羽根が何本も舞い散り、胴^{から}が傾ぐ。しかし、決してその羽根が血に染まることはなかつた。

冬は間を置かず、釣杖を返して打ちかかる。

一撃目は外れたが、環の接触音は響き渡つた。寸断され転がつていた小動物の一翼^{わき}が消えた。

「いきなりとは無粹^{ぶすい}だな」
攻撃を避けた本体は、自らが地に落ちる瞬間、ふわりと人の姿をとつた。

滑らかな銀糸^{はくせき}が流れ、白皙^{はくせい}の頬にかかつた。同じく銀にけぶる長いまつげ^{またた}が瞬く。首を飾るザクロ石と同じ、紅い唇がうつすらと微笑んだ。

砂時計の体型をした、豊満な美女。

乾燥した大地には不似合いな女が、そこには立つていた。

切られた翼の分、中身のない右の袖が風にはためいた。

「礼を欠いたかもしけませんが、私も余裕がありません。星董殿がいらっしゃるとは思いもしませんでしたから」

大きく後ろに下がった冬は、一撃で倒せなかつたことを悔やんだ。

鷹揚^{おうよう}につなぎいた女は、頭を上げて砂煙の方向を眺めた。

津波か地響きのように刻まれていた振動と足音が、ふいに消えた。周囲に妖獸の気配が無くなり、代わりに女の失われた右手が生えていた。

妖獸を吸収して自らの一部とする能力は、星董と妖獸が同じモノであるという証明だった。

地の花を星と讃^{たた}え、天の星を花^{うつく}しぶく彼女は、闇に属するモノの中でも実力は高い。これくらいの芸当ができるも当然だつた。

「そうだな。闇縁から継いだお前の力も、櫻水様からいだたいたわたしの力も同じ強さなら、無尽の代えを持つわたしが有利。理解しているなら、諦めてソレを渡してもらえないか?」

「それだと私がこの世にアドメを刺すことになつちやつて、後味悪いです」

へいやりと緩んだ笑顔とは裏腹の、固い声。

「お前が案じる必要はない。先日わたしは恨みに惹かれて街に入つ

た。小さき獸を互いに争わせ、最後に残つた一匹を神に捧げると言つていたぞ。はらわたを裂かれ木に打ちつけられた獸は、わたしが受け取つてやつたがな」

女は血の胸に手を当てた。

彼女がさつきまで姿をとつていた、羽根の生えた獸の素もとはハムスター。その小動物は涼湖りょうこが呪詛じゆそに使つたものだつた。

「知つていますが、それが何か」

憎しみを募つのらせた少女は、いわゆる邪法に手を染めた。

それが一番入手が簡単だつたから、百匹近いハムスターを買って、水も餌もやらずに狭い壺の中に閉じ込めた。数日後、同族を喰らい一匹だけ生き残つた小さな獸は、白い毛皮をべつとりと血に濡らして壺を割つてみずから出てきた。獸はその時には、怨念と狂乱に支配されていた。

それを手に、涼湖りょうこが蟲毒じゆくといわれる呪詛を行つたのを、そして失敗して自分でやることに決めたのを、冬は幻影で見た。

そういう残酷な方法をとらざるを得なかつた彼女にも、罪なく命を絶たれた動物達にも同情はするが、星董にはかえつて詩題になる話だらう。

何を言い出すのかと思い、冬は油断せずに構えたまま隙を探した。

「魂は恨みが凝りすぎて美しくはなかつたが、二重構造は悪くない。

見ていて面白かつたぞ。この世で互いを自殺に追い込み追い込まれる同族喰らいの人間が、さらに同族喰らいの呪法を使う皮肉はな

「……」

「そして呪法が発動せぬと、己が手で殺してゆく様は。そう、ここはわたし達の世に近い。お前がいるべき場所でも、守るべき世界でもあるまい」

「だからといって見捨てるわけにもいきませんし」

言つた瞬間、火炎が爆発した。

32 冬・実戦その2（後書き）

星董（せいとう）：詩の一派からとつてみました。
蟲毒（じじく）：昔からあります。蛇が一般的。

……なんのフォローにもなつてませんね？。

33 かぜはふこでこる（前書き）

今回のサブタイトルは作業中のBGMです。思いつかなかつたので。

33 かぜはふいでいる

隙を探していた冬の隙を、星董がついたのだ。

化かし合いと駆け引きは、あちらの方が上手。とっさに釧杖を回して防御と為したが、吹っ飛ばされた。

一撃で焼き肉にならなかつただけマシだ。

「裁きの劫火ではお前を殺せないのは知つていい。だが、衝撃は辛かろう。義理立てせず、甜へ移ればいいものを」

「……つ」

「譲り受けた力は

「その杖か？」

また衝撃がきた。

堪え切れず、釧杖が手から飛んだ。

星董は、荒れた地面に倒れた冬と転がつた釧杖を、美しい瞳で見比べた。もう用はないとばかりに、冬の首をつかみ、高く持ち上げる。

じたばたと何度もその腕を蹴つてゐるうちに、冬は思い切り大地に叩きつけられた。衝撃で思考が止まる。目が回つて吐き気がした。

「十分に分かつただろう？ 杖はもう一つ。お前は逃げてもいいぞ」慈悲深いといつてもいい、やわらかな声が楽な道を告げる。

「……そうですね。」うなつたら、戦略的撤退というのもありでしょうね

もそりと上体を起した冬は、あけらかんと呟いた。
女が微笑む。

「ふむ。言葉を飾つてこらのなら許せり。だが、真に戦略なり、もう少し力の差を知るか？」

表情はあでやかなまま、圧迫する殺氣が増した。

「『ハルヒのひー』、冬に何してんだよ？」

間近に、よく知った気配がした。

*

魔法の炎弾に焼かれ、あけこむを即ちぶつけで傷だらけになつた冬を見た瞬間、まどかはぶちキレた。

ずいぶん離れていたはずだったが、数メートルを跳躍して女に斬りつけた。

頭骨を碎く手応え。

剣から左手を放し、冬を奪い返す。

美麗すぎて近づきがたい威容を持つ女の腹を蹴り飛ばし、その反動で離れた位置まで下がる。

それだけの動作を一瞬でやつてのけた。

「やつと来たか。遅い」

「敵に待たれる筋合いはねえ」

冬を下ろして後ろにに押しかづいたまどかは、ぎょっとした。

斬りつけた星董の額が、二つに割れていた。

しかし、眉間を裂いた傷はぱくりと黒い断面を見せたまま、血の一滴も出ない。妖獣すら一刀両断の剣を受けて、倒れもない。

人間の姿をしているのに、人ではなかつた。

「お前は何だ？」

「あの世の人ですよ。逃げていいそうですから、一度退却しませんか」

冬がへろりと言つが、まどかは動かなかつた。

「あの世つて、こいつ幽靈か」

「いいえ。いつそ幽靈なら楽だつたんですけどねえ」

会話の間に距離をはかる。

釈杖が双方の間に落ちている。

敵が狙つてゐるくらいだから、きつと冬の大切な物。

「そうだな、実体のある幽靈なんてないかつ」

負傷も覚悟で走り出す。

スライディング。杖をつかんで冬に放り投げる。

星董は、邪魔をしなかつた。ふつと、人の悪い笑みを漏らす。彼女の黄金の首飾りに埋められていたガーネットが、暗い光を放つた。

暗い、冥くらい、光。

どこかで見た事がある。

(なんだ? ビード?)

まどかは思うが、疑問は靈がかつて消されてゐく。
ほんやつと。

…………#どかには古い記憶がある。

だが、その話は誰にもしたことがない。
できるわけがない 生まれ変わる前を覚えているなんて。

ネット上ではテンプレかもしれないが、言つたらオカルト少年指定が入つて生きにくくなる。状況を見ようとせずに靈感少女を自称していた涼湖も排斥された。

それが現実だ。

だいたい、記憶はあっても靈感はない。
ある意味、もの覚えのいい普通の人間と何も変わらない。

否、その記憶で得をしている部分もあるので、多少は違つのかも
しないが。

まどかの昔の職業は、隠密だった。

平たく言えば、剣士と忍者の中間みたいなものである。だから体術も気配を探る方法も、斬つたはったのコツも覚えていて、中学一年にして防護区外の妖獣を退治するハンターにもなれた。史上最年少だったので、狩りに出て他のチームに会うと確実に覚えてもらえる。

自分で言うのもなんだけど、凄腕の少年。

覚えてもらつて、話して欲しいと思った。

「……」いつか冬の耳に入るやつ。
ちなみに前の名前は静義さやき。登録名と一緒に。
冬なら、きっと分かるはずだと思っていた。

会えたらどうする、とマリエは訊かれたが、本当にそのへんはどうでもよかつた。

ちょっとだけ昔の話をして、三村や白鳥のようなバカ話ができる友達になれたらいいと思った。
ただ一緒にいたいだけだった。
それで十分だった。

でももしかしたら、今会えたら、冬なら自殺した涼湖や呪詛をどうにかしてやれるかもしれない期待していた。

そして思った通り、望みは叶えられた。

なぜなら、冬はむかし僧侶だった。尼さん。

神仏と共にあつた、本物の聖職者。

本物の聖職者。

と言ひとキラキラしいのを想像するかもしれないが、寺社で説法をしているような飾りではなかつた。

市井で仏法を説くついでに、たちの悪いやくざ者にとぼけた天誅てんちゅうを下し、田畠を荒らす獸に説教かまして追い払う。

乞われれば悪霊退治からケガの治療、寺子屋の代理師範までこなす、ある意味なんでも屋か便利屋のような、一風変わつた尼だつた。

見るからに無頼だつた自分にさえ、ふにやつとした脱力系の笑顔くわいがほを向けた。

清廉潔白きよげんきよはくが身上で、裏表がなくて良かつた。

自分が内偵に行く藩と彼女が行く方向が同じで、しばらく一緒に歩いた。

当時この世界は妖獣はいなかつたが肉食獣はいたし、加えて彼女が行く先々で化け物を見つけるので、手を貸した。

そうして退治するのは面白かつた。

あの時が一番、楽しかつた。

藩においては隠密など、人ではなかつた。

暗黙の身分階級として非人という区分があつたが、似たようなものだ。

引退の歳まで生き残れた隠密はどこかから子供をさらつてきて、

死んで当然の教育と育て方をし、生き残った者だけが里の外へ出られる。

そうであつてさえ、権力者にしてみれば、いてもいない者・使い捨てポイな物だった。

そして、内偵から戻ったあとで後ろ暗い仕事や裏取引の手引きをさせられて。

いろいろ事に勘づきすぎたという理由で、味方だった隠密たちに殺された。

死ぬときに思い出したのが、あの旅だけだった。

他に楽しい事なかつたのかよ自分、と思つけど。
実際なかつたんだから、しちつがない。

『あの尼に所縁ある者が、転生の時を迎える。かつて閻緑が過分にも思える裁きを下した魂ゆえ、そなたの一助となろうか』

玲瓏たる珠の声が告げていた。
静義は広い白洲のすみで、それをかしこまって聞いていた。

地獄での事務作業から連れて来られたばかりで、自分の事が話されているのも分からなかつた。肩と目がこる地味な責め苦から逃れられたのはいいが、説明くらいして欲しい。

玉座のそばに控えていた星董^{せいきん}が、朱の口元に笑みを刻む。

彼女の銀糸の髪と白皙^{はくせき}の肌はもちろん美しかつたが、その声の持ち主と並ぶどどうしても色褪^{いろあせ}せて見えた。

彼女の銀は、ささやかな光を反射するのみ。真美称賛に値するのは、最高位を示す刺繡と宝石を連ねた座にある、白金色の男であった。

御簾^{みす}の奥、仄暗^{ほのぐら}い闇の中、彼が動くたびに白金の残像が後を引いた。

想像を絶する美は、月光であり虹であつた。誰もがそう讃えた。それは、燃え立つ白光が地に降り立つたかのようだつた。

星董はうつとりと銀の睫毛を伏せていた。

『それが櫻水様のお気持ちとあらば、ありがたく』

『無論、そなたに助けなど要らぬのは知つておる。これは尼と閻緑^{ゑんりょく}、わたくしの邪魔をする一人に対する、ただの悪ふざけだ』

細く長い指に招かれて、静義は裁きの場を進み出た。

以前見たのとは違う王や白洲に違和感を持つたが、王は王だ。

閻羅王、または閻魔大王といつ。

罪人の魂に裁きを下す王の言葉は絶対だ。静義は指示を受けると、界をつなぐ扉を開けた……

「櫻水様の命を覚えていよくな

星董の、声。

あの白洲で聞いた声。

彼女の首飾りである柘榴石の赤の奥にて、とろりとした白金の光沢
が見えた。

まじかは剣を振るつた。

王の指示どおり、尼　　冬へ。

35 ぶつかりや話・せいか編ひわせ

「あーこんひと金属音がしたと思つたら、手のひらに力と振動が走つた。

無表情で見下ろすと、剣の直撃を受けた岩が砕けた。

「つまつこ」の邂逅は、闇緑殿の厚意じやなくて、櫻水の作為でしたかつ」

リスザルのような身軽さで避けた冬は、一撃田を警戒している。

「……」

全身すり傷だらけの背の低い少女は、切れた制服を氣にもせず、鬪つ者の瞳で立っていた。そこに宿る感情は、まどかの知らないものだ。

憤怒でも怨嗟でも絶望でもない。もちろん興奮や興味でもない。

力でも技術でも勝るまどかは一撃二撃と浴びせ、そのたびに冬はきつきりで逃れた。

「ああナ 嘲る銀色の声をどこかに聞きながら、まどかは無心に防御する少女を見つめた。

相手が誰だらうとも思わないほど、頭がぼんやりしていた。

白金色のねつとつとした霧が記憶と思考の全てを閉ざしていた。

冥界の裁定者 閻羅王・桜水は、静義が隠密として殺した罪を償うために、今一度地に生まれよと命じた。

償い方は、王に害意を抱く者を倒す事。

簡単だと思った。

動くモノを追いつめ殺すのは、厳しく叩きこまれた条件反射だ。
まず潜め。聞き、探れ。もし見つかったなら、斬れ。突け。裂け。
捌け。抉れ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ
殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ殺せ

実際に、指導に当たつた元隠密はありとあらゆる技をかけてきた。中でも彼が得意とした剣では、幾度も瀕死の重傷を負わされた。その絶望的な痛みを避けるため、静義の剣は、田の前の者を屠るまで止まらない。止まれない。

そう、最後にはその元隠密を殺してやつと手を止めた時のよつこ。

かかつて来た味方全員を微塵にして、はじめて自らも致命傷を追つていたと気づいた時のように。

しかし、少女の瞳が白金色の霧をかき乱すようだつた。静義が倒して來た人間は、誰一人としてこんな瞳をしていなかつた。絶望でも諦観でも放棄でもなく。

「信賴？」

た。 該当する一番近い単語を思いついた瞬間、まどかの動きが止まつ

「おせよ、ついでに、まーす、静義殿？」

冬が緊張感のない笑みを浮かべる。

それを隙と判断した体は、反射的に逆袈裟の形に剣を払っていた。

振り切ったところで、剣を握っていないのに気がついた。

「……」

「いい加減起きてくれませんか」

「なるほど、お前の剣はそいつからの借り物だつたのか」

「もう少し早く起きてくれると助かつたんですけどね。仕方ないの
で、力の供給を止めさせていただきました」

「では、わたしが代わりの剣をやります」

星董が手を振ると、空中から漆黒の剣が落ちてきた。まどかは迷
わずつかみ取り、冬へ斬りかかる。

「後は任せたぞ」

「見逃してくれるなんて言ひて、最初から静義殿を使つもりだつ
たんですね」

冬はまた逃げ跳びながら、ため息をもらす。

「桜水様の好意はたいせつに受け取らねば」

「いえいえ、大切な物はしまつておいて下さい」

「お前もしまわず、使つていただきなさい」

笑い、荒れた地面に落ちた釧杖へ星董が手を伸ばした。
「では闇縁の力はもらっていく」

冬は焦らず、またひょいとまどかの剣を避けた。

「その剣、使いにくくないですか？」 静義殿の剣つて、お侍の刀より反りが浅いんですね」

視線が交差する。

緊迫した状況なのに、どこか緊張感のないすっとぼけた笑顔。

「……」

「暗殺メインだから、斬るより突ぐのを優先させた形で

剣をふるひ。冬が避ける。

「だからその剣では、私は殺せません。慣れない剣なら、意識して動きに補正を入れるべきなこと、寝ぼけてるんですから。どうします？　このまま追いかけてこしますか。自分で起きますか？」

「……」

「それとも、私が起こしましょつか

瞬間、まどかは反射的に後ろへ跳んだ。

殺気ではないが、恐ろしさを感じた。心臓が強く脈打っていた。

冬には、まだ手があるのだ。

信頼しても、油断はしない。そういう事だ。

無条件の信頼なら、殺せていた。それは嘲りの対象。

むかし寒村からさらわれたのは、欲しがられたからだ。だったら親代わりの愛をくれるなんて思っていた子供は、あつという間に裏切られる。

さらつた理由は、そうしないと人材が足りなくなるからだ。百人さらつて來ても、最終的には十人程度しか残らない生活と訓練だつた。

人並みの飯が欲しかつたら、強くなる必要があつた。

静義が強くなる事で相対的に弱くなつた子供が衰弱死しても、勝ち続けなければいけなかつた。

星董がこの世を蟲毒の呪法になぞらえるのも当然の苦界。^{くさい}

しかし、冬はそんな世界でさえふにやりと笑つていた。

今もだ。

『預かり物』の力が相手に渡りそうなのに、何の武器もなく敵に対峙しているのに、彼女には焦りはない。相変わらず緊張感なく微笑み

「返事がありませんね。じゃあ、起しちゃいますよ」
大きく手を打つた。

35 ぶつひやか話・井上か編ひわせ（後書き）

いわゆる柏手ではありません。
柏手を打つのは、神社関係者。尼さんも手を合わせるだけです。

ただ両手を打ち合わせただけなのに、ぱあん、と高らかに音は響き渡る。

音波が大気を揺らし広がる。否、音に乗せた力が全てを祓う。

浄化の音。

攻撃をやめ立ちすくんでいたまどかの耳を、音が叩いた。

「……そういうや初めて会つた時もオレ、お前を斬つて一人で行こうとしたな。で、防がれて驚いた。武闘派の坊主なんて本願寺へらいしか知らなかつたし、それ以前にお前、女だったから」

「正気に戻つていただけたようで、ほつとしました。桜水殿おうすいも、こ
ういう嫌がらせは止めていただきたいのです」

命がけの攻防を嫌がらせと言い切る冬に、まどかは呆れた。

「嫌がらせじゃなく、悪ふざけだつてさ」

「そうですか。あの性悪なところ、どうにかして欲しいです」

緊張感のない会話を、女の苛立ちが遮つた。

「何故だ！ それは闇緑るりょくの力を使っての祓いのはず！」

すでに割っていた星董せいとうの額がさらに崩れ、流砂のように粒子が落ちていた。憲りずに周囲に集まりかけていた妖獸も、消えている。

額を押された女は、釧杖を拾い上げると不愉快に瞳をすがめた。

「なんだこれは。ただの物ではないか」

「つ、返していただいて、ありがとうございます」

胸を貫くよう高速で投げつけられた杖を、冬はなんとか受け止めた。

入れ替わりでまどかは飛び出す。

怒りに任せて星董が放った魔法を、叩き斬る。冬を狙つた力が左右に散り、大規模な爆発を起こす。

「闇緑殿の力を釧杖の形にしたなんて、誰が言いました？」
冬がすかさず釧杖を振る。力を乗せた一閃。

カツと、辺り一面を薙ぐ雷が放たれた。

耳をつんざく轟音。灼熱の光輝。抉れる大地と巻き上がる粉塵。目を焼く光が退いた後でさえ空気は帯電し、異常な感覚を伝えて来る。逆立つうぶ毛。微細な振動。静寂の中に鳴る耳鳴り。

重力に従つて砂が地面に落ち、徐々に砂煙が収まつてくる。
その向こうに、影。

「来るつ？」

至近距離から放たれた炎を剣を掲げてはね返したが、ダミーだった。受けた力が大きすぎて、まどかの手がしびれ、足が地にめり込む。その隙をついて

懐に星董が入り込んだ。

炎をまとわせた手刀で心臓を突き刺そりとする。

まどかは自分から後ろに倒れ込んで回転した。すぐに立ち上がり、下から剣を振るう。腕を落とそうとしたが、相手の反応が早すぎて指先だけが落ちた。その指をえ、すぐに再生する。

いつの間にか、額の傷まで治っていた。

「なんだこいつ」

「星董殿をはじめ冥界の上位者は、下位の妖獣や住人を吸収して傷の埋め合わせをします。プラモーテルとか壁の傷に、パテを塗り込んで直す感じで。だからこの世界に妖獣がいる限り、倒すのは難しいんです」

「無限増殖もそういう事か

倒しても倒しても増える蟻嬢を思い出して、まどかはげんなりした。

「お前をあぶり出すためだけに妖獣を放つたわけではない。このようないつのための布石だ」

少しは気がすんだ星董が、あでやかに胸を張る。

「救命材料を先に補給しておくなんて、ある意味殊勝ですね」
いやみでなく感心している冬が、まどかには信じられない。

「ああ？ 妖獣を、放つた？ お前がか！」

以上、まどかのはお約束でした。

昔はいなかつた、突然現れて増えだした妖獸。

この世界の生物とは、発生学的につながらないモノ。

つながらなくて当然だつた。

冥界の生き物だつた。手際を誇る星董^{せいきん}が憎たらしく。

「どれだけの人間が死んだと思ってるんだ！」

「冥^{めい}が賑わうのは良いことだ」

「冬^ひつ、オレの剣つ！」

漆黒の剣^{けん}を捨て、叫べば、即座に差し出された。

冬の手に鞘^{さや}をのこし、剣だけを抜く。

まどかは上段から剣を叩きつけた。

炎をまとつた星董の手刀とかみあつ。魔法の力が働いていて斬れない。ならばと肩や胴を狙えば、ことごとく防御される。

剣戟^{けんげき}が十合を過ぎたあたりで、銀色の女が準備を終えた。

楽しげに細まる眼差し。

しかし冬も集中を終えていた。

知つていた。タイミングは昔と同じ。

剣は自分の手に、鞘は冬に。

富本武蔵にならつて直ひなら、剣は鞘に戻る 帰るのだ。

帰るのだ。

「いやして 信頼して もう一度戦いたかったのだと、改めて実感した。

指示されて殺伐と殺すのではなく、自分なりの意味がある戦いをしたかったのだ。

共に旅をした一ヶ月で覚えた感覚で、まどかは星董の前から飛び出た。背後の冬が力を放つた。

「どうん、と力がぶつかった。
地獄の劫火と赦しが。

「何つ？」

乱舞し、巻き上がり、うねる力の渦の隙間から、星董の驚愕の表情が見えて隠れた。

彼女が驚いたことで少しだけ溜飲溜飲：じゅりんを下げたまどかは、しかしその結果にぎょっとした。

放たれた力の大きさに耐えきれず、一帯の荒れ地が吹き飛んだのだ。

冬の力はあつという間に炎炎：エンを消し去り、星董やその周囲になだれ込む。凄まじい破壊力破壊力：ハコウルだった。

力の性質は赦しながら、そこに穏やかさは一片も含まれない。抉られた大地がクレーターとなり、飛ばされた岩盤が別の平地に小山を作る。

「一、怖え」

ここが何もない場所で良かった。

まどかはしみじみそう思つた。これが街中だつたりしたら、街も人も消し炭だ。だらだらと冷や汗を流しけけ、ふと、集束しかけている力の中央部に気づく。

かつて星董だったもの。

今は碎かれた黒曜石の石像に似ていた。

妖獣を倒した時の断面と同じく血の一滴も流れない塊が、体のパーツを失つた状態で立つていた。頭部も右半分がないが、中身はゼんぶ石。脳も骨も無いのだからますます石像じみていく。

損壊の酷い、黒いビーナス像。

その半分だけの顔の中、左目が細まつた。たぶん、笑つた。

再生が始まつていた。欠けた頭が、顔が、腕が、体が、足が、もとの形を取り始める。

まどかは飛び下り、その首を落とした。クレーターの底に転がり落ちた首は再生をやめ、中途半端に戻つた唇で嘲笑を刻んだ。

「無駄だ。いかにお前の腕が立とうとも、この世界に送り込んだ妖獣が尽きぬ限りわたしは不死」

落ちた首に氣をとられたことかね、胴体側にも頭が生えていた。

「お前はアラナコアか？！」

叫んでみたものの、ヨーロンの声が言い知れぬ恐怖を生み出す。

倒せない事実。無限には耐えられない人間の精神。

知らず、背筋が凍る。

「櫻水様のしあわせも済んだことだし、お前の役割は終わりだ。逃げていいいぞ」

「うるさい。こいつはオレが守る！」

「え？ 嫌ですか。いつの間にそんな話になつてるんですか？」

「……あ？」

「嫌ですって言つたんですね」

彼女が作った大穴の底で、胃の腑^ふさえ冷たくなるような恐怖に耐えて星董^{せいきん}をにらみ据えたまどかの頭上。場に不似合いな、すっと抜けた口調が否定した。

「なんで全拒否…」

「なんとなく」

「～～～ふざけてんなっ！」

思わずクレーターを駆け登つて剣の柄^{つか}で殴つてしまつた。

が、逃げていいとまで余裕を見せていく冥界の上位者は、背を向けたまどかに攻撃したりはしなかつた。もはや余裕どころかイヤミだ。

「そんなつもりはありませんが、だつて嫌じやないですか。どっちかつて言うと、私、守られるより守る側なんですよね。というわけで、折衷案です。同格の立ち位置で、一緒にやりましょう」

「頑張りましょうと言つのは、無意味な分だけたやすいな。闇緑の力を使いこなすのは厄介だが、それだけだ。罪人を滅ぼす劫火は消されても、その力では決定打にはならない。お前たちにはわたしを倒す力はない」

石だつた断面が直り、星董の銀粉をまぶしたような美貌が戻つていた。

一度碎かれただけに、冬に向ける表情には凄みが加わっている。

事実を述べる、星董はただそれだけでまどかの覚悟を傷つける。

このまま消耗戦になれば、負けは確定。冬が殺され、『預かり物』が奪われるのを、黙つて見るしかない未来がすぐそこにある。

だが

だつたら、オレは何のためにここにいる？ 真界の王・櫻水のコマになり、生きている事も悪くないと思わせてくれた冬の邪魔をして、誰の役にも立てずに終わる。

そんなバカバカしい道化でいたいとは思わない。

「相討ちで十分だ」

「死はわたし達の領域。あの世で出会えば後悔するものを」

「お前が地獄の番人か何か知らないが、オレのごだわりはそこじやないんだよ」

「あの、わがやま 静義殿？ 負けるのを前提に話すの、やめましよ」

「……お前つて大物

勝てる要素はどこにもない。

「それとも仏教流・無念無想の境地？」

「新しい剣の流派みたいですねえ」

「ここにこされた。好きな笑顔だった。

「……」

覚悟を決めて剣の切つ先を星董に向けたまどかの耳に、ふいに子守唄のよう柔らかな旋律が届いた。

冬の声。

最近聞いた詠唱。

山櫻桃ゆずらが無限増殖する蟻きじよ娘むすめに対して使つたものだ。作用は、気流流転の阻止。

（これでもう増えないからつ）

山櫻桃の声まで聞こえる気がした。

「そうか！」

まどかは冬の意図を知り、大上段から斬りかかった。

一いつになつた星董は余裕の表情を保つていたが、再生ができないと気づくと、憎悪に染まつた瞳で睨みつけた。右目をまどかに、左目を冬に向かへ、何かを叫びかけ。

彼女が無へと還つたかに思われた時、ふと詠唱が途切れた。

「冬?」

「すいません。さつき山桜桃さんを助ける時に流れ込んで来た知識なんで、断片しか知らないんです。詠唱って、続きが分からぬ時つて、もう一回最初から唱えても効果あるんでしょうか?」

てへ。

と表現できそなとぼけた笑顔に、まどかはキレた。拳を、彼女のこめかみでグリグリと回転させる。

生死がかかっているこの非常時に!

「おまえはっ、どうしてそう抜けるんだ!」

「痛いです痛いです放して」

「痛いです痛いです放して」

二人が大騒ぎしているうちに、左右に崩れかけていた星董せいきんの体がゆらりと揺らめいた。

詠唱が切れたため、足に力が入り、体勢を持ち直す。切断面がくつきかける。

「ちっ」

まどかは距離を跳んで、もう一太刀浴びせた。黒曜石の体は横断され、上半身が地に落ちる。

ついでにクレーターの中へと蹴落としてやった。

これで少しは時間が稼げると思ったのだが。

完全再生するより融合した方が早いと判断した、左右それぞれの腕が動いた。

落ちて穴の底をガサガサと這い回り、這い上がった左手は自分の足を探り当て、獣の素早さで集合を始める。

「てめえは『キカツ！』

クレーターの底に落ちる前に壁に手をついて跳んだ右手だけは、反撃に転じた。

まどかの足首をつかみ、握りつぶす勢いで力を加えて来る。ぎし、と骨が軋んだ。

「！」

剣先を突き立ててもなお離れない。

本体を潰しに行きたくて、動けない。

「わたしがやるー。」

唐突に、細い声が詠唱を引き継いだ。

振り返れば、小さな影と、その左右を守り固める一人の大人のフ
オルム。

山櫻桃の詠唱が響き、星董の右手は力を失った。接合しかけていた上半身もぐらりと落ちる。

「では
。 開緑殿、力を貸して下さい」

巖かに制服の胸元に左手を当てた冬は、釀杖の石突きを地面上に下ろした。

しゃらん、と。

瑠璃や玻璃の割れるような纖細な音が波紋を作る。

その波に碎かれ、今度こそ本当に、星董のすべてが無と違つた。

「 っしゃあああー 勝つたぞおおおつ？」

まぢかは達成感に満ちて、歓声を上げた。ガンガンと地面を踏み固めれば、実感が湧いて来る。

「ツた つ？」

喜びをカラダで表現していたまぢかの視界が、いきなり斜めになつた。

「つお~」

景色が四十五度ほどズレた。

足元の土が崩れて、クレーターの底に雪崩れ落ちていくといふだつた。自分」と。

「つて何だコレ嘘だろおおおおつ？」

40 ホーム、スイートホーム？（前書き）

おつかれさま。

「あんたが年相応のはしゃぎ方をしたのって、初めて見たわ。けつこうバカね」

「三村さん達と一緒に時は、割とこうですけど」

「別にいいだろ。それにしてもどうしてお前らここにいるんだ？危ないから待ってるんじゃないなかつたのかよ」

クレーターから何とか脱出して脱力して、ミラにからかわれて不貞腐れ座り込んだまどかの手から剣が消えた。

「だつて山櫻桃が大丈夫になつたつて言つんだもん」「だつていっぱいいた妖獸の気配が消えたんだもん」

子供のいいわけと同じ口調で、ミラと山櫻桃が応じた。

実際、妖獸は星董の傷修復に使われまくったために、もつ近場にはいない。ここに来るまでの危険度は低かった。

「いいじゃないか。結果オーライってな」
鬼灯が野太い笑みで締めくくった。

「……そだな」

鬼灯の言う通りだ。助けてもらつたのに文句はつけられない。プラナリアな女をしとめるには、詠唱ができる山櫻桃がいなければど

うじょうもなかつた。

ちなみにプラナリアは中学の生物の授業で出て来た、切っても切つても再生する生き物である。ぬめっとした黄土色で、白抜き矢印のような形に一つの点田を描きこんだお茶目な顔をしている。

はは、とまどかの咽喉から止められない笑いが上がった。

生きている矢印は銀色美人とはかけ離れていて、その断絶具合がツボにはまつた。たまに狩りの後、緊張の反動で笑いこけるミリの気持ちが分かつた。

「助けていただいてありがとうございました。でも、いつまでもここにいると危ないと私はいます。この世の妖獣が全滅したわけではありませんから、力の痕跡を追えるモノが来るかもしれません。防御区内へ帰りましょう」

そういう冬の釧杖も、いつの間にか袖に消えていた。

まぢかはグラグラと笑いながら、鬼灯の手を借りて立ち上がる。

一步先に行きかけた冬の手を、山桜桃が走つていつて握った。

困った表情を浮かべかけた彼女は、同じくらいの身長の少女につっこり微笑まれ、苦笑を返す。

「山桜桃つて順応が早いのねー。しかも押しが強い

「……お前がどっち狙いか知らないが、放つとくとあの一人の世界ができるぞ。お兄ちゃんとしては、微妙に複雑な気分だ」

仲良く手をつないで街に帰る少女たちの後ろ姿は可愛いが、その

世界は間違っていると思つ。

山桜桃が冬に懷くのは構わないが、自分を忘れて欲しくない。まどかは、二人の間に割り込んだ。

「山桜桃、サンキュー」

「うん」

「冬は、ケガは？」

「平氣です。助けていただいて、ありがとうございます。一人でなんとか出来ると思ったんですけど、甘かったみたいで反省します。皆さんも神社の妖獣をお願いしたはずなのに、ほとんど怪我がないんですね。凄いです」

「うん。ほめてほめて」

「はい。山桜桃さんにも感謝します」

「感謝はどうでもいいんだけど、一人で行くなよ。これでもオレ、本職なの。とりあえず、ハンターの中でも腕はいい方なんだから一言声をかけるって」

「ありがとうございます」

「……」

冬はふにやつと昔の笑い方で微笑んだが、肯首はしなかつた。

帰りの道沿いにある神社では、保全局が事後処理にあたっていた。局員の数名がまどか達に気付き、片手を上げて来る。

軽く会釈を返したまどかは、惨状を物語る折れた桜の木へと溜め息をついた。

「ま、なんだ。助けてやれなかつたけど、涼湖（りょうこ）つて確信犯だつたんだな。最初から助けなんて要らなかつたんだ。勝手に思い込んでて悪かつたな」

涼湖は孤立を恐れない巫女（みこ）だった。

自分の立ち位置を恥じてなどいなかつたから、まどかが忠告しても、穩便な道など選ばなかつた。

そう、分かつた。

自殺は絶望したからでなく、言つても言わなくとも助けられなかつたのなら、しょうがない。

しうがないと、ようやく思えた。

後悔はまどかの勝手な感傷で、涼湖にはうつとおしかつただけなのだろう。

冥界に送られたのだから聞こえるはずはないが、言えば完全に吹き切れた。

ふん、と満足してまどかがまた歩き出す後ろで、鬼灯が頬をかいだ。

「……イイ気分などこりに水を差すよつで悪いんだが、それについて冬ちゃんが引っかかる事を言つてたよね。冥界に行くには時期が悪いって。君がそういうの分かる子なのはムリヤリ納得したんだけど、こっちも巻き込まれたことだし、説明してほしいなあ」

「お兄ちゃん！ そんな言い方つて」とがめかけた山桜桃の肩に手を置いた冬は、透徹した微笑を刻んだ。

「どこか落ちついて話ができる場所、ご存知ですか?」

41 ぶつちやけ話・冬 その1

落ちつけて、かつ妙な話ができるといいなどあまりない。

まどかは鬼灯きとうの白丸に上がり込んだ。癖でコートをソファの背に放り投げたら、ポケットに入り込んでいた砂がばらまかれてミリにて怒られた。

こつもの日常。

「そこ！ 平和そうな満たされた顔してないで、服を脱いで玄関でバサバサ振つて来てちょうだい。同じく砂だけの冬はシャワー」
「え、私はこのままで」
指をさして指示をとばすリラ逆らつた冬は、星董せいきんを超える迫力で睨みつけられて小さくなつた。

「！」あたしが掃除してるの。これ以上砂を落としたら、問答無用でお風呂場に連れてくわよ。お湯かけるわよ。嫌なら、自分でさつととの傷口洗つて来なさい」

すいすい」とまどかが命令に従つてからリビングに戻ると、山櫻桃やまざくらが台所で鼻歌を歌いながら作業をしていた。のぞき込むと、狩りの後の甘味を焼き始めている。

「今日の、何」「ケーキ。『祝・生還』の文字をいれるの」

スポンジはすでにオープンレンジの中で、山桜桃は文字用のチョコを湯せんで溶かしながら生クリームを泡だてている。まどかは彼女の頬にはねたクリームを指でとつて、味見をした。

「うまい」

「良かった。じゃあもひとつ美味しいるために、さやか静義、イチゴを買ってきて欲しいかも」

「……」

まどかは何気に傷ついた。

今までの菓子は絶対に自分に作ってくれていたと思う。だが今回のは明らかに冬のためだ。イチゴの例えを覚えていたのだ。

「……山桜桃、オレ謝ったよな？ あと、冬にも謝つておべから」

「うん、そうだね」

一片の曇りもない笑顔を向けられたが、まどかの言いたい事を理解したとは思えなかつた。

ぽん、とミラがまどかの肩に手を乗せた。沈痛な面持ちで左右に首をふられた。まるでトドメだつた。

「（）愁傷サマ。ねーえ鬼灯、静義と苺買つて来て。あとー、焼肉の肉とニラとキャベツと卵。あ、お米も。十キロ入りの」

「（）で、なんでとか増えてるとか言つてはいけない。この家のルールを熟知しているまどかは無言で頷いて、巻きこまれた鬼灯と共に家を出た。

ジュースや酒も買い込んで帰つて来た時には、冬もリビングにいた。

すり傷や打ち身の手当をされて、あちこち絆創膏や湿布を貼られていた。荷物を山桜桃に渡してから隣に座れば、消毒液がひどく臭つた。

「やっぱりケガ、ひどかったのか」

「これくらい、酷いうちに入りませんよ。それより、ええと、力の種別の話をするんでしたよね。魔法使いのミラさんもそうだと思うんですけど、あちらの方でも得意分野があるんですよ。星董殿のは炎限定でしたが、例えば私のように何でも適当に利用するというのもありで」

「……冬ちゃん、頼むからボケないでくれる？ 僕が聞きたいのは、君が置かている状況。冥界が取りこみ中って、どういう事かな。そして、どうして君がそれを知っているのかな」

荷物を台所に置いたついでにコーヒーを運んで来た鬼灯は、狩りの作戦を立てている時の表情で訂正した。

ミラの隣りに腰をおろした彼の大きな手は、騒ぎやすこミラの手の上に乗せられており、『キレるの禁止』と告げていた。

冬が人指し指を額にあてて考え込んだ。

「やつでした。迷惑料のお支払い。絶対に内緒ということ、バーンと公開しちゃおうと思つたんでした」

とぼけた表情で、軽い口調で彼女が言つた内容は。

「ちょっと前に、冥界で大戦争が起こりました。それで閻魔大王が交代したんです。さんだつ簒奪さんだつでした。なので、現在も死者を裁く現場では、こまごまとした混乱が起きてるんです」

いきなりの爆弾発言だった。

42 ぶつちやけ話・冬その2

マイカイで、サンダツがありました。

「 「 「はい？」」

菓子作り中の山桜桃を除く三人の声が重なった。

「あの世と俗に言われますけど、天界と冥界つて本当にあるんですよ。そこ冥王の地位をめぐって、反乱が起きたんです。さきほど星董殿は、反乱を起こし新たな閻魔王となつた櫻水殿が率いる実力主義者の一派です」

三人の顔に、『これは現実の話か、それとも今朝見た夢の話だろーか?』という疑問が非常に分かりやすく出た。

「現実ですよ。負けてしまつた先の閻羅王・閻緑殿は逃げざるを得なかつたんです。で、私が彼をかくまつてこの世に来たわけです。私と閻緑殿を探すために、星董殿が妖獸をこの世に放つとは予想していましたが」

今までは、個々人が界を越えて関与することはあつても、故意に大規模な干渉を起こすなどあり得なかつた。

それぞれの界は適度なエネルギー値を持ち、極端な加減は崩壊の契機となる。

界の上位者はそう知るが故に、それがどんなに簡単な方法でも、

大軍を他の界に送り出してこなかつた。

が、櫻水と星董は、今回その不文律を無視した。

おそらく賭けではない。

冥界の妖獣を地界に移動させる代わりとして、妖獣に殺された人間が地界から冥界へと流れ込むのを計算していたのだ。

それなら、一時はエネルギー値が偏つても、すぐに修正される。

妖獣を何百匹送り込んだら平衡になるか、計算した綿密さ。誰もやつたことがない計画を実行する大胆さ。それが櫻水の本領だ。

「ですから、この世の方には申し訳ないと思ってるんですね。三界はともに魂の流転場所とは言え、元々は他の界の王権争いに巻き込んじやつたわけですし」

「ううん。それ、冬さんのせいじゃない。謝らないで」

……そうかもしけないが、だからといって山桜桃が冬の手を握つてキラキラお目々で迫る図は見たくなかった。

まどかは生ぬるい視線を外し、パウンドケーキの焼け具合を気にする。

さつきからいい匂いが漂つてきているが、まだ開けてはいけないのだろうか。思考も逸れかけたが、ふと引っかかつた。

「あれ？ 死んだのって、冬よりオレが先だよな。なのにどうして

櫻水がオレに、お前を攻撃させる嫌がらせの暗示をかけられるんだ？」

尋ねてから、まだ鬼灯たちには前世の話をしていなかつたと気づいた。

まどかも冬を見習い、ぶつちやけトークを行つ。

さつきから衝撃の事実を暴露されまくつている鬼灯とリリィは、そのカミングアウトに頭を抱えた。

「あんたねえ、隠し事をするのまではガマンするけど、とっくに死んでるはずの前世の知り合いを探すの、止めてくれる？ こういう特殊な事態だからアレだけど、普通見つからないから。いないから。ああもう。それとなく気にかけて探してたあたしの苦労、ムダだつた分と合わせて払つてもらうわよ。ドンペリー一本。妥協して白で、酒屋の特売で許してあげる」

「……横暴」

「なんですか？」

「なんでもアリマセン。女王さまの御心のままに」

地獄耳なリラとの言い合ひを避けて、まどかは白旗を掲げる。リリィや三村といった、屈折した人の良さは嫌いではない。

「時間差の理由は、静義殿は隠密として人を殺した償いの時間が必要でしたが、私は死後すぐに天に移ったためです。いわゆる徳の差です。で、天においても、櫻水殿のやりようは非難の対象となつてましたから、まあ、なんだかんだで私が」

「そこ！ はしょらない！」

ハツキリしないのが嫌いなミラが、びしりと指をさす。

リビングに沈黙が落ちた。
言いにくい事らしい。

43 ぶっちゃけ話・冬 その3

では、と冬は言った。

まず知つておいて欲しいのは、天・地・冥のいずれもそれぞれの価値観を持つているという事。

地界の常識は、他の二つでは通用しない、と。

「天では人は、己の高みを目指し、永遠に自助努力をつづけます。途中でめげた方は墮天して地界へ来ます。その地界ですら罪を犯した人は、冥へ行きます。それは徳の高低であると同時に、性格分類でもあるんです」

「つて？」

「暴れるのが好きな人は、砂場代わりに冥で遊びましょう。思索が好きな人は、図書室ならぬ天で黙考しましょう、みたいな。性格判断的には、天界人は頑固で誇り高く、融通が利かないタイプです」

……星座占いか血液型占いました?
説明を求めたミラさえもぽかんとした。

天国のイメージもどことなく違う。

羽根の生えた天使が飛び回るのではなく、求道者の集団が説教をしている様が思い浮かぶ。

坊主や宣教師が大量に住んでいる感じか。

なにやら抹香くさく面倒臭そつな。

「なので、天が櫻水殿おうすいじんを許せないとと思つ理由も、私たちの予想とはズレます」

「と言つと」

「冥は本能に従う闘争を是ぜとする世界ですから、常に騒乱を抱えています。公平な裁きを行う王を生ぬるいと、謀反むほんにより退位させる事態もよくあること。なので、天はそこには触れません」

言葉を探しつつ、冬は紅茶に口をつけた。

「天と冥という呼び方が定着したのは最近です。本来は甜てん、茗めいといいました」

甜も茗も、もともとは草木を表わす单語だ。

地と併せて、どの界もぺんぺん草や雑木が生えている印象だ。

有為転变・有象無象の、素朴なイメージ。

「甜は、櫻水殿えんすいおんが閻羅王の座さんだつを篡奪さんだつする前から、勝手に茗を冥と改めたことが気に入らないのです」

「気に入らないって……？」

「張りあつて天を名乗つていますが、界の名乗りを勝手に変えるような不遜な輩ふそん やからを王と認め、共に会議の席に着くなどまつびらだと…」

…

「　「　「はあ?」「

世界どんづか（人間にとつての）あの世一つを巻き込んだ大問題
だつたはずなのに、いきなり話がスケールダウンした。
まるで子供のケンカである。

沈黙が落ちた。

冬は居心地が悪そうに身じろぎした。

「そういうわけで、具体的には何もしませんが、天は前の閻羅王で
ある閻緑殿を応援しています。の方は、会議で天地の代表に折り
あえる程度には謙虚ですから。私も個人的にお世話になつていまし
たし、閻緑殿を匿つくらいの許容量はありましたから、地界へ下り
る役に立候補しました」

リビングにはまた沈黙。

今度のは呆れたのではなく、事態を正確に把握したからだつた。

「お前……ふちつと天界のヒト？」

「静義つてバカ？ 地に下れば人間、つてそうじゃなくて。あたし
の勘違いでなければ、それつても凄く異常事態よね！？」

「冬ちゃんの『預かり物』つて、もしかして……」

ミラと鬼灯きとうがそろつて責せざめるのは、非常に珍しかつた。
珍しきれてデジカメで撮つておきたい気がしたが、しかしまどか
の顔色も似たり寄つたりだ。

ボケてみたのは事実を認めたくない逃避行動。
証拠写真をとっている余裕はどこにもナイ。

「闇緑の……前の闇魔大王の『力』じゃなくて
『ご本人です』

いっくり。

うなずく様子にウソはない。

冬は、制服の胸元に手を当てる。

そこに『預かり物』である闇緑の魂を抱えているのだ。

ひーっと、まどか達は手を取り合つてソファの隅でかたまつた。

「そうかあ、だから隠すのね。そんな大きなヒトを匿つてたら、ち
よつと分かる人にもバレちゃうもんね。わあ、冬さん凄ーい

世の中と乖離^{かいり}している山櫻桃だけが、平然と拍手をした。

44 リビングでお茶を その1

オープンレンジが出来上がりの音楽をかなでた。

美味しそうな匂いまでしてきて、まるで本当に手放しで喜べる状況を手に入れたと錯覚しそうだ。まどかはクラクラする頭を抑えた。

「凄いのは凄いんだが、大丈夫なのか?」

「前の閻魔大王の魂つていうか存在が冬ちゃんの中にいて、冥界を制圧した奴らが狙つてるんだろう。あっちとしては禍根を残さないようにな確実に処分しておきたいと思つてるはずだよねえ」

鬼灯も頭を抱える。

「敵、あと何人だ?」

まどかは必死に『あの世』を思い出してみた。

白洲のむこう、御簾の奥。

冥界の新たな王の側には、複数の側近がいた。

一人は先ほど倒した星堇せいきんだが、残りが出てこないとも限らない。それとも、これまで以上に妖獸を地に放つて、容赦ない炎あぶり出しを行うか。

真剣に眉を寄せたまどかや鬼灯に対し、冬はへにゃんと笑いかけた。

「まあ、たぶん大丈夫です」

「お前な」

「大丈夫ですよ」

繰り返した声に、本気が混ざった。

どこにでもある茶色の瞳が、静かな余裕を湛えていた。

彼女はそう信じている。

きっとまた裏付けがあるのだろう。

でも 自分は、他人を信じられない。
自分自身は、もつと信頼に値しない。

頼れと言いたかったはずだが、こんなでは、声をかけてもらえる
わけがないと気づいた。

「お待たせしました」

テーブルに、生クリームと苺で飾られたケーキが置かれた。

中央には『祝・生還』の文字。

ついでに、山櫻桃^{やすらら}が認識したばかりの全員の似顔絵が、チョコペ

ンでデフォルメして描かれていた。気合いが入っている。

まどかの手元には、マンガの主人公っぽい絵のピースがやつてき
た。

これが山櫻桃の見たまどからしい。

だが、自分は主人公にはなれない。その役は、どこにも特徴がなく、一番簡単な点と線だけで描かれた冬であるべきだ。

まどかは山櫻桃を泣かせ、鬼灯とミラにも隠し事をし、冬には剣
を向けた。

罪ならいくらでも数えられるのに、信じてもらえる覚えは何一つ

ない。

まどかは深々と頭を下げかけた。
が、冬が笑う方が早かった。

「分かつてないですね。 静義殿わやきがいるから、こいつにお茶をいただけてるんですけど。謙虚すぎるのも考え方かと」

ヘタレていたのが、どうして分かつたんだ？

まどかは急いで普通の表情を作った。
男として互いに分かりあえる鬼灯はともかく、リリや山桜桃には見栄をはついていた。

「あんた達なんなのー。この会話の脈絡みやくろくのなさ。しかも静義が謙虚つて、ウソでしょ。どいつもこいつもどうやら、そういう解釈が成り立つの？」

「静義は子供だと思う。好きな子はいじめるの。わたしも、冬さんも。それで、謙虚なんじゃなくて、拗すすねてるだけだと思う」

「ほほ、とまどかはパウンドケーキの欠片けっぬでむせた。
見栄以前の問題だった。」

「誰が子供だ苛めた覚えはない拗ねてもいい。」

と、文句をつけたいことは山のようにあつたが、げほげほと咳が出るだけだ。本気でケーキの破片が気管へ入ってしまった。

「役に立つてゐる自覚がないのが謙虚なんですよ。それはさて置きまして、櫻水殿の追撃に関してですが、妖獣の移動が故意なら、何とかできると思つんですね」

「つまり？」

鬼灯は、背の高い人が小さい人を肩に乗せている線画を崩しかねて、フォークを持つ手をとめたまま冬に問う。

「これまでの界渡りの痕跡を調べて、妖獣大量移動の術式を分析します。分かれば阻めます。追加の妖獣がこちらに来ず、かつあちらにも戻れなければ、エネルギーの不均衡によつて揺らぐのは冥界 자체です。界崩壊の危険を冒してまで妖獣を送る方法を続けるとは思えません」

「なるほど。こっちの世界も不均衡になるけど、共倒れの危険を冒しあしないか。けど、個人の移動なら当たり前に行われていたんだろう。さつきの銀色プラナリアみたいな殺し屋は来るんじゃないかい？」

「来るでしょうが、妖獣を使つた再生が有限なら、闇緑殿の力を使える私が有利です」

フォークを持つまま考え込んだ鬼灯は、やがて頷いた。

「方法は正しい。問題は、冬ちゃんが移動術を阻めるかどうかだな」

「そこはやつてみないと分かりません」

45 コメントでお茶を その2

「そこはやつてみないと分かりません」

正直すぎる答えに、まどかは苦笑した。

さりげなく手を伸ばして隣のケーキにフォークを突き刺す。軽く振つてイチゴを落とすと、一口で食べた。

鬼灯との相談に集中していた冬は、いきなり空になつた皿をきょとんを見ると、特に気にせずに残されたイチゴを食べた。

Jの執着のなさが、彼女の美点であり、欠点でもある。苦労を苦労と思わず、他人に頼らず自己完結するのだ。

ケーキが取られたのには文句を言つべきだし、大事件には他者を巻き込むべきだと、まどかは思つ。

「提案。冬をうちのチームに入れ。それでオレらが調査を手伝つ」「突然どうなさつたんですか?」

「どうもこつもない。対冥界としてはもう大田立ちしたんだし、こうなつたら一回も十回も同じだ。術式を調べるには外に行かなきやならないし、さつきみたいに混乱してない限り、ハンター以外が外出るのは許可されてない」

そして何より、そうすれば冬が一人で外に出て行くのを防げる。たまにヘタれるまどかでも、信頼を向けてくれて認めてくれる友

人が危険に突つ込んで行くなら、露払いをするくらいの意地はある。

「冬ちゃんと一緒に……。嬉しい……！」

ケーキに関してのまどかの蛮行を忘れ、ぱあっと山櫻桃^{やまざくら}が表情を明るくした。

「そうだな。冬ちゃんはいい子だ。山櫻桃と同じくらいいい子だ。そんな女の子に全部任せたら、お兄ちゃんとして名折れだよなあ。よし決定。そうしよう」「うわー。まともに計画考へてたのに、鬼灯の判断基準って結局それ？ あんたのパソコンは一生治んないの？ いいけどー、またいつちやつたあの世からの殺し屋が来たら、あたし達と一緒にいれば冬の安全度は高くなるからいいけどー、鬼灯はいい加減自立して」

当人を置いて進んで行く話を、冬は茫然と聞いていた。

「あのう」

「辞退はナシ。お前から同格って言つた以上、遠慮は許さない。せめてオレが昔より進歩するまで、見てろ」

「意味わかんなーい」

ミヲが呆れて首を左右に振つた。金茶色のカールが揺れる。

「わかんなくていい」

「ダメっ」

まどかが話の合間に、鬼灯のケーキまで狙つているのに山櫻桃が気づいた。

ぱたぱたと両手を振って邪魔をする。

「ホントお前成長期の食べざかりだなあ
苦笑した鬼灯が、自分から二つに分けて、片方をまじかの皿へと
入れてやつた。

あつとこう間に、危機感のない午後ができあがつた。

「……」

冬はくにちゃんと笑うと、まどかの皿に入れられたばかりのケーキ
をぱくりと食べた。

「ええええっ、お前そういう事するつ？」
「しゅつて仰つおっしゃたのは、静義殿だと思います。遠慮するな、つて」
「いや、言つたけどこのタイミング！？」

提案拒否は、されなかつた。

45 コメントでお茶を もの2（後書き）

長かったです。
もう少しで終わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4045y/>

問い合わせ「探しものは何ですか」 答え「転生前の友人です」

2011年12月20日17時45分発行